

大分市 埋蔵文化財調査年報

vol.7 1995年度



The Board of Education in Oita City 1996

大分市
埋蔵文化財調査年報

vol.7 1995年度

The Board of Education in Oita City 1996

序 文

本年報は、平成7年度に大分市教育委員会が行いました発掘調査の概要を収録したものです。

本年度も市内各所で貴重な発見が相次ぎました。なかでも古代（奈良・平安時代）のものには目を見はるものがあります。

民間の宅地造成に伴って調査が行われた猪野新土井遺跡では、溝に閉まれた奈良～平安時代の建物群が発掘され、猪野地区から小池原地区にかけて広い範囲に古代の遺跡が展開する事実が明らかとなりました。また、これまで豊後国府の推定地のひとつと考えられてきた羽屋地区において大型の竪立柱建物跡群が確認され、豊後大分の古代史上最大の課題とされる豊後国府の所在解明に一石を投じるような発見がなされています。

本書が郷土の歴史を解明する一資料となり、文化財の保護と理解のために活用されますことを心より願いたします。

最後になりましたが、当市の文化財行政に対してご協力いただきました皆様、諸機関に心からお礼申し上げます。

平成8年12月15日

大分市教育委員会
教育長 清瀬 和弘

例 言

1. 本書は大分市域において大分市教育委員会が平成7年4月1日から平成8年3月31日の間に行った埋蔵文化財に関する事業内容をまとめた年報である。
2. 平成7年度における調査地点は表2および第3図に示している。
3. 本書の執筆は各担当者が分担して行い、文末に執筆者名を記している。
4. 第IV章受贈図書目録は、平成7年4月1日から平成8年3月31日の期間中に大分市教育委員会文化財室に受贈された書籍等を掲載した。
5. 第IV章受贈図書目録の作成は新藤美由紀・木ノ下麻矢（大分市教育委員会文化財室臨時職員）による。
6. 遺構・遺物の実測、図版の作成等において、幸しのぶ・井口あけみ・奥野玲子・桑由美子・堤美智代・山下順子・飛高裕子・西嶋スミエ・平田美智子・丸井久美子（以上大分市教育委員会文化財室臨時職員）の協力を得た。
7. 本文中に掲載した現場写真は各担当者が撮影した。
8. 本文中に掲載した地図は、大分市都市計画図を使用した。（縮尺は1万分の1である）
9. 本書の編集、校正は巖城・坪根の他、井口が行った。

目 次

第Ⅰ章	大分市教育委員会文化振興課文化財室概要	1
1	沿革	1
2	組織	1
3	大分市文化財調査委員会	2
第Ⅱ章	平成7年度事業概要	4
1	開発事前審査事業	4
(1)	平成7(1995)年度の概要	4
2	発掘調査事業	6
3	教育普及活動	11
(1)	大分市文化財だより(1995年号)の発行	11
(2)	研修参加	11
第Ⅲ章	発掘調査内容の概要	12
I	下郡道跡群第58次調査 E x _m -n-15地点	12
II	下郡道跡群第59次調査 E x _o -p-16地点	14
III	下郡道跡群第61次調査 H x _p -19地点	16
IV	下郡道跡群第63・66・67次調査 F x _n -o-9地点	18
V	下郡道跡群第65・69次調査 E x _p -16地点	20
VI	下郡道跡群第68次調査 B x _e -15地点	22
VII	下郡道跡群第70次調査 E x _n -o-16地点	24
VIII	下郡道跡群第60次調査 J x _p -8地点	27
IX	下郡道跡群第71・76次調査 E x _j -k-13地点、k-13地点	28
X	下郡道跡群第73次調査 H x _q -16地点	32
XI	下郡道跡群第74次調査 H x _s -10地点	34
XII	下郡道跡群第75次調査 H x _r -21地点	35
XIII	下郡道跡群第80次調査 J x _p -10地点	38
XIV	横尾道跡群第43次調査 D-39、E地点(有田道跡)	40
XV	横尾道跡群第45次調査 B-11地点(東中町道跡)	42
XVI	横尾道跡群第46次調査 B-39・41地点	44
XVII	猪野新土井道跡第1・2次調査	46
XVIII	府内城・城下町跡第6次調査	50
XIX	府内城・城下町跡第7次調査	53
XX	庄ノ原道跡	55
XXI	滝尾守國横穴墓群第1・2次調査	58
XXII	葛木道跡	62
XXIII	庄ノ原道跡	64
XXIV	羽屋・井戸道跡	66
XXV	城原D道跡	68
XXVI	庄ノ原・片面道跡	70
XXVII	猪野道跡	71
XXVIII	貝波山道跡	72
XXIX	野田道跡	73
第Ⅳ章	受贈図書目録	74
1	調査報告書	74
2	定期刊行物・図録等	83

目次

第1図	地域区分図	4
第2図	地区別事前調査割合	5
第3図	調査道路位置図	10
下郡道路群第58次調査 E区m-n-15地点		
第4図	調査地点位置図	12
第5図	道橋配置図 (1/400)	12
第6図	SK016出土遺物実測図 (1/4)	13
下郡道路群第59次調査 E区o-p-16地点		
第7図	調査地点位置図	14
第8図	ST016出土遺物実測図 (1/3)	14
第9図	道橋配置図 (1/200)	15
下郡道路群第61次調査 H区p-19地点		
第10図	調査地点位置図	16
第11図	道路状況補完図	16
第12図	道橋配置図 (1/200)	17
下郡道路群第63・66・67次調査 F区n-o-9地点		
第13図	調査地点位置図	18
第14図	第66次調査区全景	18
第15図	道橋配置図 (1/400)	19
下郡道路群第65・69次調査 E区p-16地点		
第16図	調査地点位置図	20
第17図	道橋配置図 (1/300)	20
第18図	SF001出土遺物実測図 (1/4)	21
下郡道路群第68次調査 B区s-15地点		
第19図	調査地点位置図	22
第20図	SE001平面・断面実測図 (1/30)	22
第21図	SE001出土遺物実測図 (1/4)	23
第22図	道橋配置図 (1/200)	23
下郡道路群第70次調査 E区n-o-16地点		
第23図	調査地点位置図	24
第24図	調査区全景 (北から)	24
第25図	道橋配置図 (1/400)	24
第26図	出土遺物実測図 (1/6)	25
第27図	SK098遺物出土状況	25
下郡道路群第60次調査 J区p-8地点		
第28図	調査地点位置図	27
第29図	道橋配置図 (1/200)	27
下郡道路群第71・76次調査 E区j-k-13地点、k-13地点		
第30図	調査地点位置図	28
第31図	71次調査区全景	28
第32図	ST081遺物出土状況	28
第33図	道橋配置図 (1/400)	29
第34図	出土遺物実測図 (1/4)	30
第35図	SE309完備状況	30
第36図	SE316完備状況	30
下郡道路群第73次調査 H区q-16地点		
第37図	調査地点位置図	32
第38図	調査区全景	32
第39図	SD001検出状況	32
第40図	道橋配置図 (1/200)	33
下郡道路群第74次調査 I区s-10地点		
第41図	調査地点位置図	34
第42図	道橋配置図 (1/200)	34
第43図	出土遺物実測図 (1/4)	34
下郡道路群第75次調査 H区r-21地点		
第44図	調査地点位置図	35
第45図	調査区南壁上層断面図 (1/100)	35
第46図	道橋配置図 (1/200)	36

第47図	出土遺物実測図 (1/6・1/4)	37
下郡遺跡群第80次調査 J区p-10地点		
第48図	調査地点位置図	38
第49図	調査区全景	38
第50図	遺構配置図 (1/100)	39
横尾遺跡群第43次調査 D-39、E地点		
第51図	調査地点位置図	40
第52図	掘立柱建物跡完備状況 (北より)	40
第53図	SX001遺物出土状況 (南より)	40
第54図	遺構配置図 (1/200)	41
第55図	SK001遺物出土状況 (東より)	41
第56図	SK001出土遺物実測図 (1/3)	41
横尾遺跡群第45次調査 B-11地点		
第57図	調査地点位置図	42
第58図	調査区全景 (西より)	42
第59図	遺構配置図 (1/100)	43
横尾遺跡群第46次調査 B-39-41地点		
第60図	調査地点位置図	44
第61図	地層横転遺構検出状況	44
第62図	SK001検出状況	44
第63図	SK001平面・断面実測図 (1/20)	44
第64図	SK001出土遺物実測図 (1/3)	44
第65図	遺構配置図 (1/400)	45
猪野新土井遺跡第1・2次調査		
第66図	調査地点位置図	46
第67図	調査区全景	46
第68図	遺構配置図 (1/600)	47
第69図	SH005出土遺物実測図 (1/4)	48
第70図	SH006出土遺物実測図 (1/4)	48
第71図	SD005出土遺物実測図 (1/6)	49
府内城・城下町跡第6次調査		
第72図	調査地点位置図	50
第73図	山里丸調査区遺物出土状況	50
第74図	遺構配置図 (1/1000)	51
第75図	発掘調査状況	52
第76図	冠木門礎石検出状況	52
府内城城下町跡第7次調査		
第77図	調査地点位置図	53
第78図	塗師町・寺町境検出状況 (北より)	53
第79図	焼き雜き文字が施された磁器	53
第80図	遺構配置図 (1/250)	54
庄ノ原遺跡		
第81図	調査地点位置図	55
第82図	基本土層と地層横転痕跡上層模式図	55
第83図	遺構配置図 (1/400)	56
第84図	地層横転痕跡 (1/150)	57
滝尾寺間横穴墓群第1・2次調査		
第85図	調査地点位置図	58
第86図	調査位置図 (1/2500)	58
第87図	1・2号横穴墓 平面・断面実測図 (1/80)	59
第88図	3～6号横穴墓 平面・断面実測図 (1/80)	60
第89図	五輪塔実測図 (1/4)	61
墓本遺跡		
第90図	調査地点位置図	62
第91図	調査区全景	62
第92図	遺構配置図 (1/100)	62
第93図	SH001完備状況 (北より)	63
第94図	出土遺物実測図 (1/4)	63
第95図	壁溝断面観察図	63

第96図	遺物出土状況	63
第97図	SH001平面・断面実測図(1/60)	63
庄ノ原遺跡		
第98図	調査地点位置図	64
第99図	調査区位置図(1/5000)	64
第100図	SX004出土遺物(1/3)	65
第101図	西側調査区遺構配置図(1/200)	65
第102図	調査区より蓬萊山古墳を望む	65
第103図	東側調査区遺構配置図(1/200)	65
羽屋・井戸遺跡		
第104図	調査地点位置図	66
第105図	須恵器出土状況	66
第106図	出土遺物実測図(1/3)	66
第107図	遺構配置図(1/400)	67
城原D遺跡		
第108図	調査地点位置図	68
第109図	調査区全景	68
第110図	SD015北側土層	68
第111図	SD015南側土層	68
第112図	SD015完掘状況	69
第113図	ST005供献土器出土状況	69
第114図	遺構配置図(1/200)	69
庄ノ原・片面遺跡		
第115図	調査地点位置図	70
第116図	遺構配置図(1/250)	70
猪野遺跡		
第117図	調査地点位置図	71
第118図	遺構配置図(1/200)	71
貝登山遺跡		
第119図	調査地点位置図	72
第120図	谷状遺構(SX001)土層断面図(1/80)	72
野田遺跡		
第121図	調査地点位置図	73
第122図	調査地点位置図(1/10,000)	73

表目次

表1	開発事前審査件数一覧	5
表2	大分市平成7年度発掘調査地一覧	7
表3	大分市平成7年度試掘調査地一覧	8

第Ⅰ章 大分市教育委員会文化振興課文化財室概要

1. 沿革

昭和51年4月1日	大分市教育委員会社会教育課内に文化財係を設置
昭和59年6月28日	大分市教育委員会社会教育課文化財係を大分市教育委員会社会教育課文化財室に改組
平成5年4月1日	大分市教育委員会文化振興課文化財室に改組

2. 組織

文化振興課	課長	工藤久典
	参事	秦政博
文化財室	室長	堀和則
	主査	佐藤宏明
	専門員	讃岐和夫
	指導主事	後藤典幸
	主任技師	塔鼻光司
	主任技師	坪根伸也
	主事	徳丸ひとみ
	技師	池邊千太郎
	技師	塩地潤一
	嘱託	杉崎重臣(平成8年度～)
	嘱託	新藤美由紀(平成8年度～)
	嘱託	中西武尚(平成8年度～)
	高速道路対策室付	文化財調査員(臨時) 大野康弘(平成8年度～)
		文化財調査員(臨時) 奥村義貴(平成8年度～)

文化財室
概 要

大分市文化財室設置規則(抜粋)

昭和59年6月28日教育委員会規則第5号
改正昭和62年9月29日教委規則第16号
平成5年3月30日教委規則第13号

(設置)

第1条 文化財行政の円滑な推進を図るため大分市文化財室(以下「室」という。)を設置する。

(組織)

第2条 室は、教育委員会事務局文化振興課に所属するものとする。(平5教委規則13・一部改正)

(分掌事務)

第4条 室の分掌事務は、次のとおりとする。

- (1) 文化財調査委員に関すること。
- (2) 文化財に関すること。
- (3) 文化財保護思想の普及啓蒙に関すること。

附 則 抄

(施行期日)

1 この規則は、昭和59年7月1日から施行する。

附則(昭和62年教委規則第16号)

この規則は、昭和62年10月1日から施行する。

附則(平成5年教委規則第13号)

この規則は、平成5年4月1日から施行する。

3. 大分市文化財調査委員会

大分市文化財調査委員会委員 (平成8年4月1日現在)

	【氏 名】	【勤務先・職名】	【担 当】
委員長	佐藤 真 一	元荷揚町小学校長	動植物
副委員長	豊田 寛 三	大分大学・教授	近世
	北野 隆	熊本大学・教授	建造物
	日高 稔	県職員第2課・課長	地質鉱物
	橘 昌 信	別府大学・教授	考古埋蔵
	橘 本 操 六	大分大学非常勤講師・前県総務課参事	中世
	西別府 元 日	広島大学文学部・助教授	古代
	宗 像 健 一	大分県立芸術会館・課長	美術
	友 永 尚 子	大分県立芸術会館・主任学芸員	工芸
	小 泊 立 矢	大分県立先哲史料館・副館長	民俗

大分市文化財調査委員会条例

昭和51年3月29日条例 第4号
改正 平成4年12月21日条例 第41号

(設 置)

第1条 地方自治法(昭和22年法律第67号)第138条の4第3項の規定に基づき、大分市教育委員会(以下「教育委員会」という。)に大分市文化財調査委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(任 務)

第2条 委員会は、教育委員会の諮問に応じて、文化財の保存及び活用に関する重要事項について調査審議する。

(組 織)

第3条 委員会の委員は、10人以内とし、学識経験者のうちから教育委員会が委託し、又は任命する。

2 委員は、非常勤とする。

(任 期)

第4条 委員の任期は、2年とし、その欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。
ただし、再任を妨げない。

(委 員 長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員が互選する。

2 委員長は、委員会の会務を総理する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代行する。

(会 議)

第6条 会議は、必要に応じ、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

3 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(部 会)

第7条 委員会に、教育委員会規則の定めるところにより、部会を置くことができる。

(庶 務)

第8条 委員会の庶務は、教育委員会文化振興課において処理する。(平4条例41・一部改正)

(委 任)

第9条 この条例に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則 抄

(施行期日)

1 この条例は、昭和51年5月1日から施行する。

附 則(平成4年条例第41号)抄

(施行期日)

1 この条例は、平成5年4月1日から施行する。

第Ⅱ章 平成7年度事業概要

1 開発事前審査事業

(1) 平成7(1995)年度の概要

表1は平成7年度における開発申請内容を示したものである。

平成7年度の申請総面積は5,576,204.09㎡、総申請件数300件を数える。

その内訳は、大規模土地売買等の届出数90件、開発行為許可申請84件、事業計画事前審査願1件、開発計画事前審査願12件、宅地造成工事許可申請16件、地方住宅供給公社法第28条及び宅地造成等規制法第11条協議2件、市街化調整区域における大規模開発2件、開発行為変更許可申請1件、開発行為事前審査1件、岩石採取計画の認可申請1件、墓地経営に関する事前審査1件、土地売買等の届出89件である。これを平成6年度の申請内容と比較すると、総件数は約160%、総面積約335%と大幅な増加がみられる。

次に地域(エリア)別の特徴的な傾向について触れる。ここ数年来の地域別動向として際だっているのが、大分市街地域(A)での件数ならびに申請面積の急増である。

この地域は近世府内城下町跡、中世大友城下町跡をはじめ、豊後国府最有力推定地である上野・古国府地域を擁しておりいわゆる重要遺跡の密集する地域に相当する。

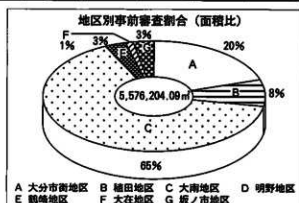
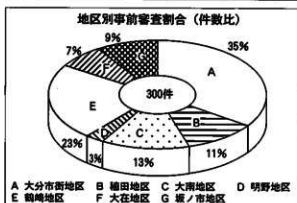
これまでの断片的な調査においても、複数の文化面の存在が随所で確認されるなど他地域の遺跡内容とは、遺跡密度の上で、大きな違いをみせている。これらの点は、このエリアでの調査事例の増加が調査期間の増長に直結することを意味し、これにより今後発掘調査に要する期間が倍加していくものと考えられる。



第1図 地域区分図

表1 開発事前審査件数一覧

地区名	A-大分市街地区	B-植田地区	C-大南地区	D-明野地区	E-鶴峰地区	F-大在地区	G-坂ノ市地区	合 計
【大規模土地売買等の届出】								
件数	30	7	11	2	21	9	10	90
面積 (㎡)	81,213.99	11,230.03	297,491.71	3,844.95	63,249.23	16,662.96	57,779.76	531,662.63
【開発行為許可申請】								
件数	30	9	11	3	24	1	6	84
面積 (㎡)	283,097	261,811.94	15,879.77	4,410.16	70,803.07	5,876.05	25,000.91	666,988.9
【事業計画事前審査】								
件数	1							1
面積 (㎡)	220,611.68							220,611.68
【開発計画事前審査】								
件数	5	1	4		1		1	12
面積 (㎡)	215,190.4	9,988.76	2,119,876.46		7,304		18,460.72	2,370,768.34
【宅地造成工事許可申請】								
件数	4	6	1	1	4			16
面積 (㎡)	11,842.79	18,414.36	999.81	371.57	3,173.02			34,801.55
【地方公共団体の土地の取得等に関する届出】								
件数	1		1					2
面積 (㎡)	7,056.9		21,568.3					28,625.2
【市街化調整区域における大規模開発】								
件数	1		1					2
面積 (㎡)	109,822.25		788,300					898,122.25
【開発行為変更許可申請】								
件数	1							1
面積 (㎡)	79,558.89							79,558.89
【開発行為事前審査】								
件数		1						1
面積 (㎡)		153,573.76						153,573.76
【岩石採取計画の許可申請】								
件数			1					1
面積 (㎡)			63,029					63,029
【墓地経営許可に関する事前審査】								
件数							1	1
面積 (㎡)							627.88	627.88
【土地売買等の届出】								
件数	31	8	10	2	18	11	9	89
面積 (㎡)	87,575.37	16,565.33	295,508.41	3,844.95	47,662.23	25,263.96	51,403.76	527,855.01
【総合計】								
件数	104	32	40	6	66	21	27	300
件数比	35	11	13	3	23	7	9	101
面積 (㎡)	1,095,928.27	471,612.18	3,602,645.46	12,471.63	182,191.55	47,992.97	153,353.03	5,576,204.09
面積比	20	8	65	0	3	1	3	100



第2図 地区別事前審査割合

2 発掘調査事業

本年度市内で実施された発掘調査件数は84件である。その内訳は試掘確認調査が41件、本格調査43件を数える。内訳は表2・3に示している。

以下において（平成7年度）の発掘調査の成果を概観する。

旧石器時代・縄文時代

本年度の調査においても旧石器時代の良好な遺構は検出されなかったが、野田遺跡において12点の剥片、貝殻山遺跡で数点の剥片と石核を検出しており、また表採資料ではあるが猪野新土井遺跡において剥片石器・礫石器などが確認されている。しかし、いずれの遺跡も時期同定の的確な資料となり得るものはみられなかった。

縄文時代の目立った遺構は検出されなかったが、遺物としては早期・後期・晩期の土器片が出土している。猪野新土井遺跡では包含層から早期の押型文土器片とそれに伴う無文土器片が多数出土しているが、残り具合が良くなく、ほとんどが磨滅した破片である。数少ない文様の確認出来る押型文土器片の外面には、整然と楕円押型文が横走施文されており、稲荷山式に比定できる。また、この時期に普遍的にみられる口縁部付近にコブ状突起を貼り付けた無文土器片も出土しており、早期でも比較的古い段階に位置付けられる。遺構と考えられるものは確認できなかったが、調査区内ほぼ全体に土器片の散布が認められることから、この台地上に比較的大きな生活空間があったことが窺える。しかし、ここには弥生時代から近世にかけての遺構が広がっており、それらにより縄文時代早期の遺構は削平をうけたと考えられる。この他早期の土器として、庄ノ原遺跡から条痕文土器が出土している。後期の土器としては、下部遺跡群第75次調査で包含層から西平式・三万田式に比定できる後期中葉から後葉の土器が出土している。また包含層を切っている弥生時代中期の遺構内から晩期前葉から中葉に比定できる浅鉢形土器などが散発的に出土している。他に晩期の土器として、府内城・城下町跡第6次調査で粗製の深鉢形土器などが出土している。

また、下部遺跡群においても、各調査地から少量ではあるが、後期から晩期の土器片が確認されている。さらに、大分川川床で、この時期の良好な資料が多数採集されており、これらの資料は大分川下流域における当該期を考究する際の参考となろう。

土器以外の出土遺物としては、野田遺跡でチャート製の打製石鏝が1点出土しており、また、大分県教育委員会により発掘調査された横塚第2遺跡からは、県下でも最古の板状の土偶が確認されている。この土偶は福田KⅡ式あるいは竇毛式に比定される土器とともに出土しており、後期前葉の所産であると考えられている。

以上のように旧石器・縄文時代ではほとんどが遺物のみの出土であり、確実にその時期の遺構と考えられるものは確認できなかったが、注目すべき遺物の出土が相次いでおり、今後の調査動向が注視されよう。（中西）

弥生時代

弥生時代の遺構・遺物は、猪野新土井遺跡、下部遺跡群、城原D遺跡、貝殻山遺跡などで確認されている。

下部遺跡群では、検出面で幅3.5m、深さ1.1mを測る大規模な中期の溝状遺構をはじめ、円状に分布する貯蔵穴が多数発見されている。なかでも15m以上離れた貯蔵穴内の遺物が接合する状況が認められるなど、遺構の同時性の検証に好材料を提供するものと期待される。その他には終末期の壺棺墓が1基検出されており、壺の底部付近には焼成後穿孔が認められる。

東部地区では城原D遺跡で前期末～中期前半埋没の溝状遺構が検出されており、この溝状遺構は途中で深さと断面形状が異なるという特徴を持つ。貝殻山遺跡の溜井状遺構からは前期～中期の土器が大量に発見されている。

（塔鼻）

表2 大分市平成7年度発掘調査地一覧

調査番号	種別	事業内容	遺跡名	調査地	調査担当	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間
95001	公共事業	下郷土地区画整理事業	下郷道跡群	大分市大字下郷				
			第58次調査	E区m-n-15地点	坪根伸也	(256)		950322~950518
			第59次調査	E区o-p-16地点	坪根伸也	(236)		950328~950526
			第60次調査	J区p-8地点	坪根伸也	(46)		950517
			第61次調査	H区q-19地点	坪根伸也	(247)		950530~950628
			第62次調査	E区i-m-15地点	坪根伸也	(115.4)		950601~950602
			第63次調査	F区n-o-9・10地点	坪根伸也	(742.5)		950606~950718
			第64次調査	B区g-14・15地点	坪根伸也	(120)		950614
			第65次調査	E区p-16地点	坪根伸也	(93.3)		950620~950627
			第66次調査	F区n-o-9地点	坪根伸也	(577.5)		950719~950828
			第67次調査	F区n-o-9地点	坪根伸也	(484.5)		950829~950929
			第68次調査	B区e-15地点	坪根伸也	(251)		951005~951018
			第69次調査	E区p-16地点	坪根伸也	(405)		951023~951204
			第70次調査	E区n-o-16地点	坪根伸也	(1655)		951109~951228
			第71次調査	E区j-k-13地点	後藤典幸	(1060)	0.12	951114~950206
			第72次調査	F区n-o-8地点	坪根伸也	(113.5)		951207~951211
			第73次調査	H区q-16地点	坪根伸也	(223)		950108~950117
			第74次調査	I区s-10地点	新藤美由紀	(100)		950207~950208
			第75次調査	H区r-21地点	新藤美由紀	(300)		950214~950404
			第76次調査	E区k-13地点	後藤典幸	(660)	0.08	950214~950501
			第77次調査	G区p-q-3・4地点	坪根伸也	(315)		950213~950215
			第78次調査	I区r-16地点	坪根伸也	(100)		950217~950218
			第80次調査	J区p-10地点	坪根伸也	(84)		950312~950321
95002	公共事業	横尾土地区画整理事業	横尾道跡群	大分市大字横尾				
			第41次調査	D-16地点	池道千太郎	(580)	0.3	950410~950412
			第42次調査	B-8、S地点	池道千太郎	(350)	0.13	950411~950413
			第43次調査	D-39、E地点	池道千太郎	(340)	0.18	950425~950526
			第44次調査(試)	D-39、D地点	池道千太郎	(60)	0.03	951024
			第45次調査	B-11地点	池道千太郎	(515)	0.15	951026~951108
			第46次調査	D-39・41地点	池道千太郎	(700)	0.25	951127~951216
			第47次調査(試)	D-15地点	池道千太郎	(200)	0.18	951130
			第48次調査(試)	A-20・21地点	池道千太郎	(250)	0.025	951222~950118
			第49次調査	B-6、S地点	池道千太郎	(500)	0.05	950130~950326
			第50次調査	B-9・11地点	池道千太郎	(105)	0.09	951226
95003	民間開発	宅地造成	道野新上井道跡 第1・2次調査	大分市大字道野	後藤典幸	5,000	1.6	950413~951006
95004	公共事業	府内城整備事業	府内城・東下郷跡 第5次調査	大分市荷馬町	岩城和夫	590		950509~950131
95005	公共事業	公園リフレッシュ事業	府内城・東下郷跡 第7次調査	大分市都町13-3	塩地龍一	866	0.5702	950517~950928
95006	確認調査(民間)	老人福祉施設建設	庄ノ原道跡	大分市大字庄ノ原	坪根伸也	64	0.3685	950912~950922
95007	確認調査(民間)	宅地造成	高谷河原次郎跡 第1次調査	大分市大字津守字正馬寺	坪根伸也	遺跡2基		950824~950829
			第2次調査		岩城和夫	遺跡1基		950213~950223
95008	確認調査(民間)	アパート建設	葛木道跡	大分市大字葛木字宮ノ後口	塩地龍一	73	0.02	950911~950912
95012	確認調査(民間)	庫地造成	庄ノ原・片庭跡	大分市大字賀来字庄ノ原	塩地龍一 新藤美由紀	600	0.4644	951101~951122
95009	確認調査(民間)	ガラスハウス建設	庄ノ原道跡	大分市大字賀来字庄ノ原	池道千太郎	194		951115
95010	確認調査(民間)	アパート建設	羽田・井ノ道跡	大分市大字羽田字井ノ道跡	岩城和夫	179	0.2375	950110~950229
95011	民間開発	無線基地局建設	城原D道跡	大分市大字里字台1320-21	塩地龍一	298	0.0588	951203~950336
95013	確認調査	アパート建設	猪野道跡	大分市大字猪野字西原	坪根伸也	144	0.11	950120~950121
95014	公共事業	市道建設	貝瀬山道跡	大分市大字一本	塔鼻光司	1,300	2.4	950501~950810
95015	公共事業	市道建設	野田道跡	大分市大字野田	塔鼻光司	1,000	0.5	951002~950229

表3 大分市平成7年度試掘調査地一覧

番号	種別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積(㎡)	調査期間	処 置	開発原因
1	試掘(民間)	大分市大字市子穴田486番地他9筆	22.5	3,804	95.04.05	道跡確認されず	
2	試掘(公共)	大分市大字里	30	4,560	95.04.10	道跡確認されず	区画整理
3	立会(民間)	大分市大字下藤字橋ノ本793-1		365.69	95.04.06	道跡確認されず	個人住宅
4	試掘(民間)	大分市大字猪野字新土井828・829	101.8	1,087	95.04.13	道跡確認されず	宅地造成
5	試掘(民間)	大分市大字奥田字上遊塚812番地1他	34	2,300	95.04.25	道跡確認されず	
6	試掘(民間)	大分市大字佐藤字庄ノ原1663-1他3筆	40	894.14	95.04.27	道跡確認されず	宅地造成
7	試掘(民間)	大分市大字津守字正通寺640番1	6	200	95.04.27	道跡確認されず	熟地建設
8	試掘(民間)	大分市大字羽屋字七ノ坪3番地	92.6	4,050	95.05.30	道跡確認されず	マンション建設
9	試掘(民間)	大分市大字羽屋29-1		100	95.05.23	道跡確認されず	店舗建設
10	試掘(民間)	大分市大字猪野字東中尾463番1、464番1	25		95.04.13	盛土保存	個人住宅
11	試掘(公共)	大分市大字市子穴田4重原1493-3番地	22.7	200	95.06.15	道跡確認されず	給水橋建設
12	試掘(民間)	大分市大字猪野字中原1244-3、1245、1246、1248、1249	200	5,000	95.07.14	本調査必要	店舗建設
13	試掘(民間)	大分市大字羽屋字川畑43-1、42-2	100	1,000	95.08.10	道跡確認されず	ガソリンスタンド建設
14	確認調査 (民間)	大分市大字津守字正通寺	橋穴盛1基		95.08.24～ 95.08.29	調査完了(急傾斜地)	宅地造成
15	確認調査 (民間)	大分市大字葛本字宮ノ後1664-1、664-4	647	3,685	95.09.11～ 95.09.12	盛土保存・調査完了	アパート建設
16	試掘(公共)	大分市鶴町			95.09.13	本調査必要	駅南区画整理
17	試掘(民間)	大分市大字市子穴田1320-21	298	0.0588	96.09.09	本調査必要	無軌道地局建設
18	試掘(民間)	大分市大字松岡字ツル田4079番	27	783	95.10.11		
19	試掘(民間)	大分市大字川野原字神原386番地	700		95.10.11～ 95.10.12	盛土保存・ 一部本調査必要	宅地造成・公園用地
20	試掘(民間)	大分市大字賀来字庄ノ原1905番地の1他3筆	372	4,644	95.10.16～ 95.10.18	確認調査必要	草地造成
21	確認調査 (民間)	大分市大字佐藤字庄ノ原1798、1799、1800-1、1801-1	64	3,685	95.09.12～ 95.09.22	調査完了	老人福祉施設建設
22	試掘(民間)	大分市大字羽屋字戸173番地	200	2,374	95.11.10	本調査必要	アパート建設
23	試掘(民間)	大分市大字羽屋字新給18-1、19-1	250	3,106	95.11.10	道跡確認されず	店舗建設
24	確認調査 (民間)	大分市大字賀来字庄ノ原1905番地の1他3筆	600	4,644	95.11.01～ 95.11.22	調査完了	18に対応
25	確認調査 (民間)	大分市大字賀来字庄ノ原	194		95.11.15	調査完了	ガラスハウス建設
26	試掘(公共)	大分市中央町2-4(若草公園内)	236		95.12.18～ 95.12.21	本調査必要	公園リフレッシュ事業
27	分布(民間)	大分市大字猪野字三屋1493番地1他3筆		8,268	95.12.27	道跡確認されず	
28	試掘(民間)	大分市大字羽屋字園1053-1	13	404.579	95.12.27	本調査必要	店舗建設
29	確認調査 (民間)	大分市大字羽屋字戸173番地	179	2,375	96.01.10～ 96.01.11	20に対応	アパート建設
30	立会(民間)	大分市大字下藤字九反坪114地	240	1,426	96.01.12	道跡確認されず	ガソリンスタンド建設
31	試掘(民間)	大分市大字葛本字南原306番1、306番	38	864.64	96.01.18	盛土保存	自宅・アパート建設
32	確認調査 (民間)	大分市大字猪野字西原107-1、1059-2	144	1,100	96.01.20～ 96.01.21	盛土保存	アパート建設
33	試掘(民間)	大分市大字下藤字高城2384-1他	64	1,387	96.02.07	道跡確認されず	店舗建設
34	確認調査	大分市大字津守字正通寺	橋穴盛1基		96.02.13～ 96.02.23	調査完了	宅地造成
35	試掘(民間)	大分市大字佐野字4082番地他2筆	81	2,700	96.02.27	道跡発見されず	宅地造成
36	試掘(公共)	大分市大字小池原428-1	112	240	96.02.28	本調査必要	学校増築
37	試掘(公共)	大分市大字下藤字西面街区D-10	30	374	96.03.05	道跡確認されず	撤去工事
38	立会(公共)	大分市大字沢城雄城台給水塔隣接地	5.7		96.03.29	道跡確認されず	水道管理施設

古墳時代

今年度は集落遺跡と横穴墓群の調査が実施された。集落遺跡では、古園府遺跡群の羽原・井戸遺跡、下部遺跡群などがある。下部遺跡群第66次・67次調査（F66・67-9地点）では住居跡と共に古墳時代のものであるとして、初例となる井戸跡を2基確認している。また、滝尾守岡横穴墓群については、守岡遺跡が所在している台地の中腹から北へ突出した崖面に造営されている。入口部分はすでに開削しており内部は二次的に改変されている。遺物も皆無である。注目すべき点としては、飛山横穴墓群1号墓と類似した内部構造をもつ2号横穴墓の存在があげられよう。当横穴墓群の造墓時期は6世紀後半以降と考えられる。横穴墓は中世時期に大きく改変されたと思われる。壁面に彫刻された双塔五輪塔に、宗教的な様相を窺うことが出来る。（讃藤）

古代

今年度、古代については、多くの遺構・遺物が出土しているため、時代別に概観する。

（飛鳥時代）

古来より豊後国府推定地として位置づけられてきた古園府遺跡群の一角である羽原・井戸遺跡において7棟の掘立柱建物跡が検出された。注目されるのは、建物規模が極めて大きい点である。なかには大分市内で最大規模を有する建物跡も確認された。豊後国府の確定が囑望されるなかでの今回の発見は、今後の豊後国府研究の方向性を模索する上で重要となるであろう。

（奈良時代）

猪野新井遺跡において大分市内で初例となる堅穴住居跡3基を検出、城原D遺跡では8世紀初頭の本格墓を1基検出している。貝殻山遺跡では、土師器片が出土。また、下部遺跡群からは、奈良時代前半の溝状遺構が確認された。さらに、井戸跡2基を検出、1基は井形に組んだ木枠が残り、1基からは「家蓋」という文字を刻んだ土師器片が出土している。当遺跡では3例目の刻字資料となる。

（平安時代）

猪野新井遺跡で、8世紀末から9世紀初めの東西45m南北60mの長方形の区画溝を検出、区画されたなかに約15棟の掘立柱建物跡を確認した。遺物としては白磁・越州窯系片磁・黒色土器・緑釉陶器などが出土している。全国の調査例からすると、この施設は官衙的なものと推察され、近接する地蔵原遺跡との関連が注目される。今後の資料整理ならびに周辺調査の発展に伴う建物群の性格究明が急務の課題といえよう。また、府内城・城下町跡において11世紀後半の井戸跡や掘立柱建物跡を検出した。当地域に11世紀代の遺跡の存在が明らかになったことは大きな成果と言えよう。また、滝尾遺跡群では、大野川と乙訓川を望む緩やかな東斜面において、掘立柱建物跡6棟、さらに背後に堅穴遺構を検出している。遺物も9世紀前半の大量の土師器が出土。こうした遺構が斜面にあることや大量に出土する遺物から、一般庶民の住居とは考えられず、なんらかの施設を想起させる。さらに、下部遺跡群においては、井戸跡2基を検出、1基は素掘り、1基は井形に組んだ木枠が残っていた。注目される遺構として、真南北に沿う道路状遺構が検出されている。埋土内から9世紀前半を中心とする土師器や都城系暗文土器が出土している。200m離れている調査地から、まさに同一のものと考えられる道路状遺構が検出され高い規格性が窺える。今後の周辺地域における調査動向が注視されるであろう。（後藤）

中世

中世の遺構・遺物は、下部遺跡群、横尾遺跡群、城原D遺跡、貝殻山遺跡などで確認されている。

下部遺跡群では、12世紀の掘立柱建物跡や16世紀後半の土壇墓などが検出された。横尾遺跡群では床面に準大の石を敷き詰めた桁間形の土坑が検出された。埋土には灰が充填されており、これに混じって土師器の破片が3点出土している。この土坑は台地の東斜面に立地し、祭祀が行われた可能性が考えられる。また、城原D遺跡では

木蓋土墳墓が検出され、溝状遺構には杭が溝に沿って打ち込まれており、龍泉窯系青磁碗（Ⅳ類）・白磁小皿（小野B群）・土師器坏・小皿・燭台などの供膳具や瓦質鍋・鉢・甕などの雑器が多量に廃棄されていた。これらの遺物から、この溝は15世紀前半代に埋没したものと考えられる。隣接してほぼ同時期の墳墓が存在することから、この一帯に15世紀代の遺跡が広がる可能性が高いと思われる。（塔鼻）

近世

近年、本市においてめざましく調査成果をあげている時代と言える。その契機は府内城跡ならびに府内城下町跡の発掘調査であり、本年度は府内城本丸跡周辺地と町人町の塗師町と寺町にあたるジャングル公園内の発掘調査を実施した。

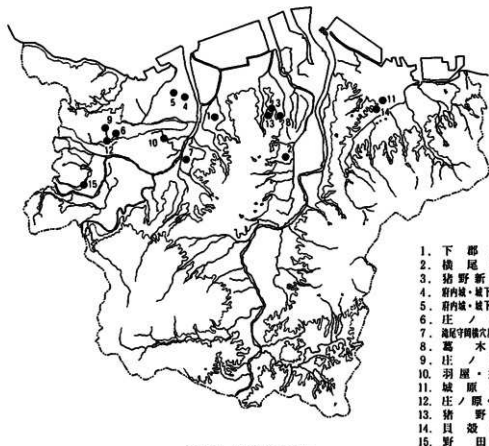
府内城本丸跡周辺の発掘調査では山里丸（北ノ丸）曲輪西側の堀や石垣をはじめとして、冠木門の礎石や西ノ丸と山里丸（北ノ丸）を結ぶ廊下橋の基礎木杭などが確認されている。

これらの調査成果は府内城再発見事業の一環として行われている廊下橋の復元ならびにその周辺整備を進めるための基礎資料となっている。

また、ジャングル公園内の発掘調査では絵図に記された塗師町と寺町の町境を検出することができた。遺構の重複が著しく、城下の形成時期を確定するまでには至らなかったが、町屋の様相をはじめて明らかにできたその意義は大きいと言えよう。

この他にも下郡道跡群や横尾道跡群などにおいて当該期の調査が行われ、往時の集落構造が次第に判明しつつある。

（塩地）



第3図 調査遺跡位置図

3 教育普及活動

(1) 亀塚古墳出土品展

日 時	開催場所	入場者数	備 考
平成7年9月9日～17日	坂ノ市公民館	約700人	海部のまつり'95共催

亀塚古墳の出土品を中心に、大在（浜遺跡）、坂ノ市（久原遺跡・久上遺跡）の発掘調査による出土品及び個人が所蔵している上ノ坊古墳、築山古墳（佐賀関町）等の遺物を展示公開した。また、同時に「海部古代教室」と題したパンフレットを作成し、亀塚古墳の所在する大分市東部の埋蔵文化財の解説を行った。

なお、今回の出土品展への出展遺跡は下記のとおりである。

- ・亀塚古墳
- ・上ノ坊古墳
- ・築山古墳（佐賀関町）
- ・飛山横穴墓群
- ・浜遺跡
- ・浜長無田遺跡
- ・久原遺跡
- ・久上遺跡

(2) 大分市文化財だより1995年度号の発行

平成8年3月1日に平成3年度から発行を続けている文化財だよりの1995年度号（第5号）の作成、配布を行った。

本号には近年発掘調査事例の増加の著しい近世府内城下町跡の発掘調査成果を紹介し、「発掘調査が語る府内城下町」と題した特集記事を掲載した。

(3) 研修参加

奈良国立文化財研究所による埋蔵文化財発掘技術者特別研修「環境考古学課程」に職員1名を派遣した。

日 時	内 容
平成7年11月27日～12月15日	古環境復原研究のために必要な専門的知識と技術の研修

平成7年度
事業概要

I 下郡遺跡群第58次調査 E区m・n-15地点

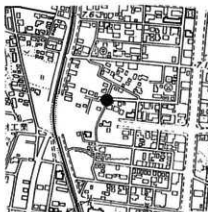
調査面積	256㎡	調査期間	95.03.22～95.05.18
地域	A	調査担当	坪根伸也

第58次調査地点は、下郡遺跡群のほぼ中央に位置し、区画整理前の集落密集地と重なる。そのため、調査は可掘部分について行い、結果として第1～第3の3つの調査区により調査を実施した。

第1調査区

面積約5㎡を測る狭小な調査区である。南北方向に展開する溝状遺構1条(SD052)を検出した。検出面での幅約0.5m、現存深度は約0.35mを測る。暗茶褐色土の単一土を埋土として、埋土中からは古銭(銭種不明)、糸切底を呈する土師器片などが出土した。

具体的に帰属年代を示すような遺物の出土状況は認められないものの、出土遺物の総体から所産年代を中世の範疇で考えて大過ないと考えられる。



第4図 調査地点位置図

第2調査区

道路建設予定地域範囲に設定した調査区である。面積147㎡を測る。

当調査区で検出した遺構群は、弥生時代中期と近世の2時期に区分できる。

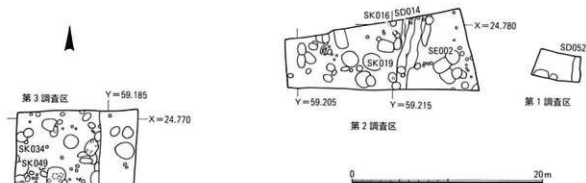
弥生時代中期の遺構としては、貯蔵穴と思われる土坑がある。いずれの土坑にも遺物のまとまった出土は認められないが、出土する破片資料は下城式甕形土器、東北部九州系の甕が主体を占める。

近世以降の遺構は調査区全域に分布する。溝状遺構、土坑、井戸跡を検出した。

3条の溝状遺構を調査区のほぼ中央において検出しているが、最も西側に位置し、切り合い関係から古相を呈すると考えられるSD014以外からは遺物の出土が認められず、所産時期を特定することはできなかった。ちなみに、SD014からは土師器小片の他、コンニャク印判を有する染付破片などが出土しており、およそ18世紀代の帰属年代を推定することができる。これより新出すると考えられる2本の溝状遺構は砂質土層を埋土にもち、機能段階に流水があったことを物語っている。また、この2本は切り合い関係を有し、その位置関係から、同一地点における掘り返しである可能性も考えられる。

土坑に関しては大小さまざまな規模のものが調査区の全域に分布する。

大半の土坑埋土は、暗灰褐色土の単一土層により構成されるが、SK019のように埋土下部に黒色炭化物の帯状



第5図 遺構配置図(1/400)

堆積が認められるものもある。また、特に注目される遺構としてSK016を指摘できよう。

SK016は約0.4mを測る円形土坑の中に瓦質のコップを縦方向に埋納している。上部はすでに後世の削平により欠失し、約1/2を残すのみである。内部には、少量の炭片とともに、完存する染付碗が納められていた。土坑内には暗灰茶褐色土が充填されている。埴岡年代は内包されていた染付碗からおおむね19世紀前半代の年代を推定することができる。

井戸跡(SE002)は調査区の東端付近において検出された。検出面での平面プランはほぼ円形を呈する。埋土は上部の淡灰白色シルト質土層と下部の灰黒色粘質土層に分層できる。出土遺物は概して少ないが、上部層からは陶胎染付破片が出土し、下部層からは時期特定の不能な近世磁器小破片が出土した。したがって、所産時期は18世紀中頃を前後する時期と考えられる。

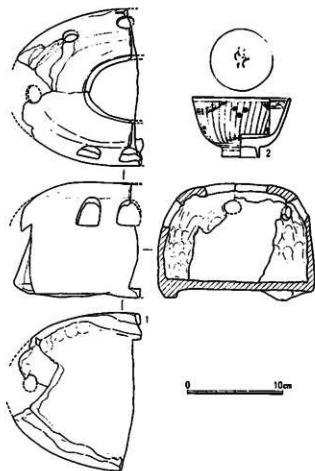
第3調査区

現用道路を挟み、第2調査区の西側に位置する調査区である。ほぼ104㎡について調査を実施した。当調査区の東側約1/4については、すでに地下げが行われており、西側の遺構遺存部との比高差約0.3mを測る。戦後に構築されたと考えられる堆肥溜めと思われる基底部と掘乱穴数基が点在する。

西側の遺構遺存部分には、第2調査区と同様に近世と弥生時代中期の遺構が分布する。

弥生時代の遺構には8基程度の土坑がある。SK049からは、須玖Ⅰ式併行期の壺形土器の突帯部破片が出土し、遺構の埴岡年代の一部が中期の中頃以降におよぶことを示唆している。また、SK034の検出面からは弥生中期甕形土器の底部を中心に土器破片が集積された状態で検出されている。破片数量はそれほど多くはないものの、このような事例は同遺跡群内の他地点にも少数ながら認められており、有意な所作によるものであるか否かといった点も含め、今後の事例の増加とともに検討すべき課題といえよう。

(坪根)



第6図 SK016出土遺物実測図(1/4)

Ⅱ 下郡遺跡群第59次調査 E区o・p-16地点

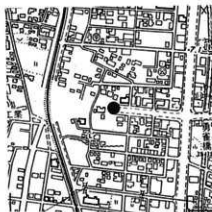
調査面積	236㎡	調査期間	95.03.28～95.05.26
地域	A	調査担当	坪根伸也

下郡遺跡群第59次調査地点は、第58次調査地点の南側に位置する。調査は都市計画道路庄ノ原佐野線の築造工事に伴い実施した。

調査対象地域は水田耕作に伴う後世の地下げ地業により上面が削平されている。検出遺構には、近代墓、中世墓、溝状遺構、井戸跡、不定形土坑がある。以下に各遺構の概要を略述する。

近代墓

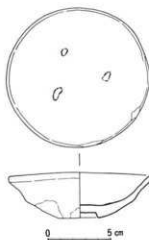
調査区のほぼ中央におおよそ10基程度の痕跡を認めることができた。なかには、桶底の痕跡が遺存するものもある。すでに墓地の移転に伴う墓地改葬が行われた後であり、上部の攪乱穴の下部にかろうじてそのプランを確認することができる。前述したように、現在は10基程度のプランしか確認できないが、これらの遺存状況を考慮すると、本来はこれ以上の墓が群集していたものと考えられる。出土遺物は皆無である。



第7図 調査地点位置図

中世墓 (ST016)

溝状遺構に切られる状況で中世墓1基を検出した。墓墳はプラン円形を呈し、径1.2m、現存深度0.1mを測る。墓坑内の堆積土層の観察を行ったが、裏込め等の存在を示す土層を確認することはできなかった。したがって土墳墓である可能性が高いと思われる。出土遺物には胎土目を有する完形の唐津皿が底面近くから出土しており、所産時期として16世紀末～17世紀初頭の年代が考えられよう。



第8図 ST016出土遺物実測図(1/3)

溝状遺構

調査区全面に東西・南北規格の溝状遺構の存在を確認した。現状では不連続な土坑状に認識できるものも存在するが、上部の削平状況を考えると本来は同一の溝状遺構であった可能性が高い。このことは、各部分の土層の比較によっても傍証される。

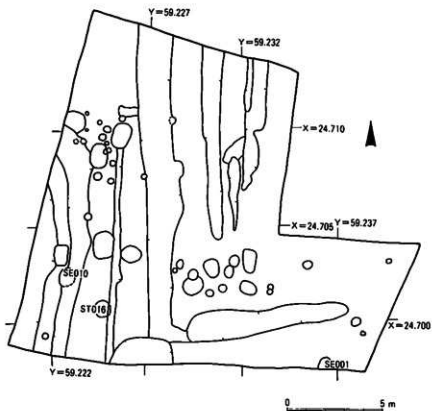
また、溝状遺構は前述の様態の証左となることがよく底面は一定しておらず、凹凸が随所に認められる。これらの形態から検出された溝状遺構は明らかに用排水の便を意図して構築されたものではない。したがって、現状では区画を意図した溝機能を想定することができよう。

出土遺物には、陶胎染付を中心とする近世陶磁器の出土が認められ、18世紀中頃以降の所産年代が考えられる。

井戸跡

2基の井戸跡を検出した。1基(SE001)は調査区東端において確認された。半分は調査区外に展開しており、約1/2を調査対象とした。井戸跡の深さは検出面から約1.5mを測り、下部埋土から白磁碗Ⅳ類、土銅の破片などが出土している。これらの出土遺物から井戸の所産年代はおおよそ12世紀前半前後と考えられよう。

他の1基(SE010)は溝状遺構の底面において検出された井戸跡である。底面までの現存深度は約1.2mを測



第9図 遺構配置図(1/200)

る。出土遺物は皆無であり、所産時期の特定は行えない。

不定形土坑

調査区の随所に不定形の土坑が認められ、これらのいくつかは先述した溝状遺構の残存とも考えられる。出土遺物が極めて僅少であり、具体的な時期等について言及することはできない。

以上が下郡遺跡群第59次調査の概要であるが、各遺構の項で触れた出土遺物の他に遺構検出段階において開元通宝(初鋳621年)1枚が出土している。

(坪根)

Ⅲ 下郡遺跡群第61次調査 H区p-19地点

調査面積	247㎡	調査期間	95.05.30～95.06.28
地域	A	調査担当	坪根伸也

調査は、民間のマンション建設に伴うものである。

調査地点は水田構築のための地下げを受けている部分があり、調査区中央を東西に縦走る溝状遺構を境に北側は南側に比しておよそ0.7mのレベル差を有する。そのため北側部分の主要遺構はすでに欠失しており存在しない。

調査の結果、南側部分を中心に溝状遺構、土坑、柱穴、道路状遺構等を検出した。以下に各遺構の概要を記述する。

溝状遺構

2本の溝状遺構を検出した。SD001は調査区中央を東西方向に走る溝状遺構である。先述した地下げラインと溝が一致することから、本来敷地境界として機能していたと考えられる。断面U字形を呈し、灰茶褐色土を埋土とする。滯水や流水の痕跡は認められない。埋土内には陶胎染付片などを比較的多量に内包することから18世紀中頃以降の所産と考えられよう。

SD003はSD001に並行する状態で検出された溝状遺構である。溝深度がSD001よりも浅いため、西側部分は後世の削平により失われている。遺物は概して少ないものの、染付破片などを含み、キセル雁首などの出土がみられた。出土遺物、埋土の状況等からSD001と近接した時期の所産になるものと考えられる。

土坑

平面形が方形を呈するものと、不定形を呈するものの2タイプが存在する。前者は1.2m×1.0mの規模を測り、埋土中にはほとんど遺物を含まない。ただ、SK008の底面付近において弥生土器破片2点が出土しており、これらの土器によって示される時期、すなわち弥生時代後期の所産である可能性が高いと考えられる。堆積埋土は基本的な単一土層により形成され、ブロック土を含むことから人為的に埋め戻された状況が想定される。

不定形を呈する土坑としてはSX016などがあげられる。出土遺物には遺存率の高い土師器環の他、須恵器片、土師片などが認められる。出土する遺物から推察される帰属年代はおおむね9世紀初頭であり、後述する道路状遺構に若干後出する時期に形成されたものと考えられる。

道路状遺構 (SF003)

今回検出された道路状遺構は調査区のほぼ中央を縦走り、検出面での幅2.1m、深さ0.8mを測る。溝形状を呈し、断面形状は逆台形をなす。路面にあたる底面の幅は約1.1mを測り、径約0.5mの連続土坑を配置する。また、連続土坑内部には白色粘土を混入したシルト質の混土の充填が認められ、切り合いを有し重複しているものもあることから、複数回の造り替えが行われたと推定される。

また、今回の調査では約23.7mを検出しているが、その方向は真南北に沿い、高い規格性のもとに構築された可能性を指摘することができる。堆積土層断面の観察によると、当初の掘削後、2回以上の掘り返しの痕跡が認められ、この掘り返しに伴う底面にも部分的に白色粘土の存在を確認することができた。



第10図 調査地点位置図



第11図 道路状遺構完掘状況

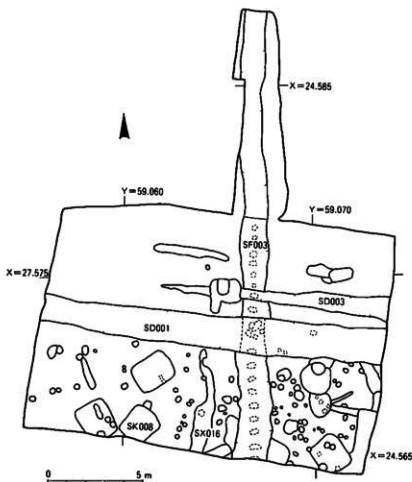
埋土内の出土遺物には、完形復元の可能な土師器杯をはじめ、須恵器杯、甕などの破片も散見される。これらの遺物の主体となる時期はおおむね8世紀末～9世紀初頭を中心とするものであり、当遺構の最終機能段階をほぼこの時期と考えて大過ないであろう。

今回の調査で特筆される成果としては、道路状遺構の確認をあげることができよう。下郡遺跡群内では初例であり、しかも、高い規格性をもって構築されている点は注目される。所産時期に関しては、出土遺物の様相から9世紀初頭頃には機能を停止していたと考えられる。

これまでの周辺の調査成果では、9世紀、10世紀代の井戸跡等が確認されており、当遺構の廃絶後においても遺跡が存続していた点を確認している。それらの遺構からは、近江産と推定される緑釉陶器や瓦片などの出土が認められており、一般集落とは異なる遺跡の展開が予見されている。このような状況の中で、高規格性を有する道路状遺構の発見は特筆されるものといえよう。

ただ、現在確認されている遺構と道路状遺構との存続年代の間には若干のヒアタスが存在し、この点が今後の調査における課題といえる。

(坪根)



第12図 遺構配置図 (1/200)

IV 下郡遺跡群第63次・66次・67次調査 F区n-o-9 地点

調査面積 1,805㎡
地域 A

調査期間 95.07.19～95.09.29
調査担当 坪根伸也

今回の調査地点は、標高7mの自然堤防上に展開する下郡遺跡群のほぼ中央に位置する。調査は63次・66次、67次と3地点に及ぶが、隣接する一連の調査である。

調査の結果、弥生時代から現代にいたる種々の遺構を検出した。時代別に遺構概要を以下に示す。

弥生時代

後期末の所産と考えられる竪穴住居跡を検出した。方形プランを呈するものである。住居埋没途中に土器が廃棄されており、埋土中に土器を多量に内包する土層の堆積を確認することができる。出土土器は弥生時代終末期の範疇で考えられるものであり、住居床直上から出土する土器破片もこれらの土器の様相と大過ないことから、住居跡の所産時期もほぼこの時期のものと判断した。また、以上の点から住居埋土中の土器廃棄行為は、住居廃絶後、それほど時を経ずして行われたものと考えられよう。

古墳時代

古墳時代の遺構としては、井戸跡2基を検出した。これら2基の井戸跡は約3mの間隔をもって構築されている。両者ともに素掘の井戸であり、SE009は略方形、SE018は円形の平面プランを呈している。SE009は2.1m×1.8mの規模を測り、検出面直下の土層中から、ほぼ完全に復元することのできる二重口縁壺が出土した他、最下部に位置する土層内から小型丸底甕、製塩土器等が出土した。これらの遺物様相から、概ね古墳時代初頭から前半の所産になるものと思われる。SE018は検出面において径約1.8mを測り、現存深度1.65mの規模を有する。埋土最下層から完存する甕形土器が出土し、また、SE009と同様に製塩土器の出土が確認されている。所産年代については、ほぼSE009と同時期を考慮することができるが、遺存率の高い遺物相互の比較においては、SE018出土遺物のほうが属性レベルにおいて弥生土器の様相を強く残している傾向が見受けられ、先後関係としてSE018→SE009の順に構築された可能性が高いと考えられる。

古代・中世

古代、中世の主要遺構には、掘立柱建物跡1棟、土墳墓1基、溝状遺構2条がある。

掘立柱建物跡(SB100)は調査区の北東角において確認された。2間×5間の規模を有し、柱穴内には根占石が埋置される。柱穴埋土からは底部糸切りの土器器小片の他、白磁碗IV類の口縁部破片の出土がみられ、12世紀から13世紀の所産であろうと考えられる。

土墳墓(ST039)は略方形を呈する掘り方を有す。0.95m×0.95mの規模を有し、検出面から底面までの現存深度0.25mを測る。土墳のほぼ中央に人骨の痕跡を確認している。また、土墳南西隅に完存する土器器環1と半個体分の同種の環1が出土している。土層断面観察の結果、埋土は黒灰褐色土層を基調とするもので、ウラボメ等の痕跡は認められないことから土墳墓と判断した。所産時期は出土した土器の形態的な特徴から中世後期とおもわれるが、厳密な時期は現状では不明である。



第13図 調査地点位置図



第14図 第66次調査区全景

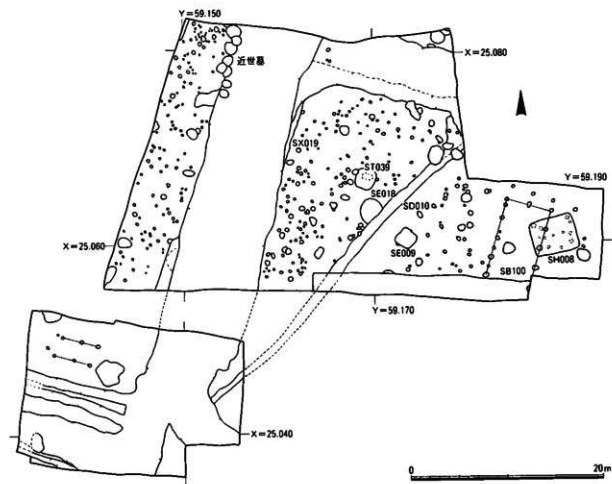
2条の溝状遺構が確認されている。SD010は調査区を斜走する溝状遺構である。北側は調査区外に展開するが南端は調査区内において消失する。断面U字形を呈し、埋土内には中世段階のものと思われる土師器小破片が出土する。時期を厳密に特定することのできる遺物の出土はない。ちなみに前述のSB100とは方向に差異が認められる。

SX019は近世大溝に切られており、東側の利部分の一部が遺存するのみである。土師器環の完形品多数と中国渡来銭数枚が底面においてまとまった状況で確認されている。山上状況から単なる廃棄に伴うものとは考え難く、地鎮等に伴う埋納遺構である可能性も指摘されよう。出土土師器は14世紀代に比定されるものである。

近世

近世遺構には墓跡、溝状遺構がある。墓跡は調査区の北西角に群集する。人骨等は遺存していないが、底付近に桶底の痕跡が残るものがあり、「寛永通寶」が出土している。他に出土遺物は確認されていない。

溝状遺構は東西、南北方向に展開し、直交する状況で接続する。総じて方形の区画を形成しており、調査区内で確認できる区画の一边は約40mを測る。下部遺跡群内の既往の調査においても同様な溝状遺構が各所で確認されており、かなり広範囲にわたり、連続する方形区画が遺跡群内に展開しているものと推定される。共通して陶胎染付の破片などが出土しており、およそ18世紀中頃以降の所産と考えられる。これまでの調査でこれらの区画内で当該期の遺構が確実に検出された例はなく、溝状遺構の用途も含めた検証が今後の課題となろう。また、第63次調査地点の溝埋土の中には16世紀代に比定される中国青花皿、備前大甕I緑部破片などが混在状況で出土しており、近隣に当該期の遺構が存在する可能性を指摘することができる。(坪根)



第15図 遺構配置図 (1/400)

下部遺跡群
の調査結果
を踏まえ
調査結果を
まとめる

V 下郡遺跡群第65・69次調査 E区p-16地点

調査面積 498.3㎡
地域 A

調査期間 95.06.20～95.12.04
調査担当 坪根伸也

本調査地点は下郡遺跡群の中でも最も高所に位置する。現在、この帯状に分布する高位面をJR豊肥線が縦走するが、今回の調査地点はこの豊肥線に隣接する。第65次調査は街路建設に先立って地質地盤調査に伴って実施したものであり、調査地は後に調査を行った第69次調査地点に包括される。

検出遺構には弥生時代～古代に帰属するものが検出されており、以下に各時代別の検出遺構の概要について略述する。

弥生時代

弥生時代の遺構には土坑、堅穴住居跡がある。土坑は調査区全域にランダムに存在する。まとまった遺物の出土の認められるものはないが、埋土中の小破片は弥生時代中期に編年される下城式土器、東北部九州系の甕が主体を占める。

SH082は調査区のほぼ中央において確認された方形プランを呈する堅穴住居跡である。5.7m×3.9mの規模を有する。出土遺物は概して少ないが、床面付近から弥生時代終末期に比定される土器破片の出土が若干量認められた。

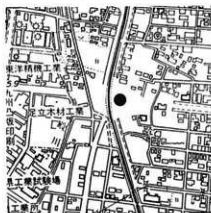
古代

当時代の遺構には道路状遺構（SF001）、土坑（SK031）がある。

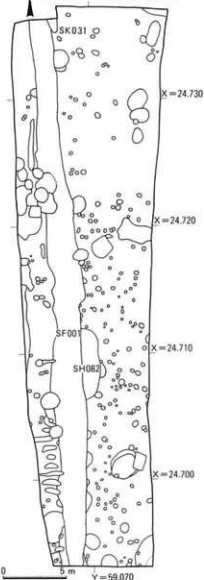
SF001は調査区を南北方向に縦走する道路状遺構である。溝形状を呈し、検出面での幅1.6m、深さ0.7m、路面幅1.1mを測る。底面直上には白色粘土を主体とした粘質土が被覆され、その下部には径0.6mを測る不定円形の連続土坑が規則的に配置される。連続土坑内には路面に被覆された白色粘土と同一の粘質土が充填される。本調査地点では約45mを確認しているが、諸様相が当地点の南側に位置する第61次調査地点で確認したSF003と類似することから同一遺構である可能性が高い。遺構の展開方向に関しても真南北に沿った方向性を示し、国土座標上の比較においても同一軸上に位置している。

出土遺物には8世紀～9世紀初頭に比定される土師器、須恵器環などの出土がみられ、SF001の最終機能時期を9世紀初頭前後と考えて大過ないであろう。また、SF001の南側部分において遺構の埋没時に埋置したと考えられる完存する土師器甕が出土している。埋置意図は現状では不明であり、内部の土の理科学的な分析を踏まえて今後検討していく必要があろう。出土遺物には他に都城系暗文土器、馬骨などがある。

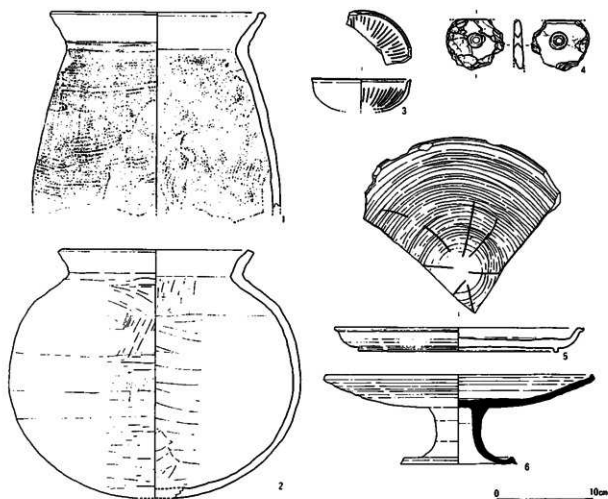
SK031は調査区南端において検出された長楕円形土坑である。長軸1.7mを測り、現存深度0.7mを測る。土坑埋土中には馬骨片、須恵器



第16図 調査地点位置図



第17図 遺構配置図 (1/300)



第18図 SF001出土遺物実測図 (1/4)

破片、土師器破片の出土が確認された。時期的には、出土している破片が「豊後大分型Ⅱ」に属するものであり、諸属性から8世紀後半～9世紀初頭の所産年代を推定することができる。

先述のように今回検出した道路状遺構は下部遺跡群第61次調査で確認されたSF003に極めて酷似しており、同一のものと考えられる。出土遺物に関しても、ほぼ同様の所見を得ることができ、埋没年代も同時期と想定される。さらにつけ加えるならば、調査区南側において、当該遺構に重複する状況で連続する長土坑が確認されており、これらの遺構もあるいは道路状遺構に伴うものである可能性も考えられる。遺構中からは時期を特定することのできる遺物の出土がなく、時間軸上の実質的な距離は不明であるが、SF001埋没後にも周辺地域に遺跡の連続が認められることから、これに続く道路状遺構の存在は十分に予想される。このような点からも上面で検出される連続長土坑の所産時期の特定は急務であり、今後の周辺調査の動向が注視されよう。(坪根)

註「羽田遺跡Ⅱ」大分市宮羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)1996 大分市教育委員会

VI 下郡遺跡群第68次調査 B区e-15地点

調査面積 251㎡
地域 A

調査期間 95.10.05～95.10.18
調査担当 坪根伸也

本調査地点は宅地整地に伴うもので、重機による表土除去作業後、手掘りによる掘り下げを実施した。

調査の結果、4枚の水田土層が認められ、遺構はすべての水田層を除去した段階で確認することができる。また、調査対象地域の大部分は最下層の水田構築時に地下げ地業が行われており、基盤土層は大きく削平を受けている。このため、遺構の遺存状況は良好とはいえないものの、溝状遺構（SD）、井戸跡（SE）、土坑（SK）、柱穴などを検出することができた。



第19図 調査地点位置図

溝状遺構（SD）

溝状遺構は調査区を南北方向に縦走り、性格不明遺構（SX001）に接続する。上面が削平されているために遺存状況は悪く、北側では僅かに3cm程度遺存するのみであるが、SX001から約4.5mのところまで深度を増す。

出土遺物は皆無であり、所産時期の特定は行えない。

性格不明遺構（SX001）

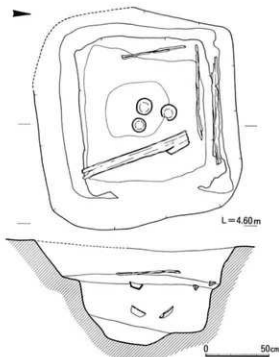
調査区の南西角で検出された方形を呈する大型の掘り込み遺構である。検出面から約1.6m掘り下げた時点において湧水等に阻まれて掘り下げを断念した。出土遺物にはかなりローリングを受けた弥生土器破片数点があるが、この遺構の機能段階に直接的に帰属するものではない。

堆積土層中位以下には泥炭土層様の土層の堆積が認められ、滞水していたと考えられる。先述の溝状遺構に接続する点などを考慮すると水溜的な用途が考えられる。

井戸跡（SE001）

井戸跡は調査区の東端において検出した。掘り方の平面プランが方形を呈し、1.6m×1.7mの規模を有する。検出面からの現存深度約0.8mを測り、掘り方内部中位には段状の平坦面が認められる。埋土内に数枚の板材片が遺存しており、その一部はあたかも先述の段に対応するように配置される。このような状況からこれらの板材が井桁基底部の一部をなし、段状平坦面が支えとして機能していた可能性も考えられる。その場合、堆積土層の状況から井桁の上部は井戸廃棄時に抜き取られたものと判断されよう。

出土遺物は概して少ないものの、豊後大分型甕の破片や、最下部に位置する埋土上部から土師器杯の完存



第20図 SE001平面・断面実測図（1/30）

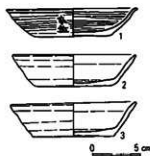
品が3個体出土している。これらの遺物は出土状況から井戸の最終機能段階に投棄されたものと考えられ、井戸の廃棄年代を8世紀末前後に想定することができる。

土坑 (SK001)

井戸跡に切られる形で調査対象地の東端に存在する不定形の土坑がある。淡茶褐色土層の単一土層を埋土とし、少量のカーボン粒を内包する。

埋土中位において径20cm程度の隙が2点認められた。

出土遺物には、弥生時代中期に属年される下城式土器の甕、壺などの破片資料がある。

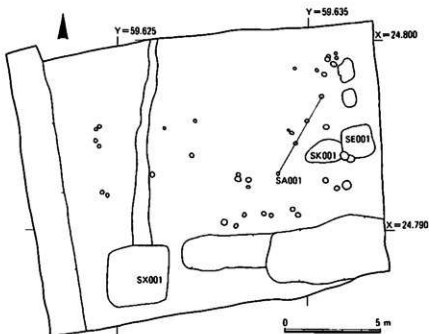


第21図 SE001出土遺物実測図 (1/4)

柱穴・柵列 (SA001)

調査区内において数個の柱穴を確認している。上面削平のため遺存状況は良好とはいえない。削平レベルの関係で、調査区東側に比較的遺存している。特に井戸跡の西側に4個の柱穴が柵列状(SA)に検出されており注意される。暗茶褐色土を埋土とし、柱痕などは確認されない。出土遺物も皆無であり、所産時期の特定を行うことはできなかった。

今回の特筆すべき事項として8世紀代(奈良時代)の井戸跡の発見をあげることができよう。これまで下郡遺跡群での当該時期の井戸跡の検出事例は主として区画整理対象地域の西側部分を中心に確認されており、東側地域では初例となる。また、過去の調査において今回の調査地点の東側約100mの地点で少量ながら当該時期の遺構・遺物が唯一確認されており、今回の調査所見において遺跡がさらに西側に展開している事実を



第22図 遺構配置図 (1/200)

示すことができた点は大きな成果といえよう。また、井戸跡からは祭祀行為に伴うと考えられる土師器環が3点出土しているが、この内の1点には焼成前に『家蓋』と刻書されており、その意味するところも含め注目される。出土した土師器は2点が在地系の環、他の1点が回転ヘラ削りおよび回転ヘラミガキを施す大宰府系の環により構成される。この中で刻書された土師器が後者の大宰府系の環である点も、当該時期の複数系統土師器の使用分担を含めた用途解明に際しての参考事例となろう。

(坪根)

VII 下郡遺跡群第70次調査 E区n・o-16地点

調査面積 1,655㎡
地域 A

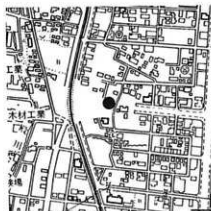
調査期間 95.11.09～95.12.28
調査担当 坪根伸也

本調査地点は、現在建設中の都市計画道路庄ノ原佐野線の2工区部分に相当し、調査はこの道路建設の事前調査として実施した。また、当地は調査前に数軒の個人専用住宅に利用されていた地域に相当する。

今回の調査地点は、現在の下郡集落の中を通る旧道の東側にあたる。このような旧道沿いには、古くから集落が形成されていたことが他地点の調査所見により明らかにされており、本調査地点においても、同様の遺跡様相が想定されていた。

調査の結果、この想定を裏付けるように道路際部分を中心に近世遺構が集中的に検出される。また、この部分は西側部分よりも1段低く、集落形成にあたり、地下げが行われたと考えられる。

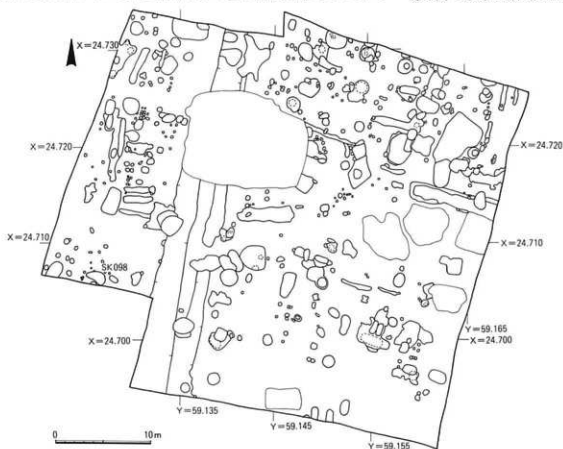
近世遺構には、溝状遺構、土坑があり、溝状遺構は先述した段部の境に沿い南北方向に調査区を縦走する。何度かの造り替えあるいは掘り返しの痕跡が認められる。埋土の断面観察の結果、流水、滞水等を示す土層堆積物は確認することができないことから、なんらかの土地区画のための機能が考えられる。現在もこれにより分割された区画が踏襲されており、東西の段差もこれに沿っている。溝埋土中には一定量の遺物を内包しており、そ



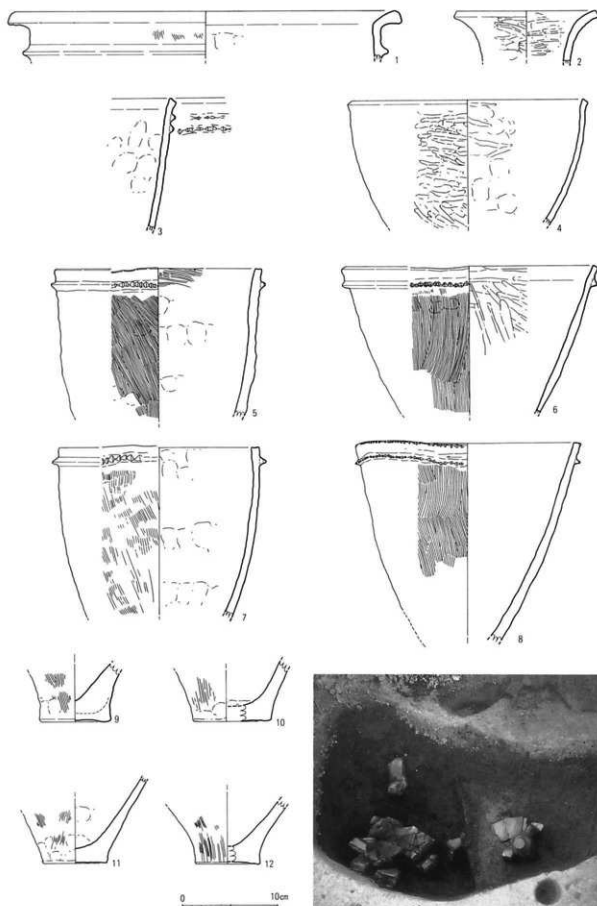
第23図 調査地点位置図



第24図 調査区全景（北から）



第25図 遺構配置図 (1/400)



第26図 出土遺物実測図 (1/6)



第27図 SK098遺物出土状況

これらの遺物から判断される溝の最終機能時期は18世紀後半と考えられる。

他に弥生時代中期の所産となる土坑を多数検出した。前述の溝状遺構の東側は地下げにより当該時期の遺構の検出例は乏しいが、対する西側部分には比較的遺存状況の良好な土坑群を検出することができた。なかでもSK098は検出面から0.7mの深度を有し、埋土中位を中心に変形土器などをまとまった状態で内包する。

出土土器は第26図に示すようにいわゆる下城式系変形土器が主体を占め、少量の東北部九州系壺と鉢形土器、短口縁を有する壺形土器によって構成される。

第26図1は東北部九州系の変形土器口縁部である。復元口径41.4cmを測る。内・外面ともに明茶褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石、褐色粒子の微粒を包含する。口唇部は強い横ナデにより強調され、口縁屈曲部から若干下がった位置に三角突帯が貼布される。2は壺形土器口縁部破片である。内・外面とも横方向を基調とするヘラ磨きが施される。4は素口縁をもつ鉢口縁部破片である。口縁端部分で約2/3程度が残存する。口径25.2cmを測り内・外面に比較的密なヘラ磨きが施される。底部部分は遺存していないが、類似資料に大分市大在浜遺跡出土資料、ならびに大分市久原遺跡出土資料がある。これらから推定される全体形状は方形透かしを有する脚部をもつ台付鉢になる可能性が高いと考えられる。3・5～8は下城式系変形土器口縁部である。全体のプロポーションから次の二類に分別することができる。

1類（5・7）口縁部から砲弾型に底部へすばまる全体形状を有するもの

2類（6・8）口縁部から底部にV字形を想起させるごとく直線的に終息するもの。

さて、下城式系の変形土器について、出現期からの型式変遷を考慮すると1類は前期の下城式系変形土器のプロポーションにより近い様態を保持し、2類のものは新出の形状を示しているといえる。

今回の出土資料は遺構埋土中位とはいえ、掘り返しに伴う同一土層からのまとまった出土状況を示しており、良好な一括資料と評価される。このような状況から当該資料の年代観の推定を行なう。まず、2類の出現時期であるが、須玖系土器との共伴事例から、中期中頃～後半に比定される下郡遺跡群第75次調査地点SD002出土資料中の下城式系変形土器がすでに2類に転換しており、出土資料の器種構成比率に占める割合が極めて低くなっている点を考慮すると、中期中頃には確実に存在すると考えられる。また、前期段階に類似資料はない。

次に伴出している東北部九州系の壺をみると、口唇部を今回の資料のように極端に強調する例は今のところ中期中頃以降の資料に散見され、中期初頭、前半以前に確実な事例は存在しない。

以上の点から現状ではSK098出土資料を中期前半～中頃に位置づけることが可能である。

（坪根）

VIII 下郡遺跡群第60次調査 J区p-8 地点

調査面積 46㎡
地域 A

調査期間 95.05.17
調査担当 坪根伸也

調査は区画街路の築造に伴う事前調査として実施した。

調査対象区域内には現在も使用されている道路等が所在するため、調査可能な範囲に下記のように調査区を設定し調査を行った。

仮設道路設置のために搬入された約60cmの表土（濁黄茶褐色土－客土）を除去し、その下部に存在する暗茶褐色土層下において遺構の存在を確認することができる。遺構検出が行える黄茶褐色土層は硬質で、他地点において確認できる同種の層の中でも比較的下位層の様相を呈している。このことは、暗茶褐色土堆積以前に同層の上部が削平を受けたことを示唆しているものと考えられる。

調査の結果、柱穴、灰を充填する土坑1基を確認することができた。

これらのうち、調査区のほぼ中央付近に集中する柱穴群と土坑は同一の住居跡に帰属するものと考えられ、4本の主柱を持つ堅穴住居跡の存在が想定される。

遺物は土坑中から土器小破片が数点出土したのみであり、しかもいずれの破片も図化の不可能な破片ばかりであることから時期の特定は行えない。

4本の主柱を有し、南側の柱間に灰溜まり土坑を有する住居形態は、弥生時代後期末前後の大分平野部に通有のものであり、本住居跡も当時期の所産と考えて大過ないと考えられる。住居壁や本来の住居床面も確認されていないことから、明らかに上部の削平を受けたものと考えられる。遺構の密度が粗である事実もこれらの知見を傍証するものと言えよう。

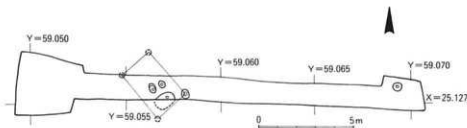
今回の調査では弥生時代後期末前後に比定される堅穴住居跡の存在を確認した。

今次の調査対象地域であるJ区は、現在の下郡地区の集落と重複する部分が多く、そのためにこれまで調査歴が他地点に比して極めて少なかった地域に相当する。過去の調査データとしては、当地点の南側約100mに位置する下郡遺跡群第31次調査が唯一の事例である。第31次調査では、弥生時代後期末を中心とする堅穴住居跡をはじめとして、和泉型瓦器壺を内包する12世紀代の井戸跡などが確認されている。第60次調査では中世遺構の存在を明らかにすることはできなかったが、堅穴住居跡の検出により、当該時期の集落遺跡が、第31次調査地点の北側にも広範に展開する事実を示した点は大きな成果といえよう。

（坪根）



第28図 調査地点位置図



第29図 遺構配置図 (1/200)

IX 下郡遺跡群第71・76次調査 E区j・k-13、k-13地点

調査面積 1,710㎡
地域 A

調査期間 95.11.14～96.05.01
調査担当 後藤典幸

第71次調査 (j・k-13地点)

今回の調査地点は、大分川の河口近くの右岸に展開する下郡遺跡群のほぼ中央に位置し、平成元年度に調査を実施し「陶質土器」を出土したE区ℓ-12地点の北側隣接地に相当する。

調査の結果、土坑・井戸跡・貯蔵穴・溝状遺構など、弥生時代から近世の多数の遺構を検出した。

〈溝状遺構〉

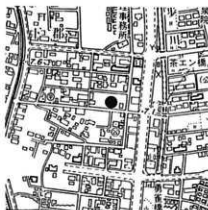
近世以降の大小の溝状遺構を数条確認している。それらは数回の掘りなおしが認められ、方形に区画された空間を形成する。また、調査区を斜行し、方形区画に添うように、版築状の土層堆積を示す掘り込み地帯がみられ、道路状遺構の可能性も考えられる。これら溝状遺構や道路状遺構の上に現在の道路が造られていた。このことは方形区画の空間が現在まで踏襲されていたことを示す資料となるであろう。

〈井戸跡〉

井戸跡も多く検出され12基+αを数えた。ほとんどが近世・近代の遺構だが、調査区南側中央付近において、円形の掘り方を有し、井形に組んだ木枠が残る平安時代の井戸跡SE089を1基確認した。井戸枠は、井戸検出面から深さ0.85mのところであり、0.4m×1.5m程度の板材4枚を組んだものである。また、木枠の下に素掘りの水溜があり、掘り込み部分1.2m、底部1mの方形で深さ1.2m、井戸検出面からの深さは2.45mを測る。土層断面観察によると掘り返しがみられ、そのさいに上部の木枠が抜かれたものと推測される。

調査区中央付近から検出された明治初期の素掘りの井戸跡SE191からは、「第三大区四ノ小區

百七拾二番屋敷」と書かれた木札が出土した。この木札に書かれてある大区、小区というのは、明治政府により全国的に進められた新しい行政区画である。明治4年(1871年)4月に制定された戸籍法がもとになっており、戸籍の編成のため戸籍用の区画を設けたので、それがそのまま行政上の区画となっていたのが、大区・小区制



第30図 調査地点位置図



第31図 71次調査区全景



第32図 ST081遺物出土状況

であった。大分県での大区は各郡を単位とし、大分郡は第三大区、海部郡は第四大区であった。そして、第三大区には27の小区が置かれていた。当時、下郡は下郡村と呼ばれ、行政区画としては第三大区第四小区であった。今回出土した木札は、それを裏付ける物証資料といえよう。

〈貯蔵穴〉

弥生時代中期の貯蔵穴も多く検出された。貯蔵穴は上部を削平され、基底部しか遺存しておらず、底面中央に円形の窪みを有するものが多数を占めた。それらは円状に分布し、そのうち数基には底面直上に土器を内包するものもみられた。

〈土壌墓〉

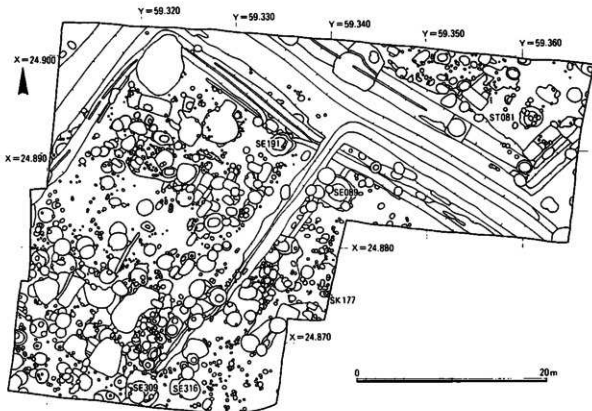
調査区東側で確認された土壌ST081は、長方形掘り方を有し、人骨が検出され、京都系土師器の皿と底部糸切りの小壺が出土している。これらのことから、16世紀後半の土壌墓の可能性が考えられる。

今回の調査では、下郡の近世、近代集落の区割の状況などを少なからず垣間見ることができ、近世の把握に有効な資料となるであろう。

第76次調査（E区k-13地点）

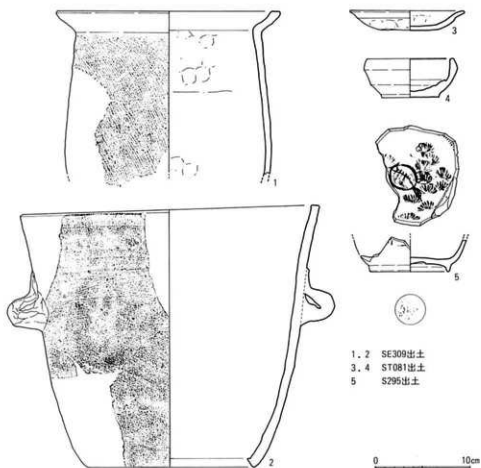
第71次調査と調査地点名は異なるが本来は隣接する一連の調査である。

調査の結果、弥生時代中期の貯蔵穴多数、弥生時代終末期の竈形墓1基、井戸跡5基+α、近代まで踏襲された溝状遺構1条を確認した。



第33図 遺構配置図 (1/400)

下郡遺跡
第71次調査
第76次調査



第34図 出土遺物実測図 (1/4)

〈貯蔵穴〉

貯蔵穴は、円形を呈し、上部を削平され基底部しか遺存しておらず、底面中央に円形の窪みを有するものが多数を占めた。それらは円状に分布し、そのうち数基には底面直上に土器を内包するものがみられた。

整理の途中であるが、15m以上離れた貯蔵穴内の遺物が接合するという状況が認められ、遺構の同時性の検証に好材料を提供するものと期待される。



第35図 SE309完掘状況



第36図 SE316完掘状況

〈壺棺墓〉

壺棺は、調査区東側土壌SK177から検出された。土壌は楕円形を呈する掘り方を有し、検出面において現状で長軸0.88m、短軸0.56m、深さ約0.3mを測る。後世の柱穴に切られたり、削平により壺上部は欠損し、遺存状態は良くない。遺存する底部付近に外側からの焼成後穿孔が認められる。

〈井戸跡〉

井戸跡は、調査区南側中央付近において、略方形の掘り方を呈し、最下部に井形に組んだ木枠の残る奈良時代のもの（SE309）を検出した。井戸枠は、井戸底に直接設置されており、0.3m×1.5m、厚さ5cm程度の板材4枚を井の字形に組み合わせたものを3段重ねている。これらの上部には腐食した板材の痕跡が認められることから、当初は4段以上重ねられていたと考えられる。井戸跡の検出面での掘り方の規模は2.4m×2.5m、井戸底までの深さ1.9mを測る。また、他に平安（SE316）、室町、江戸時代末期の索掘りの井戸各1基を確認している。

〈溝状遺構〉

溝状遺構の最終埋没は、出土遺物から昭和初期と考えられるが、隣接する71次調査での所見から、掘削時期は近世後半期であろうと思われる。

出土した近世遺物の中には、判読はできないが、カントン碗の底内面に焼継文字が見られるもの1点と、「波ぎ原新町国印」という焼継文字の書かれた染付破片1点が見られた。この「波ぎ原」という地名は、現在、調査地の北方向約2kmに位置する「萩原（はぎわら）」であろうと比定され、当時（19世紀）の下郡の近隣との物流状況を示す資料として重要といえよう。

（後藤）

下郡萩原
元71次調査
新発見遺物

X 下郡遺跡群第73次調査 H区q-16地点

調査面積 223㎡
地域 A

調査期間 96.01.08～96.01.17
調査担当 坪根伸也

本次の調査地点は大分川に並行して展開する帯状の段丘高位部に位置しており、JR豊肥線が調査区に東接して南北方向に縦走する。また、路線を挟み対峙する位置には8世紀後半から9世紀初頭に比定される道路跡が確認された第69次調査地点（E区p-16地点）がある。

今次の調査では弥生時代、古墳時代、古代の3時期に渡る遺構を検出した。弥生時代の遺構には溝状遺構（SD001）と竪穴住居跡（SH017）がある。SD001は調査区の北東角から南西角へむかって縦走する形で検出された。検出面での幅3.5m、現存深度1.1mを測る。溝の断面形状は端正な逆台形を呈し、埋土中にはラミナ状の水性堆積物が認められ、溝の埋没途上に流水のあった事実が知られる。しかも、水性堆積物はシルト質の間層を挟み数層を確認することができることから、複数回の流水により堆積したものと考えられる。さらには、数度の人為的な掘り返しの状況が看取され、これらの所作後にも複数回の流水→埋没という過程が繰り返されていたものと推測される。また、堆積土層の観察からは積極的な滞水の実事を示す所見は得られなかった。

出土遺物には弥生時代中期中頃～後半の所産となる土器がある。基本的には下部層から上部層までに同種の土器破片を内包するが、出土の中心は溝埋土の中間層、すなわち最終掘り返しの下部層に集中する。これらの遺物は溝が最終的に機能を停止した段階に行なわれた廃棄行為に伴うものと考えられる。

SH017は調査区西壁付近で検出した。削平のため住居プランは遺存しておらず、壁溝の一部と東側の主柱穴をかりうじて確認した。壁溝は南東角コーナー部分にあたるもので、この形状から方形ないしは隅丸方形プランを呈していたものと推定される。壁溝と主柱との位置関係から推定される住居の東壁長は4.5m前後である。遺存する遺構埋土から出土する土器破片から弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期所産と考えられる。

古墳時代の遺構には竪穴住居跡（SH002）がある。SH002は方形プランを呈する竪穴住居跡である。4本の主柱を有し平面規模は4.6m×5.0mを測る。東側壁際には竈を付設する。現存する壁高



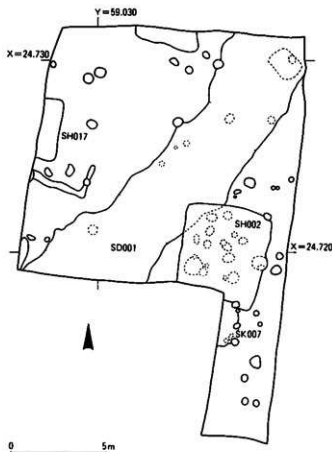
第37図 調査地点位置図



第38図 調査区全景



第39図 SD001検出状況



第40図 遺構配置図 (1/200)

は5cm前後と遺存状況は良くない。したがって出土遺物も概して少ないが、埋土中から陶器編年Ⅲ型式2段階に比定される須恵器破片が出土しており、おおそ7世紀後半の時期所産と考えられる。

古代の遺構には唯一1基の土坑(SK007)がある。SK007は約半分が調査区外に展開しており、全容の把握は困難であるが、略円形を呈するものと考えられる。現存深度0.25mを測り、埋土内に少量の土師器、須恵器片を内包する。これらは8世紀前半から中頃に比定されるものであり、当該遺構の所産年代を示唆している。

今回の調査地点は、第69次調査地点で検出された古代(8世紀後半～9世紀初頭)の道路跡に近接し、関連遺構の確認が期待されていた地点でもある。調査の結果では直接的に関連性を示唆するような遺構の確認はできず、若干先行する土坑(SK007)を検出したにすぎない。今後の周辺地域における当該期の遺構の探索が急務といえよう。

(坪根)

XI 下郡遺跡群第74次調査 I区s-10地点

調査面積 100㎡

地域 A

調査期間 96.02.07～96.02.08

調査担当 坪根伸也・新藤美由紀

今次の調査は区画街路下郡羽田線築造工事に伴うものである。本地点は大分川本流に沿いその右岸に展開する自然堤防の西端に位置し、調査区西側は比高約1.5mの段差を有し、旧河道に至る。また、対する東側には南北方向に現用道路が存しており、調査はこの両者に挟まれた約100㎡について実施した。

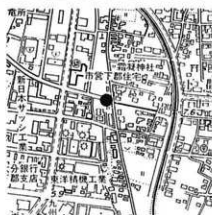
調査の結果、後世の削平などにより遺存状況は良好ではなかったが、堅穴住居跡に伴うと考えられる小溝、柱穴を確認した。SH004はすでに床面下位まで削平が及んでおり、平面プランを明確に把握することはできなかった。かろうじて遺存していた小溝と主柱穴になると考えられる柱穴の存在によってのみ認知することができる。検出した小溝は最深部で0.2mの深さを有し、検出位置と形状から壁溝であったと考えられる。また、主柱穴と考えられるピットは弧状をなす小溝の内側で確認され、これから推定される住居規模はおおよそ6mを測るが住居跡の半分以上は調査区外に展開する。また、柱穴の配列から主柱は6ないし8本あったものと推定され、住居形態は円形あるいは隅丸方形であったと考えられる。

出土物は遺構の遺存状況に対応して極めて少ない。

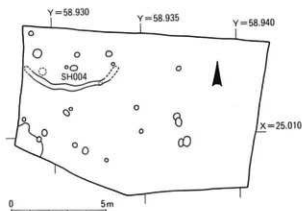
出土物には弥生後期土器、6世紀代に比定される甕破片などがあるがその大部分は検出面直上の表土層からの出土である。

第43図1は型づくりによる陶製の茶入れである。片面には「お茶」という文字が陽出され、他方には動輪マークがレイアウトされている。赤茶褐色の胎土に明黄褐色の釉が薄く施釉される。昭和20～30年代の美濃焼であろうか。表土中から出土した。

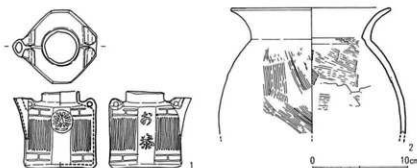
第43図2もまた表土から出土した弥生時代後期後葉～終末に比定される甕型土器である。内・外面とも明茶褐色を呈し焼成は良好である。本資料と明らかに同一個体と考えられる破片資料がSH004から出土しており、当該資料がSH004に伴出したものである可能性は極めて高いと考えられる。(坪根・新藤)



第41図 調査地点位置図



第42図 遺構配置図 (1/200)



第43図 出土遺物実測図 (1/4)

XII 下郡遺跡群第75次調査 H区r-21地点

調査面積 300㎡
地域 A

調査期間 96.02.14～96.04.04
調査担当 新藤美由紀

今回の調査地である、H区r-21地点は下郡遺跡群に属している。

また調査地は、平成元年度に行われたH区s-19～23地点（第39次調査）に隣接し、その調査では、弥生時代終末～古墳時代の堅穴住居跡、方形土坑、溝状遺構等が検出されている。

調査は下郡地区土地画整理に伴う、アパート建設の事前調査として実施した。

調査の結果、奈良時代前半の溝状遺構（SD001）、弥生時代中期中頃～後半に比定される溝状遺構（SD002）、古墳時代初頭前後の住居跡（SH001）を検出した。



第44図 調査地点位置図

SD001は調査区中央を南北に走る溝状遺構である。現代の水田構築に際し削平を受けており、現状では幅0.5mで、深さ0.5mを測る。埋土は褐色土層、褐色土と暗褐色土の混土層の二層により構成される。調査区の北側部分ほど溝は浅くなり、ほぼ中央の辺りで溝は消失する。

SD001に伴う遺物としては、褐色土と暗褐色土の混土層内から底面が手持ちへう削りの土師器片等が数点が出土している。

SD002は、縄文時代の包含層を掘りこんで形成された溝状遺構である。SD002もSD001と同様に、現代の水田構築に際し削平を受けている。

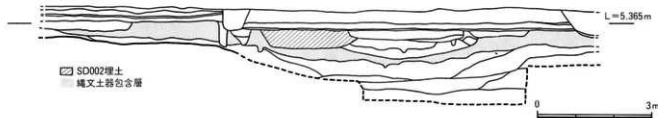
現状では、幅1.2m、深さ0.3mを測り、断面形は凹レンズ状を呈している。埋土内には原形を留めたままの土器を含む、夥しい量の土器堆積を確認した。

出土遺物の中には、弥生時代中期中頃～後半に比定される、高坏・朱塗りの壺等がある。また、同時期の磨製石鏃も一点出土している。

SH001は、埋没したSD002の上に構築されている。現状で、4.0m×4.0mの規模を測るほぼ正方形の住居跡であり現存深度約0.1mを測る。

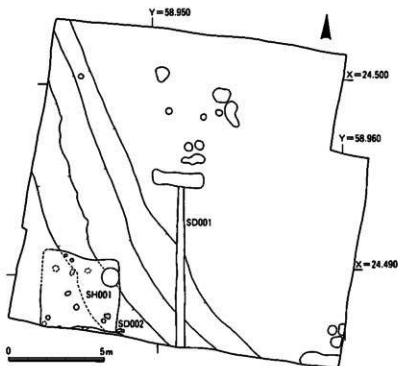
住居内は炭・炭化木・焼土で覆われており、この住居が焼失住居であったことを想定させる。住居内の焼土を除去すると中央部分に炉跡を確認することができた。炉の形態は地床炉である。

出土遺物には、弥生時代中期中頃～後半、同後期初頭、同後期後半から古墳時代初頭の土器の破片数点が出土し、鉄鏝も出土している。大分県での鉄器の出土は弥生時代後期後半以降急増する傾向が指摘されており^註出土



第45図 調査区南壁土層断面図（1/100）

下郡遺跡群
第74次調査
第75次調査



第46図 遺構配置図 (1/200)

土器から想定される所産時期と一致する。したがって、SH001の時期を弥生時代後期後半～古墳時代初頭前後のものと考えて大過ないであろう。

また、今回の調査では調査区内に縄文時代の包含層があり、さらにその下は、旧河道であったということも確認することができた。

調査区南壁での土層観察の所見によれば、水田基盤層の下に縄文時代後期の包含層を確認でき、この包含層を掘り込んだ形でSD001、SD002、SH001が確認できる。包含層は、調査区全体にみられるのではなく、調査区の約半分、西側地域のみにもみられる。

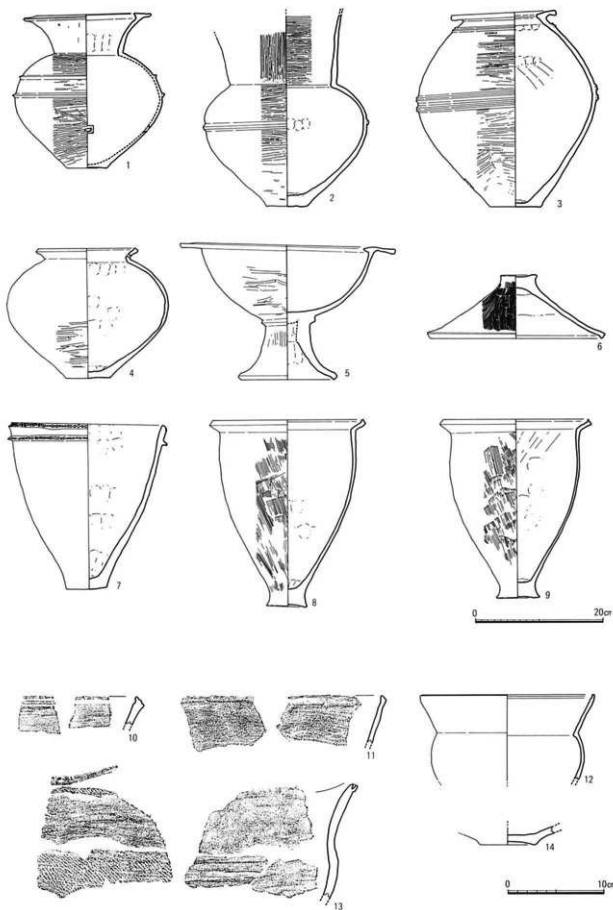
この包含層から土器が何点か出土したが、その中には三万田式土器（細線羽状文期）の深鉢片も含まれている。これらの出土遺物から、この包含層は縄文時代後期のものと考えられる。

調査区西側では縄文時代後期包含層の約1m下、東側では、遺構検出面約1m下から、ラミナ堆積物がみられる。このことから水が流れていたことがわかり、調査区はかつて旧河道であったと考えられよう。

今回の調査の成果のひとつにSD002の確認が挙げられる。遺存状態は良好とはいえないものの、下郡遺跡群内での弥生中期中頃～後半の溝状遺構は確認例が少なく、今後の周辺地域の調査におけるデーターとして重要なものとなるであろう。

註『大分県史 先史篇Ⅱ 大分県の弥生時代』

（新藤）



第47図 出土遺物実測図 (1/6・1/4)

XIII 下郡遺跡群第80次調査 J区p-10地点

調査面積	84㎡	調査期間	96.03.12～96.03.21
地域	A	調査担当	坪根伸也

今次の調査は区画整理事業に伴う整地工事部分を対象としたものである。事前の予備調査の結果、調査対象区の西側部分は後世の大規模な掘削地業により遺構はすでに欠失していた。調査はこれらのデータを踏まえ、対象区の東側84㎡について実施した。

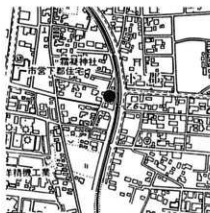
調査の結果、遺構は削平を免れた東側部分の黄褐色土層（基盤土層）上面において確認される。柱穴、土坑等が主体を占める。なお、当該調査区において検出された多数の柱穴群に規制的な配列を認めることはできなかった。柱穴内から出土する遺物には、底部糸切り底を呈する土器器環破片、瓦質埴鉢片などの他、てづくね成形になるいわゆる「京都系土器器環」の破片を内包するものもあり、14世紀代から中世末期に属するものの存在を示唆している。

土坑状の遺構は調査区の随所において確認される。SX001は調査区の北東部において確認した方形プランを呈する土坑である。0.8m×0.7mの規模を有し、現存深度約0.45mを測る。堆積埋土は上下2層に分層が可能である。上部層は暗茶褐色土と黒茶褐色土ブロックとの混土層よりなり、下部層はこれに灰茶褐色粗砂層がミックスした混土により構成される。この遺構の特徴としては底面に埋置された二つの円礫があげられる。円礫は遺構底面のほぼ中央に配置され、あたかも礎盤あるいは根占石的な機能を想起させるが、前述のとおり埋土内には柱痕等は確認することはできず、その機能は不明である。また、埋土状況は、当遺構が人為的に埋められたものであることを示しているが、調査所見からは墓域等であると積極的に位置づけられるデータも得られていない。さらに出土遺物も皆無であり、属属年代も不明である。

SX002は0.7m×0.5mを測る長方形プランを呈する土坑である。SX001の南約1mにあるが、軸は一致しない。現存深度約0.4mを測り、底面に円礫が埋置される状況、暗茶褐色土+黒茶褐色土ブロック+灰茶褐色粗砂の混土層が最下部に充填される点などはSX001に酷似する。相違点としては暗茶褐色土を埋土とする掘り返しが認められ、円礫上面を下端とする柱痕が認められる点がある。この段階で円礫は根占石として有効に機能しており、SX002は柱穴としての役割を果たしている。出土遺物に関しては土器小片が少量出土しているのみであり、SX001と同様に属属年代を特定することはできない。ちなみに掘り返し段階で確認された柱痕径は約0.17mを測る。

SX002に類似する遺構にSX051があるが、この埋土中からも出土遺物は皆無であり、時期の特定を行うには至らなかった。また両者は約0.9mの間隔をもって軸を同じくするが、調査区内ではこれ以上の展開を確認することはできなかった。

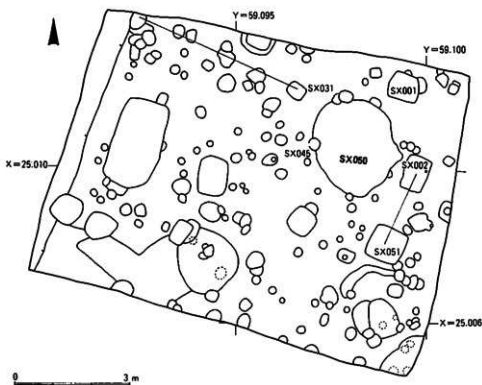
SX050は不定円形を呈する土坑である。平面規模は長軸2.5m、短軸2.2mを測り、現存深度は約1.1mを有する。基本的な断面形状は埴鉢状をなしており、内壁面の周囲には抉れが認められ、埋土状況から滞水による水理作用によって生じたものと推察される。これを裏づけるかのように人為的に埋め戻されたと考えられる最終埋没土



第48図 調査地点位置図



第49図 調査区全景



第50図 遺構配置図 (1/100)

以外の土層は粘性の強い粘質土により構成される。また、土層断面所見から複数回の掘り返しも認められている。これらの状況から当該遺構は米廻りの水溜としての機能想定が考えられよう。出土遺物には土鍋口縁部破片、東播系須恵器鉢、瓦器口縁部片などが出土しており、このような出土遺物の様相からおよそ13世紀末～14世紀の帰属年代を推定できる。

このSX050と切り合い関係を有するSX045からは口径8.5cmを測る土師器小皿が出土している。完成品であり、底面中央には貫通する円孔が穿たれている。なんらかの祭祀に伴うものであろうか。

以上が主要検出遺構の概要である。検出遺構は時期的に14世紀前後のものと京都系土師器皿を内包する中世末期の二時期に分けられる。第50図の遺構配置図には京都系土師器皿破片が出土した柱穴を抽出し結線を試みた。この作業により求められた結線の方法は先述のSX002、SX051の軸線とはほぼ直角の方位を示し、両者になんらかの関連がある可能性を示したといえる。狭小な調査区にあっては、遺構間の関連性を認定し難いが、上記所見を今後の調査における仮説とし、周辺調査データの蓄積に伴う実証に供したいと思う。

(坪根)

平塚市
市史資料
第10号

XIV 横尾遺跡群第43次調査 D-39、E地点（有田遺跡）

調査面積	340㎡	調査期間	95.04.25～95.05.26・95.11.29～95.12.22
地域	E	調査担当	池邊千太郎

本遺跡は、大分市の中央、大字横尾字江又に所在し、大野川河口から約6.5km南に位置し、その左側段丘の標高22～23mの東斜面にあたる。遺跡の直下には縄文時代の貝塚である横尾貝塚が位置している。

検出した遺構は、掘立柱建物跡が6棟、柵列が2条、土坑が3基、堅穴遺構が2基のほかピットが数基である。

堅穴遺構（SX001）は、一辺4mの隅丸方形で周壁には径20cm大の柱穴が等間隔に数十穴巡っている。さらに床面は、貼り床が確認され、フラットになっており、住居跡の可能性も考えられる。埋土からは、大量の土師器（9世紀前半代）が廃棄された状態で出土した。遺物は、土師器の環・蓋・壺・甕・移動式カマド・甕・土鍾など多種のものが多量に出土し、これに混じって1割ほどの割合で須恵器の壺・甕などが見られた。



第51図 調査地点位置図

調査区の東側には、建物跡が密集しているが、これに近接して1号土坑（SK001）が確認された。この土坑は、一部の建物跡と切り合いが認められ、長軸1.9m、短軸1.5mの隅丸長方形の掘り方を呈するものである。土坑内からは完形品やそれに近い9世紀前半代の土師器の環・蓋・甕が出土し、一括廃棄された状態であった。

これに隣接して掘立柱建物跡は、6棟検出された。

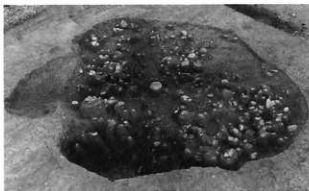
最も規模が大きい掘立柱建物跡は、3×2間の桁行6m、梁行4mの身舎面積24㎡である。1間の間隔は2mあまり、柱穴の直径は、70～80cmで、柱痕は径14～15cmである。また、調査区の北東隅に総柱の倉庫跡と思われる掘立柱建物跡が一部検出されている。建物は2×1+α間であり、1間の間隔は2mを有するものである。こうした柱穴の中には、柱を抜いた後に完形の土師器環を埋納した遺構が数ヶ所検出された。土師器の環の内・外面には丁寧に磨きが行われており、器形などから9世紀前半代のものと思われる。そのほかに甕・移動式カマドの土師器片も柱穴の埋土から見つかっている。

もとの地形は東下りの傾斜地であり、この斜面地の削平を行い整地した後、建物の建設を行っている。建物は一律に南北方向に桁行を向け、西側は造成の背後地になることから明らかに東方向を意識した建物配置である。また、建物の建てられた範囲は限られており、その中でも北より大型の掘立柱建物、南にこれより小型の掘立柱建物で幾度にもわたり、最低でも4回の建て替えが行われている。

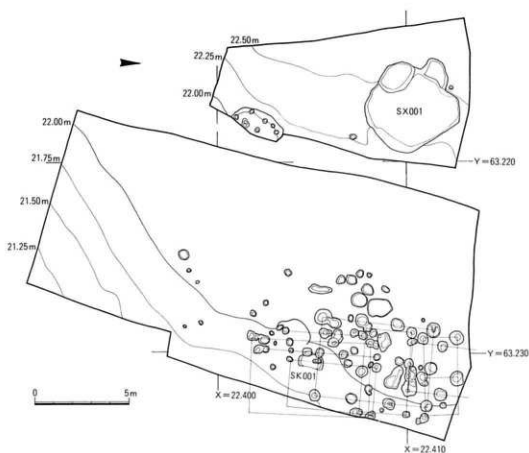
遺跡は、大分市内を流れる一級河川の大野川や乙津川が見下ろせる場所にあり、下流に向かえば地蔵原遺跡や



第52図 掘立柱建物跡完掘状況（北より）



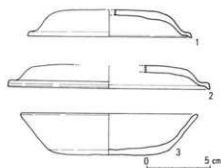
第53図 SX001遺物出土状況（南より）



第54図 遺構配置図 (1/200)



第55図 SK001遺物出土状況 (東より)



第56図 SK001出土遺物実測図 (1/3)

猪野新土井遺跡など官衙的な施設が推定できる地域が広がり、瀬戸内海に面する一方、上流側の松岡地域では、丹生駅の候補地として推定される丹生の地名が残る場所である。そうした古代における海と川の交通上の好位置にあり、今回のような掘立柱建物跡が、一般集落に見られるような立地でないことや建物規模などから平安時代の初め頃に特殊な施設に相当するものが造られた可能性が指摘でき、きわめて興味深い。(池邊)

XV 横尾遺跡群第45次調査 B-11地点（東中尾遺跡）

調査面積 515㎡
地域 E

調査期間 95.10.26～95.11.08
調査担当 池邊千太郎

遺跡は大野川下流左岸の河岸段丘上の標高35mに位置し、台地の端からやや奥まった大分市大字横尾字寺ノ下に所在する。そのすぐ山際には創建1455年と伝わる寺が所在し、現在の建物は江戸時代に再建したものである。

検出した遺構は、いずれも近世の時期に相当し、東西に延びた2間(5.8m)×2間(4.4m)の掘立柱建物跡(SB001)が1棟と1間×1間の掘立柱建物跡(SB002)が1棟、南側から西側にL字状に曲がる溝状遺構とこれにつながる細い溝状遺構1条を確認した。

1号掘立柱建物跡(SB001)は、桁行が2間(3mの間隔)、梁行が2間(2.2mの間隔)で、梁行方向はN-10°-Eである。身舎面積は26.4㎡の小型の建物である。柱穴の掘り方は50×40cm、検出面から床面までの深さが30cmの隅丸方形の形状を呈している。

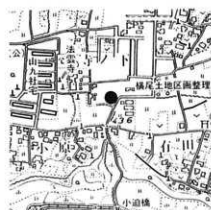
また、掘立柱建物跡の北側の桁行の内側は、一辺80cm、深さ25cmで平らな床面の形状を呈する方形の土坑が2基並行して検出されており、北側桁行の内側に当たることから掘立柱建物跡(SB001)に伴うものと想定される。これらの建物跡は規模や形態から倉庫として使用されたものと考えられる。

掘立柱建物跡(SB002)は、1号掘立柱建物跡(SB001)の東側に位置し、1間×1間で身舎面積は7㎡である。梁行方向はN-14°15'-Eであり、1号掘立柱建物跡(SB001)とは建物方向はやや異なる。

1号掘立柱建物跡(SB001)の南側と西側には、溝が巡っており、建物配置方向と一致していることから同時期の年代が考えられる。

土坑や柱穴からは磁器の破片が出土しているが、小破片のため正確な年代を決める遺物とはなり得なかった。

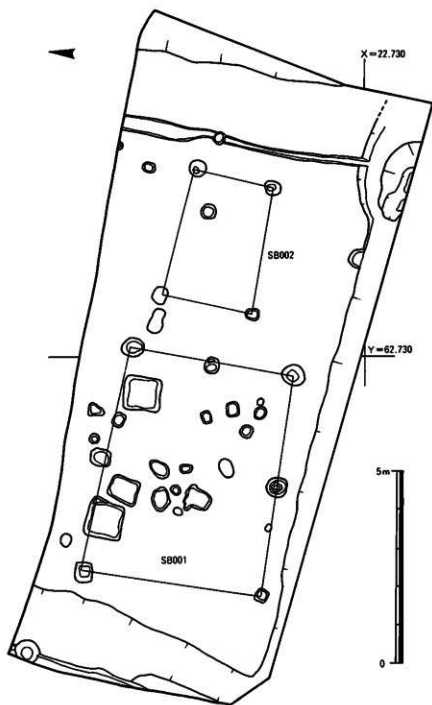
今回の調査面積は、515㎡と非常に狭く調査区の中心に掘立柱建物跡とその周囲に溝が見られるにすぎないが、この時期の遺構はさらに周辺に広がっており、遺跡の性格を知る上で今後の調査に期待される。(池邊)



第57図 調査地点位置図



第58図 調査区全景（西より）



透視圖
平面圖
剖面圖

第59圖 遺構配置圖 (1/100)

XVI 横尾遺跡群第46次調査 B-39・41地点

調査面積 700㎡
地域 E

調査期間 95.11.27～95.12.16
調査担当 池邊千太郎

本遺跡は、大分市大字横尾江叉に所在する。横尾区画整理事業区域の最南端の27～28.5mの台地斜面にあたり、東側限下には縄文時代の遺跡で有名な横尾貝塚がある。

調査区は、東西に長く南側と東側は斜面となっている。遺構はビット18基、土坑5基、地層横転遺構を1ヶ所で検出したが、台地上の端にあたり斜面という地形から遺構は稀薄であった。

このうち東側斜面の標高27m付近に、長軸1m、短軸0.7m、深さ20cmの楕円形の1号土坑(SK001)が単独で1基検出された。遺構の検出面から床面までは浅く、埋土は灰のみであり、これに混じって土師器の小皿が3点出土した。遺構の床面には拳大の石が敷き詰めた状態で確認された。遺物は、口径12.1cm、底径5.0cm、器高2.5cmと口径11.6cm、底径5.8cm、器高2.4cmの糸切り底の土師質の小皿が2点、底径3.2cmの糸切り底の土師質の小皿が1点の計3点である。遺構検出時には遺物は散乱していたが、もとは重ねて使用され置かれたものと思われる。遺物はいずれもロクロ整形のもので底部に回転糸切り痕を有していることと器形から近世の所産と思われる。

灰が充満したこの土坑は、東斜面の高台に位置しており、完形品に近い土師器皿が出土していることを考えると墓の副葬品としたものか、なんらかの祭祀的行為を行ったものと考えられる。

このほかに、調査区内には、直径2mの風倒木痕と小穴を確認したが、建物となるような遺構は見られなかった。



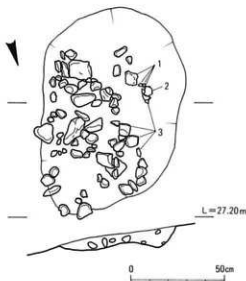
第60図 調査地点位置図



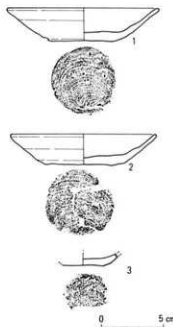
第61図 地層横転遺構検出状況



第62図 SK001検出状況

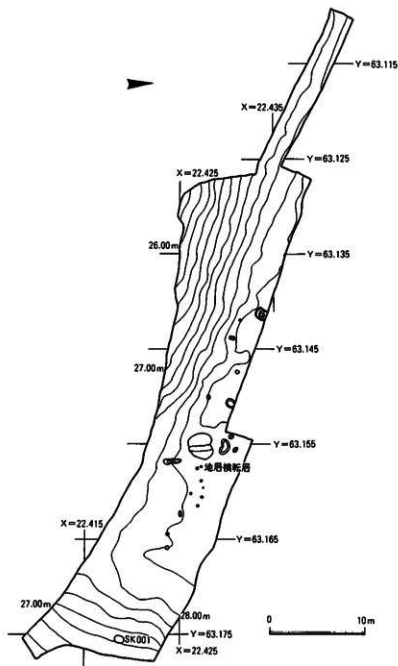


第63図 SK001平面・断面実測図 (1/20)



第64図 SK001出土遺物実測図 (1/3)

この調査地点の他に東側の調査区で平安時代の建物跡が見つかっている以外に他の時期に相当する遺構・遺物は検出されていないが、今後、1号土坑(SK001)の時期にあたる遺構が周辺部で発見されることが期待される。
(池邊)



第65図 遺構配置図 (1/400)

横断断面図
図面番号
B-00・04

XVII 猪野新土井遺跡第1・2次調査

調査面積 5,000㎡
地域 E

調査期間 95.04.13～95.10.06
調査担当 後藤典幸

本遺跡は、大野川左岸の標高40mの南北に延びた鶴崎丘陵上にあり、明治北小学校から南に約700mの場所に位置する。遺跡の東側には、大野川方向へ開析する谷が見られる。

調査の結果、弥生時代から近世におよぶ多くの遺構を検出した。特に調査区南側では、奈良・平安時代の建物跡群が広がり、一部古墳時代の竪穴住居跡なども確認している。調査区北側では、弥生時代後期の溝状遺構が延びている。また、縄文早期の押型文土器（稲荷山式）等を包含する層も確認した。



第66図 調査地点位置図

〈弥生時代の溝状遺構〉

SD005は、東西方向に掘られた幅4m、深さ1mの逆台形の溝で、西側で途切れている。溝からは、廃棄されたと思われる弥生時代後期の甕・壺・埴・高坏・鉢・器台などが完形品に近い状態で多数出土している。また、土製の勾玉や穿孔のある長頸壺・朱塗りの土器など祭祀等で使われたと思われる遺物も出土している。

同じ台地上に立地する大分市横尾所在の多武尾遺跡の環濠と、形状や遺物の出土状況が類似しており、環濠集落の一部と思われる。



第67図 調査区全景

〈古墳時代の竪穴住居跡〉

方形の竪穴住居跡が3基確認された。SH004からは、つくり付けの竈が検出され、一括廃棄された状態で土師器の坏・甕・壺・高坏などが完形品で出土している。また、SH003からは、滑石製勾玉が出土している。

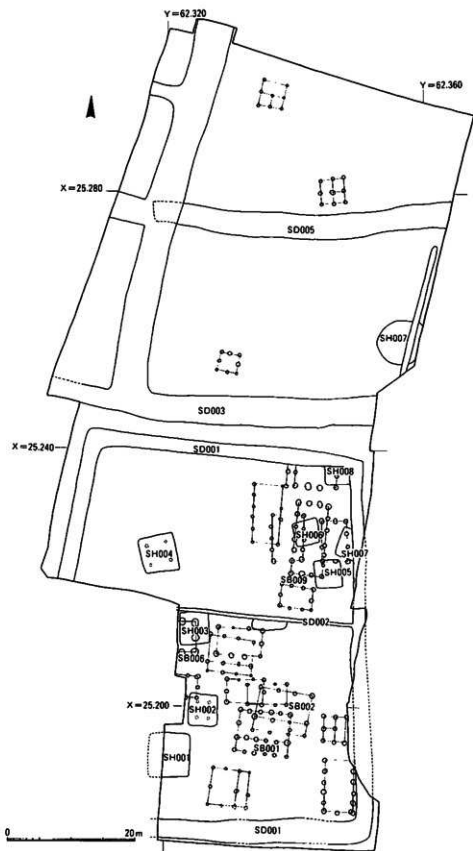
〈奈良時代の竪穴住居跡〉

3基を検出した。これまで大分市では、この時期の建物としては掘立柱建物跡しか発見されておらず、竪穴住居跡の確認は今回初めてである。3基とも方形の竪穴住居跡で、SH002・006からは、つくり付けの竈が検出された。遺物は、北九州地域から持ち込まれた可能性のある金紋型甕が見られたほか、土師器の坏・蓋・高台付坏などが大半を占めている。また、少量ながら土鍾や鉄製品（刀子等）が見られた。

特に注目すべき遺物としては、SH006から暗文が内側に施された土師器の埴と、SH005から8世紀後半から末に比定される底部に糸切り痕のある土師器坏が出土した。

〈平安時代の掘立柱建物跡と溝状遺構〉

掘立柱建物跡は調査区南側に集中し、約20棟+αを検出した。特にSB001は、5間×2間に1間の庇付き建物跡で、SB009は、6間×3間の大型の建物跡である。また、柱穴の直径が1.2mを越える建物跡SB006を確認している。



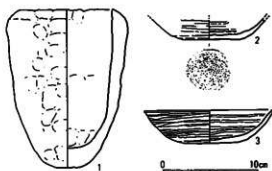
大分市埋蔵文化財調査年報
第47号
平成27年度調査結果

第68図 遺構配置圖 (1/600)

大きさを考えて、建物群のなかで主体となるものであろうが、西側調査区外に延びており全体規模は確認できなかった。柱穴内から出土の土師器等から8世紀末から9世紀初頭に比定される。SB002の柱穴からは、中国越州窯の青磁の破片が出土している。建物跡とは確認できなかったが他の柱穴から、黒色土器や緑釉陶器・灰釉陶器なども出土している。

建物群を囲むように、幅2～2.5m、深さ0.5～1mの逆台形に掘られた溝SD001が、東西45m、南北60mの規模で長方形に巡っている。掘り返しが見られ、埋土内から8世紀末から9世紀初頭にかけての土師器等の出土が認められた。さらに、その区画溝の内側を南北に区分した幅0.5m、深さ0.2mの東西方向に走る小さな溝状の遺構（SD002）を確認した。その底面には小さな掘り込みが波状に連続している状況が確認された。遺物として大宰府陶磁器分類の白磁Ⅰ類の銅片が出土している。

全国の調査例からすると、出土遺物等から、この施設は官衙などの役所的なものと考えられよう。付近の小池原に所在する地蔵原遺跡では、同じく建物群の周りに溝を巡らす施設が発見され、瓦が大量に出土している。その性格としてこの地域の有力者の住居とその私寺と考える説や、大野川を利用して輸送した物資の集積場とする説があり、この遺跡との関連を究明することが今後の課題であろう。



第69図 SH005出土遺物実測図 (1/4)

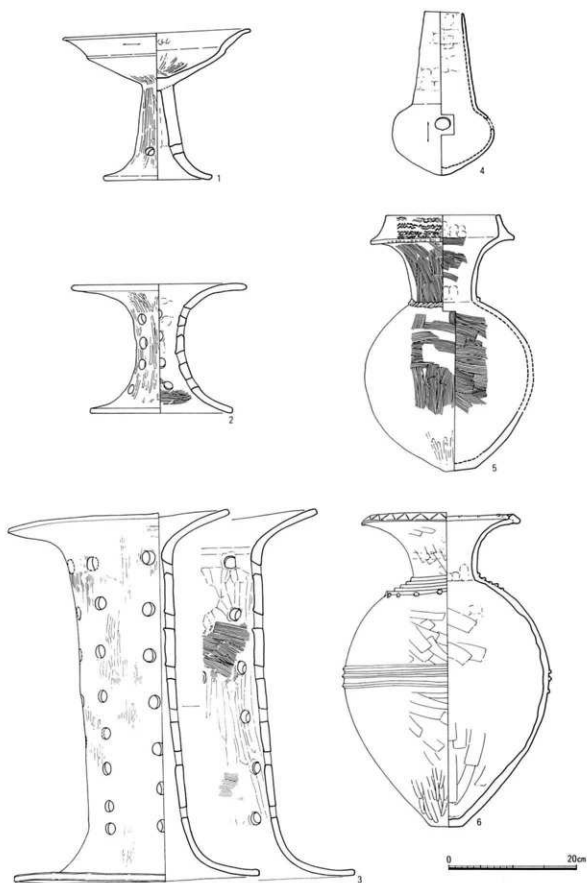
〈江戸時代の溝状遺構〉

溝は、畑地等の境界と思われる東西方向・南北方向ともに幾度も掘り返されており、多数確認された。特に東西方向の溝SD003は、幅3～4mで、深さは西側で1.5m、東側では2mを越え、東に向かって傾斜している。埋土の中からは、肥前の甕（19世紀前半の所産）を始め、多数の陶磁器類が出土している。

当遺跡の立地する台地に、弥生時代から平安時代にかけて大規模な遺跡が形成され、多くの建物群を持った施設が設けられた背景には、古代において当地の地勢上、交通上の優位性が強く作用したものと考えられる。



第70図 SH006出土遺物実測図 (1/4)



第71図 SD005出土遺物実測図 (1/6)

XVIII 府内城・城下町跡第6次調査

調査面積 590㎡
地域 A

調査期間 95.05.09～96.01.31
調査担当 讃岐和夫

府内城跡は、大分市荷揚町に所在している。現在は城址公園として、大分市のシンボルの史跡の役割を果たしており、市民に親しまれている。当城跡は、本丸、二ノ丸、三ノ丸、城下町からなる4つの堀が存在していたが、現在は、二ノ丸（東ノ丸・西ノ丸）を囲む水堀しか残っておらず、すべて埋め立てられているのが現在の市街地である。また、本丸と二ノ丸は旧県庁施設を建てるために、本丸を囲む水堀を埋め、3m以上高かった本丸を削平し城内を一区画とする。本丸と二ノ丸の遺構は旧県庁建物基礎で大きく改変させられている。

今回の調査は、大分市の府内城再発見事業の一環として、廊下橋の復元および周辺整備に伴うものである。

この府内城は慶長2年(1597)に福原直高(臼杵・12万石)によって築造され、さらに慶長7年(1602)に竹中重利(高田・3万5千石)が増築し、城下町を含めて完成する。

その後、日根野吉明(下野国・2万石)が城主となるが、万治元年(1658)に松平(大給)忠昭(豊後国高松・2万2千石)の居城となり、江戸時代の大分の中心として栄え、以後、廃藩まで10代松平近況まで続いた。

まず調査は現松栄神社側の山里丸(北ノ丸)から始めた。廊下橋の接合部の調査区と出曲の西側石垣の状況を確認するための調査区を2ヶ所設定した。

2ヶ所共に後世の建物基礎等で大きく改変しており、削平や廃材のコンクリート等を埋めたゴミ穴が掘られているため、遺存状況は極めて悪く、西ノ丸廊下橋接合部よりも0.5mほど山里丸の橋接合部が削平を受けて低いため不明である。

また、出曲の西側石垣状況は、一部水堀を埋めているため、深い部分の石垣は良好に残っているが上部については後世の削平で改変されている。石垣は野面積みで積まれており、裏込めの栗石も残っていた。石垣先端から北へ約6mで鉤の手状に直角に折れる石垣部分がある。これは北ノ丸に接続する石垣である。この数値を絵図でみると、三間と記されている。水堀内には上層の瓦や陶磁器類等が標高90cmの深さから堆積している。また、土堀に使用されたと思われる木材片や漆喰等が確認されており、土堀が壊れて落下した状況が窺える。

次に、西ノ丸と山里丸を結ぶ廊下橋の脚部にあたる水堀内の調査区である。廊下橋は絵図では間口八尺、長さ十一間の大きさであった。西ノ丸と山里丸の実寸の長さは22mを測る。



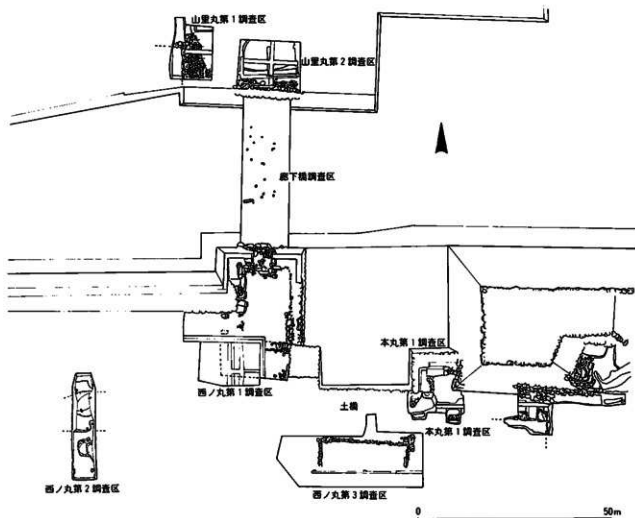
第73図 山里丸調査区遺物出土状況

調査は両石垣の基底部よりも約1m程深く掘り下げを行い、脚部の遺存状況を確認すると、上部1m、径20～30cmほどであった。杭の先端部は加工具で細く尖らせ、打ち込まれた状態であったが、杭の配列が不規則なために廊下橋脚部の可能性は薄いと考えられるが、全く否定もできないと思われる。また、両石垣の基底部は砂層上、深さ標高-50cmの部分から築いていた。

次は、西ノ丸地区の調査区である。廊下橋接合部から調査を行った。この場所は旧県庁の建物基礎と無線塔の基礎で大きく改変されていたが、幸うじて石垣等が遺存していた。



第72図 調査地点位置図



第74図 遺構配置図 (1/1000)

入口部分の状況は、幅2.5mを測り、中央東よりに排水施設があり、長方形の凝灰岩製の排水口で、それに接続するように丸瓦をパイプがわりに（導水管として）使用していた。橋桁部分が内側に約60cmほどかぶさる状況が石垣で窺える。また、その内側には長さ2.2mの間に敷居状の長方幅50cmの切石と約40cm四方の切石を敷き詰めた石畳状の入口の施設がある。

入口部分から直線的に約9mの所で鉤の手状に折れる石垣がある。この現存する石垣は約4mほどが残っており、旧県庁跡の基礎のため石垣は取り除かれていた。遺存状況は渠石と一部基底部の石垣が残るのみである。

この石垣から西へ約7.8mの場所に冠木門跡の礎石が北側に1個確認された。この礎石の大きさは、長方形の長さ80cm、幅60cmで中央から西に10cm四方に深さ6cmの柱を据えるための「ほぞ」がある。この礎石並びの石垣角の石積が一列分取り除かれていることや、内側は長方形の切石を階段状に積み上げた羅木であることが、今回の調査で確認できた。

また、冠木門跡の礎石より西ノ門側へ17mの所に南北方向3m×14mのトレンチを設定して、遺構の状況を確認する。

ここも旧県庁の施設のために、約1mほど擾乱を受けており、またゴミ穴や水道管と排水管の設置の溝などもみられた。

その中で、標高3.3mの所で30cm前後の方形切石が並ぶように配置されており、建物の柱を据える礎石と思われる。トレンチの中央から北側に長さ4m、深さ2m（標高1.3m）の堅穴が確認され、中より非クロコ系の土



第75図 発掘調査状況



第76図 冠木門礎石検出状況

師皿や獣骨片等が出土した。

この遺構は東西方向に延びる可能性があり、穴倉的な性格を持っていると思われる。

絵図では廊下橋入口の間口一間一尺五寸、入口から石垣までは四間四尺、冠木門の間口二間等が記されている。

次に、本丸と西ノ丸を結ぶ土橋の文化会館側部分の石垣と水堀の調査区である。この部分は旧県庁本館の基礎が深く入っており、本丸と西ノ丸側の石垣が取り除かれて大きく改変されていることが判明した。しかし辛うじて土橋とそれに接続する本丸・西ノ丸の石垣部分が残っていた。土橋の規模は長さ12m、幅6mで高さは堀底より約3.5m（標高4m）である。水堀の幅は11mを測り、水堀底部（標高50cm）に瓦類や土堀の木材片が落下した状態で確認できた。土橋から本丸に入る部分に冠木門があるが、削平されており不明である。

絵図では、水堀幅六間、土橋の長さ六間三尺、冠木門間口一丈二尺、堀の深さ七尺五寸、石垣高水より一間と記されている。

本丸側の調査区部分では、絵図でみると北二重櫓の石垣角より六間で西波櫓にぶつかり鉤の手に折れ、八間半で本丸に入る。雁木（階段）数が九ツあり、北大門に入る状況が記されている。

現在は北二重櫓の石垣が残るだけで、本丸側は平坦面に削平をしている。調査は北二重櫓石垣の角より約12m南北に延びる西波櫓石垣の基底部分を確認することができた。しかし現在の北二重櫓石垣よりも南へ約3mの所で並行するように基底石垣が並んで据えているのを確認した。この石垣の性格については不明瞭であるが、もともと北二重櫓の当初の計画石垣幅であったのか、石垣補強のための施設だったのか、今後の課題となる。本丸の高さは、北二重櫓で確認した。標高7mで、現状より約3m程高いとみられる。

今回は府内城跡の初めての調査であるため、絵図面と照合しながら調査を実施した。なお、寸尺については一間を6尺5寸とみた。

（讃岐）

XIX 府内城・城下町跡第7次調査

調査面積 866㎡
地域 A

調査期間 95.05.17～95.09.28
調査担当 塩地潤一

調査地は大部分市都町13-3 ジャンгл公園内に位置し、府内城下町の推定塗師町と寺町にあたる。

今回の調査では、淡茶灰色シルト層とその下層にあたる縄文時代晩期の堆積層(SX170)を基盤面として、平安時代～江戸時代にかけての遺構が検出された。調査区東南部については広場建設予定地にあたるため、遺構検出作業のみ実施した。以下にその概要についてまとめる。

江戸時代の遺構としては幕末を主体とした火災処理土坑をはじめ、地下式土坑や溝状遺構、井戸跡など、城下町の遺構が夥しく重複して確認されている。

これらの遺構からは往時の府内城下町の賑わいを彷彿とさせる大量の遺物が出土している。

また、遺構の重複が多い中で、南北方向に幅約1mの範囲で遺構がほとんど存在しない部分(SF200)を確認した。

この範囲で検出された遺構はSE030など平安時代の遺構ばかりであり、江戸時代にはここが空閑地であったと想定される。

また、この空閑地の西側の遺構群からは焼き継ぎを施した陶磁器が大量に出土し、それらの底部には「寺丁かじや」・「寺町仕立や」と判読できる朱書き文字が認められた。

以上のことから、この空閑地は寺町と塗師町の町境と判断され、1987年に大分市史編纂委員会が提示した府内城下の復元図とほぼ整合する所見となった。

さらに、調査区寺町側においてはこの町境に直行する形でほぼ等間隔に空閑地が存在している可能性が指摘される。

この空閑地の存在が首肯されるならば、町屋毎の短間型の区割も示唆されることになり、この検証は今後の調査に残された課題と言える。

次に、平安時代の遺構については先述した11世紀後半の井戸(SE030)や廃棄土坑3基と柱穴群を検出した。

これらの遺構からは越州窯系青磁碗Ⅰ-2-b類、白磁皿Ⅵ-1-b類や研磨土師器壺、須恵器環・鉢、瓦器片、土師器環・皿、石鍋片、鉢渚などが出土している。

これまで大分平野で確認されている古代遺跡は地蔵原道



第77図 調査地点位置図



第78図 塗師町・寺町町境検出状況(北より)



第79図 焼き継ぎ文字が施された磁器

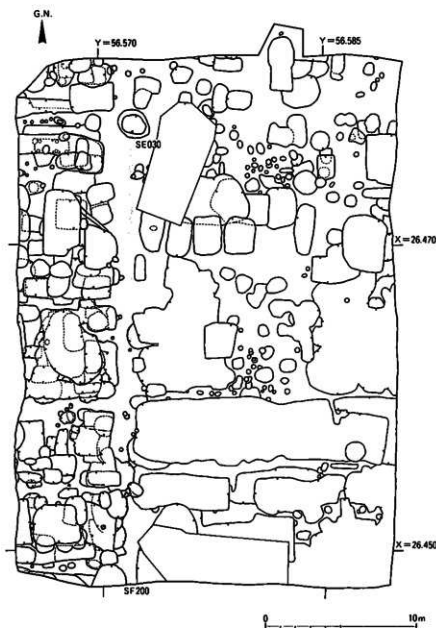
跡に代表されるようにそのほとんどが10世紀代に廃絶し、11世紀代の遺跡は皆無と言える。

しかしながら、文献上では「高国府、勝津留島」の開発をはじめ、『祚原八幡宮文書』などの荘園関係文書があるように、この時代は大開墾時代の幕開けの時期にあたり、全国的にも遺跡が急増する傾向がみられる。

このような中で、これまで調査例が少なかった旧海岸線沿いに位置する地点で11世紀代の遺跡の存在が判明したことは大きな成果と言えよう。

今後の市街地周辺における調査によって、府内城下の景観や、古代末期の集落変遷などの解明が期待される。

(塩地)



第80図 遺構配置図 (1/250)

XX 庄ノ原遺跡

調査面積 3,685㎡
地域 A

調査期間 95.09.12～95.09.22
調査担当 塔鼻光司・坪根伸也

調査地は大分市大字佐隈字庄ノ原に所在し、高崎山から東に延びる標高95m前後の庄ノ原台地に位置する。この台地は庄ノ原面と呼ばれ、リス水期間の最終段階で形成されたもので、大分層群の上に厚さ10m以下で不整合にのる風化した砂礫層より成る。大分川流域ではこの庄ノ原台地が最も古く、その形成時期はおおよそ14万年前後と想定されている。

当調査は老人福祉施設建設に伴う確認調査として行われた。調査地は平成元年度から平成4年度にかけて、九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として、大分県教育委員会により行われた調査地の周辺にあたり、中でも平成2年度から平成4年度に行われたJ区の西側に位置する。

調査は、7本の確認トレンチを設定し、遺構の状況により適宜拡張していく方法により行った。調査地には帯状耕作機（トレンチャー）の耕作痕が随所に残り、遺構検出面より下位に攪乱がおよんでいる地点もある。

調査の結果、柵列、溝状遺構、土坑、集石、地層横転痕跡を検出し、遺物には縄文早期に比定される条痕文土器などが出土した。



第81図 調査地点位置図

〔基本土層と地層横転痕跡〕

調査区内における基本土層は以下の4層によって形成される。

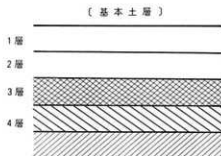
第1層 黒褐色土層（耕作土）

第2層 黒色土層（軟質）

第3層 黒茶褐色土層（軟質）

第4層 淡黄褐色土層（軟質）

第4層直下には黄褐色土層（硬質）が確認されている。



地層横転痕跡は部分的に地層が横転していることから局部断層などと呼ばれ、生成原因についてさまざまな説が提示されてきた。近年の実証的・実験的な研究によれば、風倒木に伴う痕跡である蓋然性が最も高いと言われている。

今回の調査において10基の地層横転痕跡を確認した。

横転する土層は以下の5層を基本とする。

A層 黄褐色土層（硬質ハードローム）

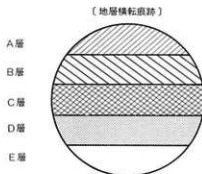
B層 淡黄褐色土層（軟質ソフトローム）

C層 黒茶褐色土層（軟質）

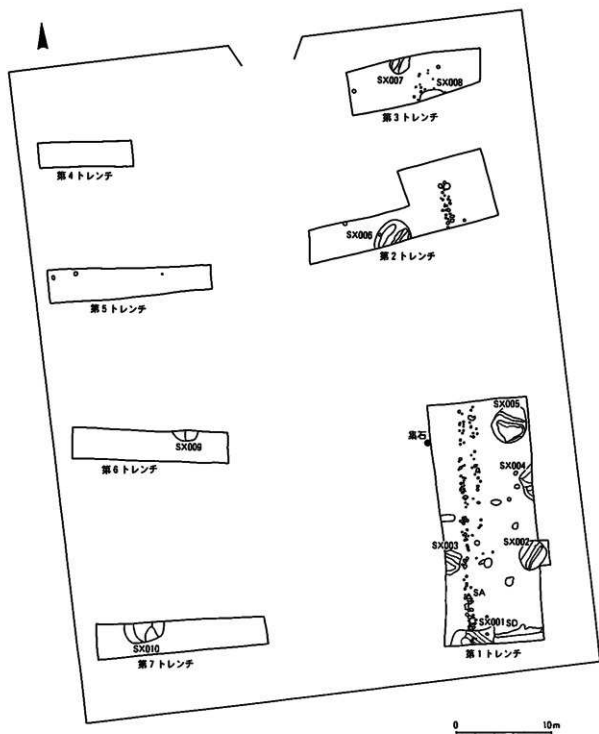
D層 明黄茶褐色土層（アカホヤ火山灰）

E層 黒色土層（土中に径5mm程度の赤橙色粒子を多量に含む）

以上のうち、A層は基本土層の第4層直下の土層に対応し、



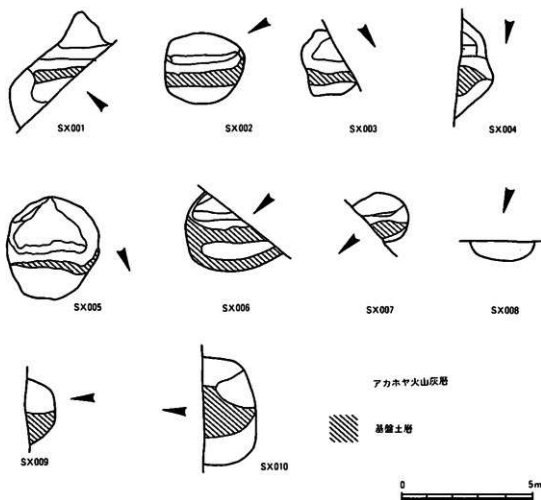
第82図 基本土層と地層横転痕跡土層模式図



第83図 遺構配置図 (1/400)

B層は第4層に対応する。また、C層も第3層に類似しており、同一対応層である可能性が極めて高い。それ以外の土層に関しては対応関係は認められない。

以上、本地点の土層の堆積の状況から、今回検出された地層横転痕跡が形成された時期はアカホヤ火山灰降下後（約6500年前）以降と判断される。その後D・E層は欠失し、かわって第1・2層が堆積したと考えられる。



第84図 地層横断痕跡 (1/150)

〔まとめ〕

庄ノ原遺跡群は古くから縄文土器などが広範囲に分布する遺跡地として周知されていたが、遺跡の内容については不明な点が多かった。平成元年から平成4年にかけての大分県教育委員会による本格的な調査により遺跡の概要が明らかにされつつある。

集石が近接する県教委によるJ区の調査でも確認されている。形態的には似ているが、火熱を受けた痕跡もなく、また、層位的にも異なっている。集石は第4層の上面から検出されており、アカホヤの下層にある第3層が縄文早期の包含層と考えられることなどから集石は早期の所産であると考えられ、出土した条痕文土器もこの時期の所産であると考えて大過なかなう。また、J区からは旧石器時代の遺物が多量に出土しており、当調査区内では1点のみの出土であったが、周辺への広がりが示唆される。

(坪根・中西)

XI 滝尾守岡横穴墓群第1・2次調査

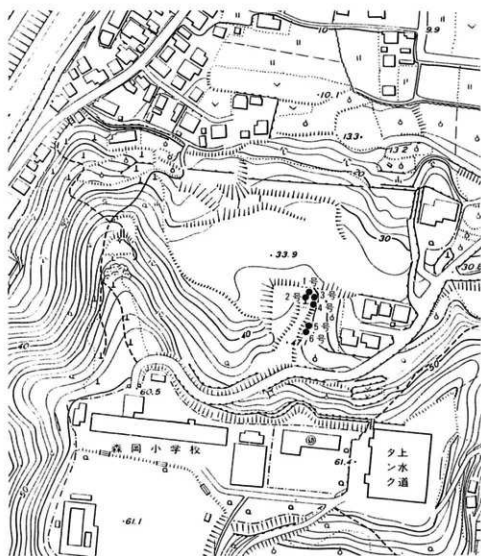
横穴墓 6基
地域 A

調査期間 95.08.24～95.08.29・96.02.13～96.02.23
調査担当 坪根伸也・讃岐和夫

滝尾津守横穴墓は、大分市大字津守字正蓮寺に所在している。発掘調査は、民間開発の宅地造成に伴うものである。本遺跡は弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての集落跡と中世の山城、曲石仏（県指定）が所在する守岡台地の中腹から北側へ突き出した崖面に造営されている。この横穴墓群は崖面標高42.50mから47.00m前後の上下2段に14基ほど確認しており、開口部はすべて東向きである。内部はすでに盗掘を受け荒らされており、部分的に改変されている。崖面には双塔の五輪塔が彫塑され、中世の時期において2次的に再利用されたものである。今回の調査対象となったのは6基である。



第85図 調査地点位置図



第86図 調査位置図 (1/2500)

1号横穴墓

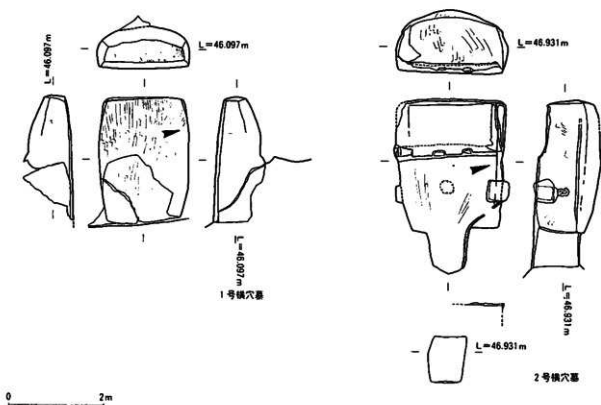
横穴墓群で最も北に位置しており、羨門、羨道、天井部の一部を欠損している。玄室の平面は長方形を呈しており、現状の長さ2.6m、最大幅1.85m、最大高0.9mの規模である。遺存する部分から推定される天井形はアーチ形を呈している。出土遺物は皆無であった。

2号横穴墓

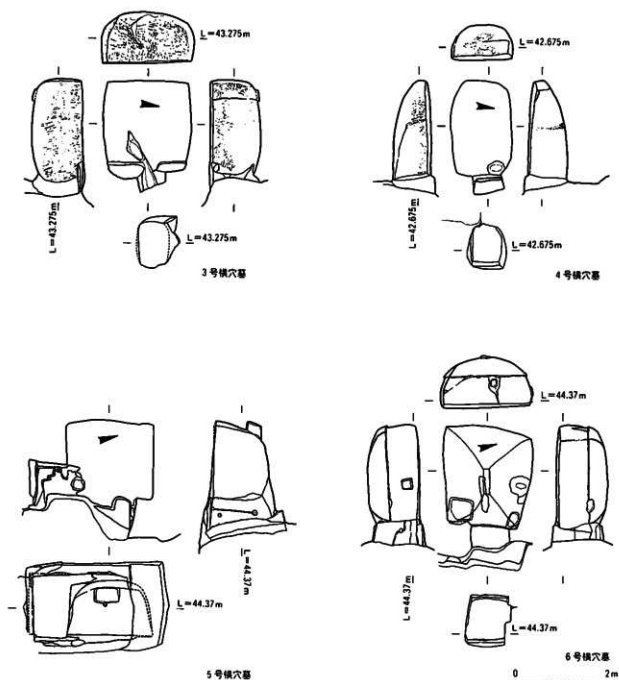
1号横穴墓より1段高い南側の場所にある。前庭部の剝落が著しく欠損している。羨門も向かって右側上方のコーナー部分がかろうじて残っている。また、内部についても南西隅は後世の造成時に削平を受け崩落している。玄室の中央部分及び左右の壁面と屍床部分も改変されている。玄室平面はほぼ長方形を呈しており、最奥部に2.2m×1.15mと高さ0.15mの屍床がある。東側部分と北側部分に小さな排水溝を有している。また特筆すべき点としては、すでに後世の改変によって原形を保っていないが、屍床の両脇に突起があることである。天井部は明確な稜線をもたず、アーチ状をなすが、左右側面には鴨居を表現した平坦面があることから、家形からアーチ形への過渡的様相を示している。玄室の長さ2.75m、最大幅2.15m、最大高1.3mで羨道の長さ0.75m、高さ0.95mの規模である。壁面と床面に掘削時のノミ痕が一部見られる。そのノミ痕幅は約6cmと約10cmの2種が認められる。出土遺物は皆無である。

3号横穴墓

2号横穴墓下の2段目、4号横穴墓の北側に位置している。すでに、前庭部と羨道部の一部が欠損している。また、玄室部の床面は10cmほど後世の削平を受けていることが、ノミ痕の状況からみられる。玄室部の平面形は方形を呈しており、現状の長さ1.9m、最大高1mの規模である。壁面には細長い楕円のノミ痕と幅5cmほどの



第87図 1・2号横穴墓 平面・断面実測図 (1/80)

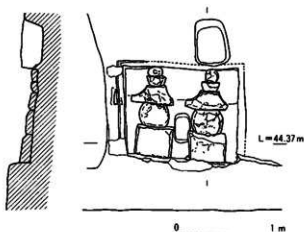


第88図 3～6号横穴墓 平面・断面実測図 (1/80)

ノミ痕がみられる。出土遺物は皆無である。

4号横穴墓

3号横穴墓の約2mほど南側へ位置している。前庭部、羨道部は一部が欠損している。玄室部の平面は長方形を呈しており、現状での長さ1.9m、最大幅1.2m、最大高0.8mの規模である。天井部はアーチ形で奥部の壁高が低くなっている。



第89図 五輪塔実測図 (1/4)

5号横穴墓

4号横穴墓より南側へ約21mの位置にある。前庭部と羨道部は大きく改変されており、現状の形態から、後世において農業用の倉庫として利用されたものと考えられる。玄室部の平面は方形を呈している。玄室の大きさは、長さ1.66m、最大高1.2mの規模である。遺存状況から天井部はアーチ形である。出土遺物は皆無である。

6号横穴墓

5号横穴墓の南へ2.7mの位置にある。また、その南側には双塔の五輪塔が彫塑されている。前庭部と羨道部の一部は各横穴墓と同様に欠損しており、玄室部の平面形は長方形で奥部が若干広がるバチ形を呈している。玄室の大きさは長さ2.05m、最大幅1.8m、最大高1.07mの規模である。天井部は、鴨居を明瞭に表す被線をもつ家形である。出土遺物は皆無である。

また、2号横穴墓の屍床形態が、坂ノ市の東上野に所在する飛山横穴墓群の1号横穴墓に類似している。同種の施設を有するものは他に市内の大曾横穴墓群内においても確認されており、市内では3例目の事例となる。1号から6号横穴墓までは帰属する遺物が皆無のため、厳密な時期の比定は非常に困難である。しかしながら、横穴墓の各形態から6世紀後半以降に造られたものと考えられる。

(讃岐)

XXII 葛木遺跡

調査面積 73㎡
地域 E

調査期間 95.9.11～95.9.12
調査担当 塩地潤一

調査地は大分市大字葛木字宮ノ後口664-1・664-4に所在し、大野川の支流・乙津川の左岸にあたる標高40m前後の鶴崎丘陵上に位置する。

調査の結果、中世の土師器片を内包する柱穴群と古墳時代の竪穴住居跡1基が検出された。

今回検出された竪穴住居跡は、1辺4.2m×4mのほぼ正方形に近い平面プランを呈し、その北隅には張り出し部を設けている。現存する深さは40cmを測る。

また、主柱穴は2本で、その中央には地床炉がつくられており、部分的ではあるが壁溝も確認された。

さらに、住居跡の南西隅には土師器甕が1点置かれたままの状態で放置されていた。

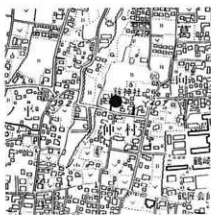
この土器の法量については口径12.8cm、器高22cmを測る。

頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、肩部から胴部にかけては緩やかに張り出す。底部は丸底を呈している。

全体的に調整は不明瞭ながらも、胴部外面にはハケ目、内面にはヘラケズリの後、体部上面から頸部にかけては横方向のナデ消しが施されている。

また、底部内面はヘラケズリの後、指頭痕が残されている。

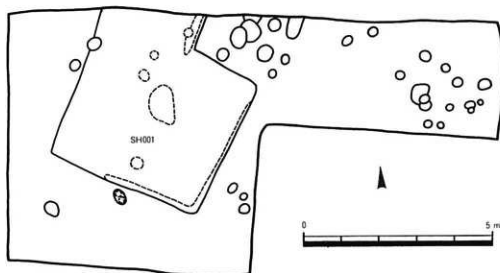
以上のことから、この帰属年代は布留式新相段階併行期にあたると考えられ、竪穴住居跡の存続年代を示す良好な資料となったと言える。(塩地)



第90図 調査地点位置図



第91図 調査区全景



第92図 遺構配置図 (1/100)



第93図 SH001完掘状況（北より）



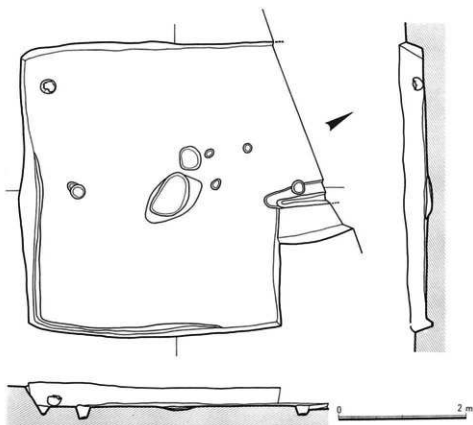
第94図 出土遺物実測図（1/4）



第95図 壁溝断面観察時



第96図 遺物出土状況



第97図 SH001平面・断面実測図（1/60）

XXIII 庄ノ原遺跡

調査面積 194㎡
地域 B

調査期間 95.11.15
調査担当 池邊千太郎

遺跡は大分市大字賀来字庄ノ原に所在する。

庄ノ原遺跡は、標高95～96mの平坦な台地にあり、すぐ南側には大分川が西から東に向かって流れ、肥沃な平野を形成している。この台地上には、県指定史跡の蓬萊山古墳があり、4世紀中～後半代と推定される全長60mの前方後円墳で、墳丘には周濠を巡らしている。

遺跡はこの蓬萊山古墳の北西50mの位置にあたる。調査は、ガラスハウス建設のための確認調査として行われた。

調査区は開発地の東側に長さ39m、幅3～3.5mの範囲（122㎡）と西側に12×6m（72㎡）の2箇所の範囲で行った。検出した遺構は、東側調査区では不定形土坑が3基、土坑が8基、小土坑が15基、溝状遺構が1条検出された。一方、西側の調査区では直径4m程の地層横転遺構が2箇所検出されたほか、土坑が3基見つかった。

東側調査区の北側に見られる大型不定形土坑は、調査区が細長く、遺構が調査区外に広がるため全体形状を把握することができず、いずれも検出面から床面まで十数センチと浅い掘り込みであった。

また、随所に見られる土坑はいずれも楕円形を呈し、深さ30cmほどである。SX004からは、土師器壺の口縁から肩部にあたる4世紀中頃から5世紀前半代の遺物が出土した。この遺構以外においても土師器の破片遺物が出土しているが、やはり年代を確定できるような遺物は見つかっておらず遺構の年代は不明である。また直径30～40cmほどの小さな土坑も多く、北側調査区の全域に散在しているが、やはり年代を確定できるような遺物は見つかっていない。

調査区中央からは、幅30cm、深さ15cmの規模の溝状遺構が1条検出された。遺構は、調査区中央部を南北方向に横切っている。なお、遺物は検出できなかった。

西側調査区からは、地層横転遺構が2基検出しているが、この内1基は、土層の状態から西側に地層が横転したことが判明した。

調査区のすぐ東には前方後円墳の蓬萊山古墳があり、その周辺には田崎古墳群、万寿山古墳群など古墳時代前期に相当する古墳が群集する場所にある。今回の調査地点はこうした位置的な環境と出土遺物の年代が古墳築造時期と重なっていることから、これに関連した遺跡の性格を考えなければならないであろう。

この調査は確認調査であったため、詳細な遺構の性格を掴むことはできなかったが、従来、この周辺は旧石器時代の包蔵地として周知されてきた場所であり、今回の調査によって古墳時代の遺物・遺構を新たに検出できたことは注視する必要がある。また今後の周辺部における本格的な調査によって古墳周辺に広がる遺跡の性格についても究明していかなければならないであろう。

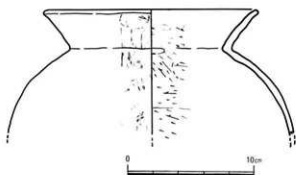
(池邊)



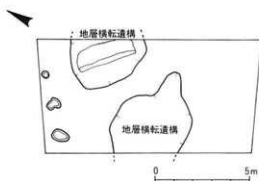
第98図 調査地点位置図



第99図 調査区位置図 (1/5000)



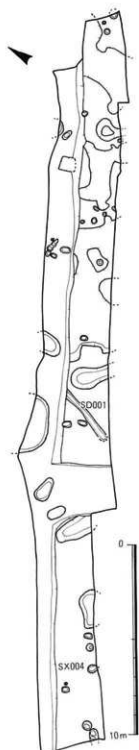
第100図 SX004出土遺物 (1/3)



第101図 西側調査区遺構配置図 (1/200)



第102図 調査区より蓬萊山古墳を望む



第103図 東側調査区遺構配置図(1/200)

XXIV 羽屋・井戸遺跡

調査面積 2,375㎡
地域 A

調査期間 96.01.10～96.02.29
調査担当 讃岐和夫他

上野丘陵の南側、大分川が大きく蛇行して半円形に形成された沖積平野に所在している。

とくに、平野部の古国府、羽屋地区一帯は古代の豊後国府推定地としてももっとも有力視された地域であり、現在も条里地割が残っている。本遺跡の北側には推定官道が所在しており、東側に七曾子、北側に上七曾子の地割字名がある。また、羽屋地区は若干微高地になっている。

遺跡の調査は軽量なアパート建設に伴うものであり、遺跡が重要な内容を含んでいるため、関係者と協議をかさね、全面的な協力を得て、盛土による保存が実施されるため、遺跡の内容および確認を中心に必要最小限にとどめた。

本遺跡の遺構については、溝状遺構（SD）7条+α・掘立柱建物跡（SB）7棟・竪穴住居跡（SH）7基・不定形土坑（SK）・柵列状遺構（SA）などが確認された。

各遺構の内容については、次の状況である。

1) 竪穴住居跡（SH）

竪穴住居跡は7基を確認しており、すべて平面形は方形である。その中で4基のみを調査の対象とした。出土遺物から、SH007は弥生時代後期初頭の住居跡である。SH001からSH003は古墳時代の住居跡と考えられる。特にSH002から数個体の土器がまとめて出土しており、4世紀後半から5世紀前半に比定される。また、未掘のSH004から006の住居跡についても、検出面から散見される土器片から、古墳時代の同時期の可能性が強いと思われる。

2) 溝状遺構（SD）

溝状遺構は、調査区の南側と、北側の両端部で東西方向に掘られている。溝状遺構の時期が確認できるものとしてはSD001がある。SD001の規模は幅約2m、深き現状で1m未満のU字形を呈しており、出土遺物としては甕、高坏、小型丸底壺などの土器がみられた。出土土器から4世紀後半から5世紀初頭の時期に比定される。

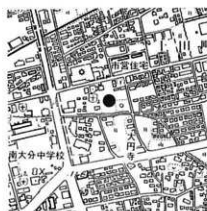
溝状遺構は流水していたことが土層観察により確認され、水路的な役割をはたしていたことが窺える。その他の溝状遺構については、出土遺物が少ないため判断しにくい、古墳時代後期の須恵器片もみられるため、SD001に引き続き掘られたものと思われる。

3) 掘立柱建物跡（SB）

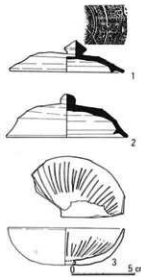
掘立柱建物跡は、SB001～SB007の7棟を確認している。SB001は調査区の南側でSD001と切合関係にある。主軸は東西方向で建物規模は3間×9間（5.5m×17.9m）である。身舎面積は96.25㎡で2番目に大きな建物跡である。SB002はSB001に接するように北東側にあ



第105図 須恵器出土状況

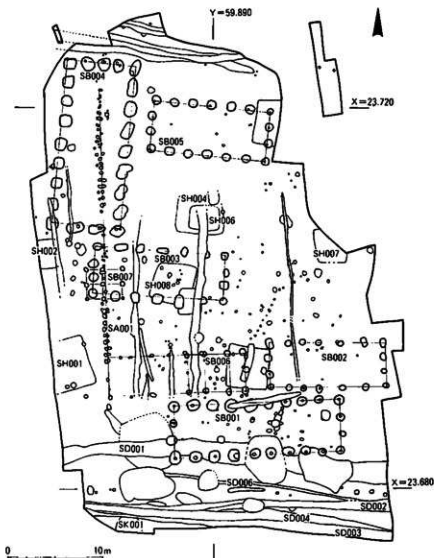


第104図 調査地点位置図



第106図 出土遺物実測図 (1/3)

る。主軸は東西方向で建物規模は3間×6間(4.8m×12m)である。身舎面積は57.6㎡である。SB003はSB007・SB008と切合関係がある。主軸はほぼ東西方向で建物規模は3間×6間(5m×14.7m)である。身舎面積は73.5㎡である。SB004は調査区の北西側隅に主軸が南北方向の建物で、規模は4間×8間(7m×17.5m)である。身舎面積は122.5㎡であり、これらの建物群の中で最大規模をもつもので大変注目される。SB005はSB004の東側にあり、調査区の北東側にある。主軸はほぼ東西方向で建物規模は3間×6間(5.4m×12.3m)である。身舎面積は66.42㎡である。柱穴から直径20cm前後の柱材が残っていた。SB006はSB002の西側にある。主軸は東西方向である。建物規模は



第107図 遺構配置図 (1/400)

1間×3間(4m×6.1m)で身舎面積は24.4㎡で小型のものである。SB007の規模は2間×2間(3.2m×3.8m)の総柱建物跡で倉庫と考えられる。身舎面積は12.16㎡である。

掘立柱建物跡群は調査区の南側に集中するものと北側に集中するものがあり微妙な方向の振れがみられる。また建物の建替えは3時期以上であることが遺構の状況でみられる。出土遺物からみても建物群は7世紀中頃から後半の時期と考えられる。

4) 柵列状遺構 (SA)

SA001はSB006に取り付くように同じ方向性をもっており、SA001は西側でSB003・004・007と切合関係をもっている。

5) 不定形土坑 (SK)

土坑はSK001を掘り下げたが後世の削平等で遺存状況は不明瞭である。

以上のことから、羽屋・井戸遺跡において今回確認された掘立柱建物跡群の存続年数は長期に及ぶものではなく7世紀後半代を中心とする時期と考えられる。

(讃岐)

XXV 城原D遺跡

調査面積 298㎡
地域 G

調査期間 96.01.23～96.03.26
調査担当 塩地潤一

調査地は大分市大字里字台1320-21に所在し、大野川の右岸にひろがる標高約42mの城原段丘面に位置する。

調査の結果、弥生時代から室町時代にかけての遺構が検出されたため、以下にその概要についてまとめる。

弥生時代の遺構としては貯蔵穴（SK035）と溝（SD015）があり、前期末から中期前半の時期に限られる。

SD015は幅約2m～2.5mを測る南北溝で、今回検出した範囲の北側3分の1と残りの3分の2の範囲において、溝の深さ並びに断面形状が異なるという特徴をもつ。

北側3分の1の範囲ではその規模は幅約2m、深さは一律で約1.4mを測り、断面形状はV字形を呈す。土層観察の結果から一時期滞水していることが判明した。また、残りの3分の2の範囲では、幅約2.5m、深さは一律で約1.7mを測り、断面形状は逆台形を呈す。これらの溝は埋土の堆積状況からも同一の溝と判断されるものである。

さらに、断面形状が変わる地点においてお互いの溝がわずかに湾曲して取り付いていることが指摘でき、この地点からミニチュアの壺が2点出土したことも併せて注目される現象と言える。

これらの現象からこの溝が単に水を流すという目的で掘削されたものではないと考えられ、その性格やこの地に集落を形成した集団についてなど残された課題は多い。

また、弥生時代中期前半以降この地点での生活の痕跡は皆無であり、次の開発は8世紀段階まで認められない。

この時代の遺構としては8世紀初頭に比定される木棺墓（ST005）が挙げられ、須恵器環cと同養片、並びに砥石が出土した。

当時の墳墓造営については「喪葬令」によって、その被葬者ならびに立地が規制されているものである。この周辺には久上遺跡や日鼓山遺跡など当該期の遺跡が所在しており、当時の景観復元を考える上で良好な資料となったと言える。その後、この地に遺跡が展開するのは室町時代まで待たねばならないようである。この時代の遺構としては南北溝（SD001・040）と木蓋土墳墓（ST030）が検出さ



第108図 調査地点位置図



第109図 調査区全景



第110図 SD015北側土層



第111図 SD015南側土層



第112図 SD015完掘状況



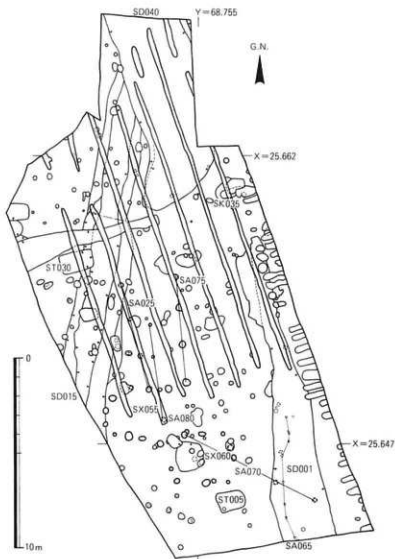
第113図 ST005供献土器出土状況

れている。SD001には杭列跡が認められ、龍泉窯系青磁碗（IV類）や白磁小皿（森田D類）を始めとして、土師器坏・

小皿・燗台などの供膳具や灯明具の他に周防系瓦質搦鉢・瓦質鍋・鉢・甕などの雑器が多量に廃棄されていた。

これらの出土遺物よりSD001は15世紀前半代に埋没した南北溝と判断される。

また、隣接してほぼ同時期の墳墓が存在することから、この一帯に15世紀代の遺跡が広がっている可能性は高いと言えよう。（塩地）



第114図 遺構配置図（1/200）

XXVI 庄ノ原・片面遺跡

調査面積	600㎡	調査期間	95.11.01～95.11.22
地域	B	調査担当	塩地潤一・新藤美由紀

調査地は大分市大字賀来字庄ノ原1905番地の1他3筆にあたり、標高約84m～90mの庄ノ原台地上に所在する県指定史跡蓬萊山古墳の南西部に位置する。

調査の結果、溝4条と柵列1条、帯状耕作痕、地層横転遺構などを検出したがいずれも出土遺物は皆無であり、時期の確定はできていない。

しかしながら、コの字状に曲がる溝状遺構（SD001）の存在は注目されるため、その概要について以下にまとめる。

SD001は調査区東端で検出されたコの字状に折れ曲がる溝状遺構であり、幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。

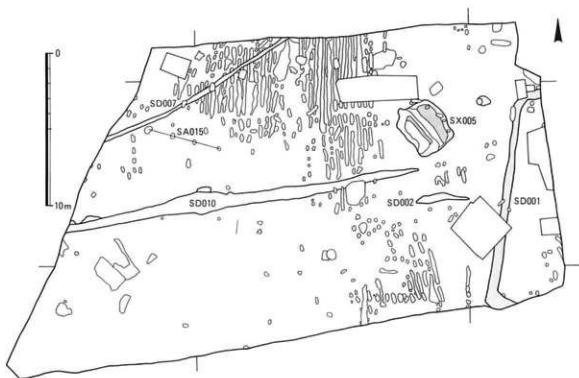
土層観察より水が流れた痕跡はなく、掘り返しが認められるため、この溝状遺構は人為的に掘削された区画溝であると考えられるものである。

また、この溝状遺構の帰属時期、ならびに規模など詳細については、先述のとおり断定はできないが、周辺に蓬萊山古墳をはじめとした古墳群が数多く造営されていることから、SD001は墳墓を区画する溝状遺構である可能性は高いと考えられる。

（塩地・新藤）



第115図 調査地点位置図



第116図 遺構配置図 (1/250)

XXVII 猪野遺跡

調査面積 144㎡
地域 E

調査期間 96.01.20～96.01.21
調査担当 坪根伸也

調査地は大分市大字猪野字西原107-1・1059-2に所在する。調査は民間のアパート建設に伴うものである。盛土による保存を前提としていたため、遺構の掘り下げは必要最小限に留めた。調査の結果、道路状遺構、竪穴遺構、土坑を検出した。

道路状遺構(SF001)は側溝と考えられる2条の溝条遺構(SD001・SD002)により構成される。この2本の溝の中心間の距離は約5.0m、溝幅約0.7mを測る。調査区を東西方向に併走し、その様態が他遺跡で見られる道路状遺構の状況に酷似することから道路状遺構と判断した。所産時期に関しては、出土物が概して少なく、にわかに決めたいが、8世紀後半～末に帰属する土坑に切られており、また、埋土中にこの土坑の時期に極めて近い所産となる甕破片を内包することから、ほぼ8世紀の中頃前後の時期と考えて大過ないであろう。

竪穴遺構(SH)は調査区の随所にみられ、竪穴住居跡と考えられる。掘り下げを実施していないので、詳細については不明であるが、検出段階で弥生時代後期初頭前後の土器が主体的に出土する。

土坑(SK001)は調査区の東端において確認した。長軸約3.5mを測る楕円形を呈する比較的大型の土坑である。約1/2について掘り下げを実施した結果、8世紀後半代に比定される土師器数点の出土が認められた。前述の道路状遺構の側溝と切り合いを有する。

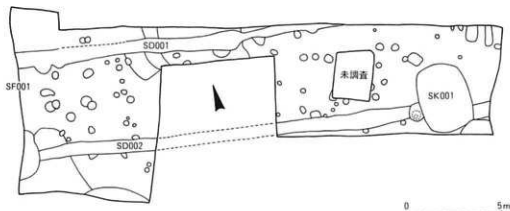
今回の調査における最大の成果は8世紀中頃前後(奈良時代)に比定される道路状遺構の発見といえよう。路面は削平により欠失しており、明確に道路と判断できる根拠に乏しいものの、他事例との比較から道路状遺構である蓋然性が最も高いと判断される。

本地域は、いわゆる豊後国府を擁する大分川下流域とは若干の距離を有し、「大分郡」と「海部郡」の郡境に近接する地域である。こういった地理的環境にありながら、奈良時代に比定される幅5mもの規模を有する道路状遺構の存在は、今後、豊後の古代を考えるに際し看過できない事象といえよう。また、奈良時代～平安時代における当地域には地蔵原遺跡、猪野新土井遺跡など当時の官衙的な施設が展開することが知られており、これらとの関連性が注目される。

(坪根)



第117図 調査地点位置図



第118図 遺構配置図 (1/200)

XXIII 貝殻山遺跡

調査面積 1,300㎡
地域 F

調査期間 95.05.01～95.08.10
調査担当 塔鼻光司

調査区は大分市東部、大野川下流右岸に広がる丹生台地の城原面といわれる河岸段丘上に位置する。城原面は海岸段丘の性格を合わせ持ったため、堆積物の中に内湾性の貝化石が含まれている。地名の貝殻山もこのことから言われていると思われる。

調査の結果、弥生前期～中世にかけての逆台形を呈する谷状遺構(SX001)、土坑・ピット群が検出された。出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・中世陶磁器が確認されている。

調査区内での谷状遺構は幅20～30m、断面形状はV字形を呈し、西から東に向かって緩やかに広がりをもせながら傾斜する。計画街路と直行する形で検出されたため、調査区の制約から、遺構の全長など全体の概要はつかめなかった。また、街路の設計上法面を削平する恐れがあるため、街路のセンター部に沿った限られた部分しか掘り下げる事が出来なかったが、深さは最深部で地表面から4.3mを測る。以上述べたように、平面での観察が不可能であるので、土層観察による検討を行ってみることにする。



第119図 調査地点位置図

I期 自然地形の谷が存在し、これを利用して逆台形状の掘削を行う。最下層に自然木を含む。

灰色粘質土が堆積していることから、滞水していたものと思われる。遺物が検出されておらず、時期の同定には至らなかった。

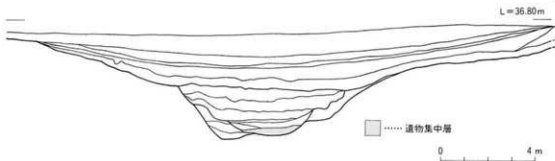
II期 自然堆積したI期を段状に掘り返しを行う。下層から弥生時代中期前半の土器片が多量に検出されることから、掘削はこの時期をあまり滞らないと考えられる。堆積状況はI期と類似しており、滞水していたものと思われる。また、この掘り込みの上層に古墳時代の土師器・須恵器片が含まれることから最終埋没の時期と考えたい。

III期 自然堆積が進み、穏やかな窪地状となった地形に土坑やピットが検出される。ピット内や直上の堆積層から検出される土師器片から奈良時代～平安時代のもと考えられる。

IV期 戦後、客土をおこない農地として現在に至る。

以上の所見から、本遺跡は弥生時代中期に滞水する時期が存在する。自然地形の谷を人為的に掘削し、調査区内では確認できなかったが、何らかの施設で谷をせき止め、水を蓄える遺構の存在を考えなくてはならない。本遺跡の南に下る斜面には、かつて水田が存在しており、遺構の立地および性格付けとして溜井状遺構の存在が有力であると考えられるが、調査区の関係で断定するにはいたれない。今後の、周辺の調査に期待したい。

(塔鼻)



第120図 谷状遺構(SX001)土層断面図(1/80)

XXX 野田遺跡

調査面積 1,000㎡
地域 B

調査期間 95.10.02～96.02.29
調査担当 塔鼻光司

本調査は市道国分寺～野田線建設に伴う発掘調査である。国指定史跡豊後国分寺跡の北西に広がり、標高85m前後の野田面とよばれる河岸段丘面のほぼ中心を、東西方向に横断し建設される市道内において調査を行った。

今回の調査は昨年度に続き2次調査として行い、台地の東端部分を中心に調査区を設定した。

遺構：遺構としては、若干のピットと不定形土坑及び地層横転遺構が検出された。

遺物：ピット内よりチャート製の打製石鏃が1点、遺構検出面下位層（黄褐色土層）より旧石器（剝片）が12点検出された。

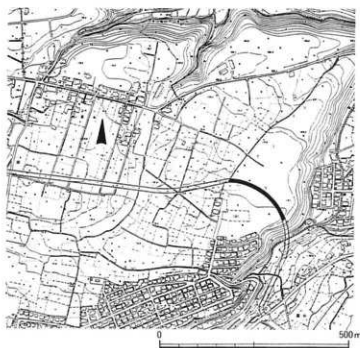


第121図 調査地点位置図

まとめ

今回の調査では、時期同定の的確な資料となり得るものが少なく結論を導くことは難しいが、当調査区北側に位置する野田山遺跡・下黒野遺跡の調査結果から、周辺地域に、旧石器時代～縄文時代の遺構の存在が考えられる。

(塔鼻)



第122図 調査地点位置図 (1/10,000)

貝塚山遺跡
野田遺跡

第IV章 受贈図書目録

1.調査報告書

宮城県	宮城県多賀城跡調査研究所		
	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第19冊	下伊場野宮跡群	1994
秋田県	秋田県教育委員会		
	秋田県文化財調査報告書第253集	東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅨ—古野遺跡—	1995
	秋田県文化財調査報告書第254集	曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 寒沢遺跡	1995
	秋田県文化財調査報告書第255集	県営はま整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—中の沢遺跡—	1995
	秋田県文化財調査報告書第256集	県営はま整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—家の下遺跡（1）—	1995
	秋田県文化財調査報告書第257集	弘田棚跡—第102次調査—生活圏形成30分道路県道大曲田沢湖線に係る埋蔵文化財発掘調査	1995
	秋田県文化財調査報告書第259集	遺跡詳細分布調査報告書	1995
群馬県	高崎市教育委員会		
	高崎市文化財調査報告書第134集	浜川芦田戸遺跡Ⅲ—高崎市総合水泳場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査—	1994
	高崎市文化財調査報告書第135集	高岡村前Ⅱ遺跡・高岡東中・村前遺跡 高崎市都市計画道路3-3-9(環状線)建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書	1995
	高崎市文化財調査報告書第136集	高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書9	1995
	高崎市文化財調査報告書第138集	東町Ⅳ遺跡	1995
	浅間B軽石埋没水田跡の発掘調査報告書	飯塚西金井遺跡	1994
	高崎市遺跡調査会		
	学校法人群馬女子学園群馬女子短期大学新校舎建設に伴う埋蔵文化財調査概報	中大類金井分遺跡	1992
	浅間B軽石埋没水田跡の発掘調査報告書	岩井町Ⅰ遺跡	1994
	元島名瓦井遺跡		1995
	高崎市文化財調査報告書第37集	大八木熊野宮Ⅱ遺跡 東京電力株式会社相伝用鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報	1995
千葉県	財団法人山武郡市文化財センター		
	山武郡市文化財センター発掘調査報告書第18集	南麦台遺跡	1994
	山武郡市文化財センター発掘調査報告書第19集	油井古塚原遺跡 丑子台1037地点	1994
	山武郡市文化財センター発掘調査報告書第20集	古内遺跡	1994
	山武郡市文化財センター発掘調査報告書第24集	道塚横穴・ヤグラ群	1995
	山武郡市文化財センター発掘調査報告書第27集	山中台遺跡	1995
	市川市教育委員会		
	平成6年度市川市内遺跡発掘調査報告	下総段分遺跡 第42地点(その2)	1995
東京都	文化庁		
	埋蔵文化財保護体制の整備充実について（報告）		1995
	国立歴史民俗博物館		

国分寺市教育委員会

国分寺市文化財調査報告第42集

武蔵国分寺跡Ⅱ 平成5年度発掘調査概報

1995

山武郡市文化財センター

発掘調査報告書第17集

砂田中台道跡(奈良・平安時代Ⅱ)

1994

発掘調査報告書第17集

砂田中台道跡(Ⅱ石器・縄文時代Ⅱ)

1994

日本製鋼所道跡調査会

武蔵国府関連道跡調査報告

日御地Ⅰ第1分冊 道橋跡編

1994

武蔵国府関連道跡調査報告

日御地Ⅰ第2分冊 道橋跡編

1995

武蔵国府関連道跡調査報告

日御地Ⅰ第3分冊 道物跡編

1995

武蔵国府関連道跡調査報告

日御地Ⅰ第4分冊 道物跡編

1995

武蔵国府関連道跡調査報告

日御地Ⅰ第5分冊 道橋・道物跡編

1995

武蔵国府関連道跡調査報告

日御地Ⅰ第6分冊 本文編

1995

都立府中病院内道跡調査会

武蔵国分寺跡西方地区武蔵台道跡Ⅱ

資料編Ⅰ

1989

武蔵国分寺跡西方地区武蔵台道跡Ⅱ

資料編Ⅱ

1992

武蔵国分寺跡西方地区武蔵台道跡Ⅱ

資料編Ⅲ

1993

武蔵国分寺跡西方地区武蔵台道跡Ⅱ

資料編Ⅳ

1994

武蔵国分寺跡西方地区武蔵台道跡Ⅱ

資料編Ⅴ

1995

武蔵国分寺跡西方地区武蔵台道跡Ⅲ

1996

富山県 財団法人富山県文化振興財団

能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告

—N1EJ-08道跡—

1995

福井県 福井市教育委員会

北陸銀行福井支店新築工事に伴う発掘調査報告書

福井城跡Ⅱ

1994

奈良県 奈良国立文化財研究所

飛鳥・藤原宮発掘調査概報25

1995

奈良県立橿原考古学研究所

奈良県道跡調査概報

(第1分冊) 1989年度

1990

奈良県道跡調査概報

(第2分冊) 1989年度

1991

奈良県道跡調査概報

(第1分冊) 1990年度

1991

奈良県道跡調査概報

(第2分冊) 1990年度

1991

宇陀郡人宇陀町後山古墳群

—18号墳—

1993

奈良県道跡調査概報

(第1分冊) 1992年度

1993

奈良県文化財調査報告書第67集

鳥谷山古墳
奈良県北葛城郡富田町史跡所在の終末期古墳

1994

奈良県文化財調査報告書第68集

新田町南藤井和山古墳群付二塚古墳出土の須恵器

1993

縄文時代晩期の土壌腐敗の発掘調査

奈良県大淀町・越前ハヤマ道跡

1995

	榎原考古学研究所資料室		
	第二・三次調査報告書	斑鳩 藤ノ木古墳	1995
	第二・三次調査報告書調査報告篇・考察篇・図版篇	斑鳩 藤ノ木古墳	1995
	奈良市教育委員会		
	奈良市埋蔵文化財調査概要報告書(H6)		1995
岐阜県	大垣市教育委員会		
	大垣市埋蔵文化財調査概要	大垣市文化財調査報告書第25集	1993
愛知県	名古屋市教育委員会		
	高蔵遺跡 第6次調査の概要		1995
	北区平手町2丁目志賀公園遺跡第2次発掘調査概要報告書		1995
	春日野町遺跡発掘調査の概要		1995
	(第7次)発掘調査報告書	石神遺跡・玉ノ井遺跡・高蔵遺跡	1995
	扇田町遺跡 発掘調査の概要		1995
	中区金山一丁目 古沢町遺跡発掘調査概要報告書		1995
	豊田市教育委員会		
	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集	京ヶ峰1号墳・谷下古墳	1995
	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集	西川1・2号竈址	1995
	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集	梅坪遺跡II	1995
	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集	池ノ表古墳付載築山古墳・キョウカ2号墳	1995
	稲沢市教育委員会		
	稲沢市内遺跡発掘調査報告書(Ⅰ)	東郷亮寺跡(VI)	1995
	財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター		
	瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第10集	水南中竈跡	1995
	瀬戸市教育委員会 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター		
	財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第9集	晩室跡第3・4・5号竈跡の調査	1995
滋賀県	大津市教育委員会		
	大津市埋蔵文化財調査報告書(24)	大谷南遺跡発掘調査報告書 —観音道161号(西大津バイパス)建設に伴う—	1994
	津市教育委員会		
	平成2年度団体営土地改良総合整備事業に伴う六太B遺跡・大古曾遺跡発掘調査報告		1991
京都府	城陽市教育委員会		
	城陽市埋蔵文化財調査報告書第26集		1994
	城陽市埋蔵文化財調査報告書第27集		1995
	城陽市埋蔵文化財調査報告書第28集		1995
	城陽市埋蔵文化財調査報告書第29集	一正道遺跡発掘調査概報	1995
大阪府	高槻市教育委員会		
	高槻市文化財調査報告書第18冊	芥川遺跡発掘調査報告書—縄文・弥生集落跡の調査—	1995

豊中市教育委員会	
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要平成6（1994）年度	1995
しょうじ幼稚園東側崖を中心とした地質調査報告書	1995
豊川市教育委員会	
県営ほ場整備事業平尾・財賀地区に伴う天間道跡発掘調査報告書	天間道跡 1995
三河国府跡確認調査(第5次)駒場道跡跡範囲確認調査	豊川市内道跡発掘調査概観Ⅳ 1995
熊取町教育委員会	
熊取町埋蔵文化財調査報告第23集	熊取町道跡群発掘調査概要報告書Ⅸ 1995
大阪大学文学部	
平成6年度科学研究費補助金（一般A）研究成果報告書	日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究 1995
兵庫県 神戸市教育委員会	
第5次・7次発掘調査概報	西求女塚古墳 1995
上沢道跡発掘調査報告書	1995
姫路市教育委員会	
御旅山13号墳	1995
加西市	
加西市玉丘古墳等整備基本計画報告書	1994
三原町教育委員会	
兵庫県三原郡三原町八木実原岡分地内淡路岡分寺発掘調査報告	淡路岡分寺 1993
和歌山県 和歌山市文化体育振興事業団	
和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第11集	鳴神IV道跡第4次発掘調査概報—地方改善整備施設事業鳴神地区道路改良工事に伴う調査報告— 1995
和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第12集	鳴神IV道跡第6次発掘調査概報—地方改善整備事業道路改良工事に伴う調査報告— 1995
和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第13集	太田・黒田道跡 第26次発掘調査概報 1995
岡山県 岡山市教育委員会	
足守藩武家屋敷跡—足守小学校給食棟、体育館建築事業に伴う発掘調査報告	1995
倉敷市埋蔵文化財センター	
倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第4集	王子が丘南麓道跡 1995
総社市教育委員会	
総社市埋蔵文化財調査報告14	石原後道跡 1995
広島県 東広島市教育委員会	
東広島市教育委員会文化財調査報告書第29集	西城町西城東諏訪神社周辺道跡発掘調査報告書 1995
財団法人 東広島市文化振興事業団	
高屋東1号道跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告第1冊 1994
田中道跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書2冊 1994
三永五反田道跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告第3冊 1994
広島県東戸手町道跡調査研究所	

	草戸千軒町道跡発掘調査報告Ⅳ	南部地域南半部の調査	1995
山口県	山口市教育委員会		
	山口市埋蔵文化財調査報告第52集	山口市内道跡群細分布調査小動地区	1995
	山口市埋蔵文化財調査報告第53集	宮の前道跡	1995
	下関市教育委員会		
	松ヶ坪道跡発掘調査報告書	松ヶ坪道跡	1994
	武久西原道跡発掘調査報告書	武久西原道跡	1995
徳島県	徳島市教育委員会		
	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 5		1995
香川県	高松市教育委員会建設省四国地方建設局		
	さこ・松の木道跡	一般11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告	1994
	さこ・長池Ⅱ道跡	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	1994
愛媛県	松山市教育委員会		
	松山市文化財調査報告書47	古瀬道跡—第10・11次調査—	1995
	松山市文化財調査報告書48	大峰ヶ台道跡—第4次調査—	1995
	松山市文化財調査報告書50	福音小学校構内道跡／弥生時代編	1995
	松山市文化財調査報告書51	辻町道跡—2次調査地—	1995
福岡県	福岡県教育委員会		
	一般国道3号線筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第2集	久良々道跡・倉島道跡・天神田道跡 福岡県筑紫野市大字筑紫所在道跡の調査	1995
	福岡県文化財調査報告書第121集	三毛門放生田道跡 福岡県豊前市大字三毛門所在道跡の発掘調査報告	1995
	福岡九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—34—	朝倉郡朝倉町所在長島道跡の調査Ⅰ（C地区）	1995
	福岡九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—35—	福岡県朝倉郡朝倉町杷木町所在・外之原道跡の調査（墳墓編）（外之原道跡Ⅰ）	1995
	福岡九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—36—	朝倉郡朝倉町大字大庭所在の大庭・久保道跡の調査	1995
	福岡九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—37—	甘木市所在・橘原Ⅰ縄文道跡	1995
	一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集	上唐原道跡Ⅰ 福岡県筑上郡大平村所在上唐原道跡の調査Ⅰ	1995
	一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第4集	徳永川ノ上道跡Ⅰ 福岡県京都郡豊津町大字徳永所在道跡の調査	1995
	一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第5集	徳永道跡福岡県京都郡豊津町大字徳永所在道跡の調査	1995
	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—33— 上巻	朝倉郡朝倉町所在の上の原道跡の調査Ⅲ	1995
	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—33— 下巻	朝倉郡朝倉町所在の上の原道跡の調査Ⅲ	1995
	一般国道3号線筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集	飯塚有造道跡 福岡県筑紫野市大字諸田所在道跡の調査	1995
	一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集	宇野代道跡 福岡県筑上郡新吉富村所在宇野代の調査	1995
	福岡県文化財調査報告書第120集	栗崎道跡 県道53号線久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告6	1995
	前北九州市教育文化事業団		
	北九州市埋蔵文化財調査報告書第143集	坂戸町道跡Ⅰ 第3地点—都市計画道路5号線建設関係—	1994
	北九州市埋蔵文化財調査報告書第151集	永夫丸道跡—金川郡市小川川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告3—	1994
	北九州市埋蔵文化財調査報告書第152集	瀧崎道跡3（第3地点）	1994

北九州市埋蔵文化財調査報告書第160集	上清水道跡Ⅲ	
北九州市埋蔵文化財調査報告書第161集	一九州縦貫自動車道関係文化財調査報告書一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第162集	カキ道跡(弥生時代版)	
北九州市埋蔵文化財調査報告書第163集	一九州縦貫自動車道関係文化財調査報告書一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第164集	井上道跡Ⅰ区一部(旧計画道跡第5号線建設に伴う中世集落跡の調査)	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第165集	中瀬道跡・井上道跡Ⅱ区一部(旧計画道跡第5号線建設に伴う中・近世集落跡の調査)	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第166集	能力土地区画整理事業関係調査報告Ⅶ	
北九州市埋蔵文化財調査報告書第167集	南方・上・田道跡第6・第7・第8地点	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第168集	能力道跡第18地点・守恒道跡第9地点	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第169集	香月道跡一第4次調査一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第170集	門川道跡Ⅸ一門川関字特定調査区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第171集	北方道跡一第3・4次調査一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集	飯沼阿道跡Ⅱ第3地点	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第173集	一部(旧計画道跡Ⅴ号線建設関係)	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第174集	瀬崎道跡Ⅳ第4・5地点	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第175集	門川道跡Ⅹ一門川都市小川川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第176集	長野道跡	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第177集	一長野道跡に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第178集	宗玄道跡	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第179集	向ヶ江道跡一長瀬新門司港大規模建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第180集	室町道跡第2地点一市営室町駐車場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第181集	穴生古屋敷道跡	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第182集	北方道跡第5・6次調査	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第183集	鬼ヶ原道跡一北九州市八幡東区天神町一	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第184集	中島道跡	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第185集	上栗原田道跡	1996
北九州市埋蔵文化財調査報告書第186集	長野・早川道跡第4地点一竹田川都市小川川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ一	1996
北九州市教育委員会		
北九州市文化財調査報告書第58集	南方道山古墳一北九州市小倉南区大字南方所在一	1994
北九州市文化財調査報告書第63集	下門道跡(第2次)一国庫補助事業発掘調査報告書	1995
北九州市文化財調査報告書第64集	小倉城跡Ⅰ 御所定所跡南東側堀の発掘調査	1995
北九州市教育委員会文化部		
北九州市文化財調査報告書第67集	北九州市小倉北区長野の岩海と花崗岩採石場調査報告	1995
大牟田市教育委員会		
大牟田市文化財調査報告書第46集	池集治道跡	1995
筑後市教育委員会		
福岡県筑後市大字四ヶ所所在道跡の調査	四ヶ所古四ヶ所道跡	1994
筑後市文化財調査報告書第10集		
筑後市文化財調査報告書第13集	久島尾道跡 福岡県筑後市大字久富所在道跡の調査	1994
豊前市教育委員会		
福岡県豊前市所在の修験道道跡群細分布調査報告書	求菩提	1992
豊前市文化財調査報告書第8集		
小都市教育委員会		
三矢土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ	沢古墳群Ⅱ	1992
小都市文化財調査報告書第79集 上下巻		

熊谷市地区開発整備事業関係埋蔵文化財調査報告3 小都市文化財調査報告, 第87集	市田地区道群(西島道3、4区)三次峠道群	1994
市田地区開発整備事業関係埋蔵文化財調査報告3 小都市文化財調査報告, 第88集	市田地区道群(科成4年度開道群)	1994
福岡県小都市協同所在道群の調査報告 小都市文化財調査報告, 第89集	福岡上内道群	1994
千鶴工業団地造成事業関係埋蔵文化財調査報告1 小都市文化財調査報告, 第90集	千鶴山道1	1994
小都市文化財調査報告, 第92集	津古道群 福岡県小都市津古所在道群の調査	1994
小都市文化財調査報告, 第93集	小都市山道群3福岡県小都市所在道群の調査報告	1994
市田地区開発整備事業関係埋蔵文化財調査報告4 小都市文化財調査報告, 第94集	市田地区道群 平成5年度調査群	1994
小都市文化財調査報告, 第96集	小都市山道群 福岡県小都市小都市所在道群の調査報告	1995
小都市文化財調査報告, 第96集	福岡上の山道群 福岡県小都市福岡所在道群の調査報告	1995
宗像市教育委員会		
宗像市文化財調査報告, 第31集	八所宮 福岡県宗像市八所所在道群の発掘調査報告	1991
宗像市文化財調査報告, 第33集	王丸跡 福岡県宗像市王丸所在道群の発掘調査報告	1991
宗像市文化財調査報告, 第35集	王丸跡Ⅱ 福岡県宗像市王丸所在道群の発掘調査報告	1992
宗像市文化財調査報告, 第37集	平等寺遺跡Ⅰ	1992
宗像市文化財調査報告, 第38集	宮地原上通・浦 福岡県宗像市宮地原所在道群の発掘調査	1994
宗像市文化財調査報告, 第39集	宮地原田原田Ⅰ 福岡県宗像市宮地原所在道群の発掘調査報告	1994
太宰府市教育委員会		
太宰府市の文化財第25集	筑前路分祀寺群 第4・8・9・13・17次調査	1995
太宰府市の文化財第26集	太宰府天満宮	1995
太宰府市の文化財第27集	太宰府佐野地区道群V宮ノ本道群7-2次調査	1995
太宰府市の文化財第28集	太宰府集坊群	1995
太宰府市の文化財第29集	太宰府集坊群 第133次調査	1995
那珂川町教育委員会		
那珂川町文化財調査報告, 第34集	カクチ古道群Ⅱ 筑紫郡那珂川町大字松木所在道群の調査	1994
那珂川町文化財調査報告, 第35集	中瀬路ノ元道群 福岡県筑紫郡那珂川町中瀬所在道群の調査	1995
那珂川町文化財調査報告, 第36集	山田西道群Ⅱ 福岡県筑紫郡那珂川町大字山田所在道群の調査	1995
津島町教育委員会		
津島町文化財調査報告, 第10集	福岡県筑紫郡津島地区に伴う発掘調査報告	1995
添田町教育委員会		
庄原道群	発掘調査群	1994
九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室		
九州大学埋蔵文化財調査報告(第四回以降編)	一九州大学筑紫地区道群一	1995
佐賀県 佐賀県教育委員会		
佐賀県文化財調査報告, 第113集	占野ヶ里 神崎工業団地計画に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告書(図説編)	1992
佐賀県文化財調査報告, 第113集	占野ヶ里 神崎工業団地計画に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告書(本文編)	1992
佐賀県文化財調査報告, 第117集	佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告, 第11	1993

佐賀県文化財調査報告書第119集	平原道跡1 本川防矢調御池事業関係文化財調査報告書1	1993
佐賀県文化財調査報告書第120集	平原道跡2 本川防矢調御池事業関係文化財調査報告書2	1993
佐賀県文化財調査報告書第124集	佐賀県農業基礎整備事業に係る文化財調査報告書13	1995
佐賀市教育委員会		
佐賀市文化財調査報告書第57集	東高木道跡Ⅱ-4区の調査	1995
佐賀市文化財調査報告書第58集	増田道跡Ⅲ-津留道跡2区-	1995
佐賀市文化財調査報告書第59集	原ノ町道跡Ⅱ	1995
佐賀市文化財調査報告書第60集	友直道跡Ⅱ7区の調査	1995
佐賀市文化財調査報告書第61集	野田道跡	1995
佐賀市文化財調査報告書第62集	大西原道跡Ⅱ-2区の調査	1995
佐賀市文化財調査報告書第63集	酒道跡1・2区の調査	1995
唐津市教育委員会		
唐津市埋蔵文化財調査報告書第61集	唐津市内道跡確認調査(10) 土地開発に伴う市内道跡確認調査	1995
唐津市埋蔵文化財調査報告書第62集	渡松本道跡(2)	1995
唐津市埋蔵文化財調査報告書第63集	徳蔵谷道跡(2)	1995
唐津市埋蔵文化財調査報告書第64集	「玄海特報」工事に係る文化財確認調査 古山道跡はか中野山道跡	1995
鎮西町教育委員会		
鎮西町文化財調査報告書第12集	町本場道跡・平心野道跡・ 石川・長興寺・福原長光道跡	1994
鎮西町文化財調査報告書第13集	名護川地跡周辺道跡/ ふるさとづくり特別対策事業に伴う発掘調査	1994
長崎県 大村市文化財保護協会		
公共下水道工事に伴う緊急発掘調査	富の原道跡	1995
大村市教育委員会		
大村市文化財調査報告書第19集	富の原道跡・小佐古石前墓群(地点Ⅱ) 発掘調査報告書	1995
熊本県 熊本県教育委員会		
熊本県文化財調査報告書第142集	白鳥平道跡 九州縦貫自動車道(人吉～えびの) 建設に伴う埋蔵文化財調査	1994
熊本県文化財調査報告書第143集	大久保道跡・上城野林地区所在の縄文道跡	1994
熊本県文化財調査報告書第148集	熊川原道跡 熊川農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	1995
熊本県文化財調査報告書第149集	宮門寺道跡	1995
熊本県文化財調査報告書第150集	松岡・飯塚・平山・笠野跡	1995
熊本県文化財調査報告書第151集	山川・飯塚群 現代河川道・山川 道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査	1995
本渡市教育委員会		
熊本県本渡市文化財調査報告書第6集	浜崎道跡(平成2～3年度本渡北上地区両側 事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)	1993
大分県 大分県教育委員会		
大分県文化財調査報告書第92輯	大分の装飾古墳	1995
一般道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(6)	飯山道跡	1995
一般道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	日田市高瀬道跡群の調査1 渡部神社東道跡・ 渡部家墓域・陣・原道跡道跡・高瀬・田道跡	1995

大分県竹田市穂葉川河川改修工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ	河内谷御茶屋跡・河内谷馬場跡	1995
大分県内道跡発掘調査概報Ⅲ	堂ノ間道跡他	1995
大分県立宇佐歴史民俗資料館		
大分県内石造文化財の現状と課題	一保存のための基礎調査概報一	1994
豊後国都甲佐の調査報告書第11号		1995
国東半島旧国村道跡群細分布調査概報	豊前町香々地庄2	1995
竹田市教育委員会		
国道502号改良工事埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ	野田川敷跡	1995
竹田地区南部道跡群Ⅶ	史跡岡崎跡周辺道跡群	1995
一般国道57号線(竹田拡幅)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ	戸上道跡・小坂道跡・大塚道跡	1995
平成6年度 史跡岡崎跡保存修理事業報告書	史跡岡崎跡Ⅱ	1995
平成6年度 史跡岡崎跡保存修理災害復旧事業報告書	史跡岡崎跡Ⅲ	1995
大分県教育委員会		
上津道跡一国道10号線大崎バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査概報(2)		1995
日出町教育委員会		
日出町文化財報告書第1集	安養寺古墳発掘調査概要報告書	1995
大分県香々地町教育委員会		
過ノ本道跡・御茶屋道跡・信重道跡香々地文化財調査報告書第1集	香々地の道跡Ⅰ	1994
別府大学付属博物館		
一大野郡三河町所在の旧石器・縄文時代道跡一	中見越道跡	1995
宮崎県 宮崎県教育委員会		
紅雲島地保全整備事業(時川地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書	上の坂第2・第3道跡	1995
紅雲島地保全整備事業(中込地区(橋原工区))に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書	地平・横道跡	1995
平成6年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書	南小島地区・遠山峠地区・妙見原・藤巻牧場地区・川久保・元中込地区道跡	1995
紅道島ノ内一の宮線(新洲府通線)改良工事に伴う発掘調査報告書	下別府一子ノ瀬跡	1995
一般国道218号椎田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	打田道跡・早口道跡・矢ノ原・廻田道跡	1995
紅道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書	学道道跡・八見道跡	1995
特別高圧線220KV 一瀬田田線新設工事に伴う発掘調査報告書	西尾・谷道跡・小坂第1道跡・小坂第2道跡・金剛寺坂第2道跡・阿部ノ木道跡	1995
小林市教育委員会		
平成6年度市内道跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 小林市文化財調査報告書第8集	出の山地区道跡本田地道跡(1次)市谷地区道跡	1995
延岡市教育委員会		
平成6年度市内道跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 延岡市文化財調査報告書第13集	黒土田道跡・赤木道跡第2地点・上瀬田道跡・平野道跡・上友野道跡・浄土寺山古墳	1995
西都市教育委員会		
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集	西都地区道跡 平成5-6年度宮田村基礎総合整備 バイパス工事(西都地区(西都原工区))に伴う 埋蔵文化財発掘調査概要報告書	1995
えびの市教育委員会		
えびの市埋蔵文化財調査報告書第15集	旧代地区道跡・上道代道跡・松山道跡・竹之内道跡 中川 町地区埋蔵文化財調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要	1995

福島県	銚郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
	研究紀要第1号	1994
茨城県	筑波大学歴史・人類学系	
	筑波大学先史学・考古学研究第6号	茨城県笠間市西田道跡発掘調査概報 1995
千葉県	銚山武都市文化財センター	
	財団法人山武都市文化財センター年報No10－平成5年度－	1995
東京都	朝ぎょうせい	
	文化庁月報 平成6年4月号	1995
	文化庁月報 平成6年5月号	1995
	文化庁月報 平成6年6月号	1995
	文化庁月報 平成6年7月号	1995
	文化庁月報 平成6年8月号	1995
	文化庁月報 平成6年9月号	1995
	文化庁月報 平成6年10月号	1995
	文化庁月報 平成6年11月号	1995
	文化庁月報 平成6年12月号	1995
	文化庁月報 平成6年1月号	1996
	文化庁月報 平成6年2月号	1996
	文化庁月報 平成6年3月号	1996
	朝第一法規出版	
	月刊文化財 4月号	1995
	月刊文化財 5月号	1995
	月刊文化財 6月号	1995
	月刊文化財 7月号	1995
	月刊文化財 8月号	1995
	月刊文化財 9月号	1995
	月刊文化財 10月号	1995
	月刊文化財 11月号	1995
	月刊文化財 12月号	1995
	月刊文化財 1月号	1996
	月刊文化財 2月号	1996
	月刊文化財 3月号	1996
	朝ジャパン通信社	
	月刊文化財発掘出土情報4	1995
	月刊文化財発掘出土情報5	1995
	月刊文化財発掘出土情報6	1995

月刊文化財発掘出土情報 7	1995
月刊文化財発掘出土情報 8	1995
月刊文化財発掘出土情報 9	1995
月刊文化財発掘出土情報10	1995
月刊文化財発掘出土情報11	1995
月刊文化財発掘出土情報12	1995
月刊文化財発掘出土情報 1	1996
月刊文化財発掘出土情報 2	1996
月刊文化財発掘出土情報 3	1996

八王子市郷土資料館

八王子市郷土資料館年報 平成 6 年度	1994
郷土資料館研究紀要	八王子の歴史と文化第7号
戦争と人々のくらし八王子市資料館年報	平成 6 年度

八王子教育委員会

郷土資料館資料シリーズ第34号	瀬沼三枝衛門日記 二
-----------------	------------

東京大学文学部考古学研究室

東京大学文学部考古学研究紀要第13号	1995
--------------------	------

早稲田大学考古学会

古代 第99号	1995
古代 第100号	1995

御時代や書店

時代や書店目録第114号	1995
--------------	------

御黒崎書店

黒崎書店古書目録第三十一号	1995
---------------	------

和佐野喜久生

文部省科学研究費による国際学術研究 東アジアの稲作起源と古代稲作文化	1995
------------------------------------	------

第一書房

第一書房古書目録№18	1995
-------------	------

世田谷区立郷土資料館

ジャの道は蛇	薬蛇の祭と信仰
--------	---------

保育社

日本の古代道跡49 大分	1995
--------------	------

神奈川県 海老名市

相模国分寺研究の先駆者 中山海吉	海老名市史叢書1
相模国分寺研究の先駆者	中山海吉—その人と業績(海老名市史叢書1)

川崎市公文書館

	川崎市史研究 第6号		1995
奈良県	奈良県立橿原考古学研究所		
	橿原考古学研究所紀要	考古学論改第19冊	1995
	奈良市教育委員会		
	奈良市埋蔵文化財調査センター 紀要1994		1995
	橿原市千塚資料館		
	かしはらの歴史をさぐる3	平成6年度埋蔵文化財発掘調査速報展	1995
	桜井市立埋蔵文化財センター		
	'95冬季企画展「縦向のマツリ」展		1995
愛知県	天理第学付属天理参考館		
	天理参考館報第8号		1994
	名古屋市長台考古資料館		
	名古屋市長台考古資料館年報12	1994(平成6)年度事業報告	1995
	御瀬市埋蔵文化財センター		
	御瀬市埋蔵文化財センター研究紀要第3輯		1995
	京鎌倉出土の瀬戸焼	御瀬市埋蔵文化財センター企画展	1995
	半田市誌編さん委員会		
京都府	「半田の戦争記録」	半田市誌別巻	1995
	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター		
	京都府埋蔵文化財情報第55号		1995
	京都府埋蔵文化財情報第56号		1995
	京都府埋蔵文化財情報第57号		1995
	京都府埋蔵文化財情報第58号		1995
	京都府歴史資料館		
	京都市歴史資料館年報No.13	(平成6年度)	1995
大阪府	八坂神社の古文書		1995
	京都市歴史資料館		
	京都市歴史資料館紀要第12号		1995
	堺長岡京市埋蔵文化財センター		
	長岡京市埋蔵文化財センター年報	(平成5年度)	1995
	財団法人枚方市文化財調査委員会		
	枚方市文化財年報14	(1992年度分)	1995
	枚方市文化財年報15	(1993年度分)	1995
大阪府	新修大阪市史編纂委員会		
	大阪市史第9巻		1995

兵庫県 神戸市教育委員会			
青銅鏡 Bronze mirror	堺堺呼から浮世松まで		1995
神戸市埋蔵文化財年報	(平成4年度)		1995
神戸市教育委員会・神戸市埋蔵文化財センター			
地下に眠る神戸の歴史展X			1995
和歌山県 和歌山市文化体育振興事業団			
和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1 昭和63(1988)・平成元(1989)年度			1992
和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報2 平成2(1990)・平成3(1991)年度			1994
岡山県 倉敷埋蔵文化財センター			
倉敷埋蔵文化財センター年報1 1993年度			1994
総社市教育委員会			
総社市埋蔵文化財調査年報5	(平成6年度)		1995
広島県 南山大学人類学博物館			
人類学博物館紀要第14号	入海日塚の入海式土器本館所蔵資料の再検討		1994
徳島県 徳島市教育委員会			
第15回埋蔵文化財資料展	阿波を語る 最近の発掘調査と徳島の縄文日塚		1995
愛媛県 松山市教育委員会			
松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ	平成6年度		1995
福岡県 北九州市立考古博物館			
研究紀要Vol. 2			1995
北九州市立考古博物館年報 平成6年度			1995
朝北九州市教育文化事業団			
研究紀要-第9号			1995
埋蔵文化財調査年報11	平成5年度		1995
宗像市教育委員会			
古代むなかた史をさぐる	福岡県宗像市文化財調査会資料5		1995
鞍手町教育委員会			
伊藤家家事筆記	自安政元年、享安政四年		1995
大分県 大分県教育委員会			
大分県埋蔵文化財年報3	平成5(1993)年度		1995
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館			
宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報			1994
遺宮の概要 平成7年度			1995
坂ノ市地区郷土史愛好会			
白水郎	会報第14号		1995
大分市大南地区文化財同好会			

落穂第53号		1995
大分市歴史資料館		
第14回特別展「城のある風景」図録		1995
別府大学		
別府大学付属博物館展示資料図録		1995
宮崎県 宮崎市教育委員会		
宮崎市の文化財		1995
宮崎県西部原古墳研究所		
平成6年度西部原古墳研究所 年報11号		1995
秋山日出雄・廣吉壽彦		
「元禄年間山陵記録」		1994
高老原実		
平和への道	戦後五十年瀬山文化活動の歩み	1995



文化財愛護シンボルマーク

ひろげた両手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ますぐみ）のイメージを表し、これを三つ重ねることによって、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

（昭和41年5月26日決定）

大分市埋蔵文化財調査年報 7

1996

発行日

平成8年12月31日

編集・発行

大分市教育委員会文化振興課文化財室

大分市 荷揚町2番31号

〒870 (0975) 34-6111

印刷

大分市府内町1丁目6-29

（国）中央印刷
